
ゆるい口ウきゅーぶ

ベガF91

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆるい口ウキゅーぶ

【ZPDF】

Z2220V

【作者名】

ベガF91

【あらすじ】

京子の強引で慧心学園の女子バスケ部のコーチをするはめになってしまった七森中の「娯楽部」の4人。口ウキゅーぶはロリアニメですが、まさかの百合小説です。なんていうか、ゆるゆりとクロスすると百合しか思い浮かばなかつたので……（^_^;）

小学生がやつてぐるー（前書き）

最近、戦いものばかり妄想していた自分がですが、たまにはスポーツのを書こうと思い書いた小説です。

小学生がやつてくるー

七森中の「娯楽部」の歳納京子、船見結衣、赤座あかり、吉川ちなみの4人はとある小学校に来ていた。

そこは慧心学園であった。

「どうどういたか…私たちの戦場!」

「違うだろ」

京子にシッコミを入れる結衣。

「うひひて警備員さんもいる…」

「すいーです…」

「はあ…なんでひつなつたのやら…」

さかの「ほる」と昨日のことだつた。いつものようにあかりとちなつは娯楽部の部室（元は茶道部の部室であったが廃部したため今は娯楽部の部室である）に向かつていた。

その部室の扉の前に京子と結衣の二人が立つていた。

「あれ？京子ちゃん、結衣ちゃん？」

「どうしたんですか？部室に入らないんですか？」

「実は…一人に大変重要なお知らせがあるんだ…」

「な、なに…？」

京子の言葉に息をのむ二人。京子がこんなことを言い出してきた。

「Jの部活は廃部になつた…」

「「えええー?」」

ポカッ！

「違うだろ！」

「うええん…」

「実は、3日だけ休部することになつたんだ」

「どうして？」

「美星先生が慧心学園の女子バスのコーチをしてくれつて頼まれて」

「美星先生って前、京子ちゃんたちの担任だった人？」

「そう、今あの人慧心学園の先生になつたんだ。それで私は断らうとしたんだけど京子が強引に引き受けちゃつて…」

「もう、京子先輩は…」

「というわけで、2人もコーチに行かない？美星先生の許可もとつ

てるし」

「私たちもいいの……？」

…というわけで4人は慧心学園に行くことになつたのだつた。ノリノリの京子に対しても結衣は京子が何かしないか心配してあかりとちなつは緊張気味であつた。

体育館に着き扉を開けたその先には…

「…………お帰りなさいませ、お嬢様！」

「え……？」

「これは……」

「おお！メイド服！…」

体育館に入った先には5人の小学生の少女たちはメイド服を着ていた。そんな光景を見た結衣とあかりとちなつは言つまでもなく驚きと戸惑いそれに対して京子は興奮状態であつた。

「君たちが女子バスケットの……？」

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆です」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉…ですか」

「ひなた、袴田ひなた」

「かーの…」

「「「「「あなたへお願いしますーお嬢様方ー」「」「」「」「」

「え？…」

「おー！私たちがまかせ…」

「お前は黙つてろーその…お嬢様つてやめてくれるかな…？」

結衣の言葉に少女たちが口々に話しあつた結果…。

「「「「「わかつましたーお姉ちゃんーー」「」「」「」「」

「はは…」

それでもまだ羞恥と恥ずかしがる結衣に対して京子はがっかりしていった。

「お嬢様がよかつたのになー」

「おー、お姉ちゃんたちお名前は？」

「私は歳納京子ー中学一年生だー」

「小学生相手に態度でかくなるなよ…。船見結衣、京子と回じへ中

学一年生です

「赤座あかり、一歳年下の中学生一年生ですか」

「吉川けなつです。あかりちゃんと同じ中学一年生ですか」

「あの、バスケ歴はいくつですか？」

「えりと、私が小学3年の1月からそれで今は…」

「お姉ちゃん、敬語とかやめようよ。歳は近いんだし」

ツインテールの女の子、真帆が結衣の腕にしつこついた。

「み、三沢さん…」

「真帆がまほまほって呼んで。それとみんなの1月さん付け禁止。ね、お姉ちゃん」

真帆とこう女の子は少し京子に似ていた。結衣は『お姉ちゃん』って呼ばれるのも恥ずかしくなった。

「その、お姉ちゃんって呼ぶのもやめてくれるかな…？」

「ええ…」れもだめなの？妹メイド系とかグッといい？」

(それは京子ならグッとするけれど…)

「私はグッと来たよ、真帆ちゃん！」

「本当に…よかつたよ、せよつたんがそつまつてくれて」

「ははは」

なんだかこの一人は妙に息が合っていた。それから話は止まる」ともなった。

「私はメイドも好きだけど魔女っ娘も好きだね」

「じゃあ、今度衣装用意するよー」

「おこ、やひやひ話区切らないか…」

「やうだよ、あんたはちゅうと下がって」

「」で眼鏡の女の子の紗季が結衣たちの前に来た。

「」めんなさい、真帆ちょっと張り切りすぎで」

「ああ、ここよ別に」

「あの、やうやくで申し訳あつませんが、」指導の方をお願いしてもよろしくどうが?」

左片方にリボンをつけている女の子、智花が熱心に「」指導をお願いしてきた。

「すみません、押し付けに」

「やうだね。じゃあ、着替えてくれる?それじゃあやつまつりや

「うだし」

「ええ、なんで？パンツなり心配いらなによ。ほり」

真帆は自分のスカートをめぐり、自分がスペツ履いていることを結衣たちに見せた。

「なつ！？」

「あわわ…」

「おお…！」

それを見た結衣とあかりとちなつは顔が赤くなってしまい、京子はもう興奮状態で止まらなかつた。

「みんなもはいてるよ」

今度は智花、紗季、愛莉の順番でスカートをめぐり、その後愛莉は恥ずかしくなつたのかしょぼんと落ち込んでしまつた。

「バカ真帆！愛莉嫌がつてんじやん！」

「いいじゃん、女同士なんだし」

「なんだかす！」元気のある子たちだね、結衣ちゃん

「あ、ああ…。やっぱり着替えてくれる？」

「そ、そりですよね…」

「まじ行くよ

「ええ？ じゃあ、またあとでねゆいにゅん、きょうたん、あかりん、
ちなたん」

5人は着替えるために更衣室に行つた。

「もう、あれでよかつたのになー」

「いいわけないだろ。ほら、私たちも体操服に着替えるよ

小学生がやつてゐるー（後書き）

あかりの影は薄くなるかならないか小説の進み具合によります（笑）

初日の騒動

「……はあ、初日からなんでこんな……」

「私はメイド服のままでよかつたのになー」

「いいわけないだろ」

そんな京子に呆れる結衣。4人は体操服に着替え終わり、ちょうど5人も体操服に着替えて結衣たちのとこに来た。

「「「「おまたせしましたー」「」「」「」

「あ、來た來た」

「「「「ようじくお願ひしまーす」「」「」「」

「おひ、私たちにおまかせー!」

「京子先輩が教えるんじやないの!」…

「なにかいつた?ちなつちゃん」

「ううん、何も」

「じゃあ、総合練習して、君たちの実力をはかるとしようか。オフエンスを2人、ディフェンスを3人に分けて…」

「おふえんすつてなに?」

オフローナスと聞いた真帆は頭にはてなが浮かんでいた。

「攻撃の」とだよ。ディフェンスは守り

「おおー、わすがもつかん」

「この中で綾花ちゃんが経験者のようにだね」

「はー」

その後も結衣はみんなにそれぞれの役割を決めていき、バスケの練習に取り掛かるとしたその時京子が結衣にこんなことを言い出した。

「アハハハ、愛莉ちゃんが高こよね。ディフェンスにしたら?..」

「　　「あー」」

「それも一理ある…って綾花ちゃん…？」

「えぐ…ふええええん…」

京子と結衣に会話を聞いた途端、泣き出し始めた。

「あ、愛莉ちゃん…!？」

「やつぱり…大きいんだ…でかなんだ私…」

愛莉が急に泣き出してしまい、結衣たちばかりか困惑してい

た。

「アイリーンー。おこにやったかにやると誕生日教えないかい？」

「やつよ」

「ねー。愛莉、トヤッショあるも」

そして紗季は結衣たちの愛莉のことを伝えた

「鳥長が「ハーフレックスなんです。背の」とこわれるとあんな感じ
」

「やつだつたのか…って痛ー！」

「あつたく京子は…」

「愛莉に4回生まれて三つともいるから…」

「それで…？」

「いやでないと誤魔化してましたんで」

結局、練習はどちらに終わってしまった、愛莉はなにとか泣き止んだ

「すみません…取り乱したりして…」

「いいよ」

「京子先輩があんなこと言つたから…」

「だつて」

「明日からひちやんと練習しよ」

「」「」「せー」「」「」「」

その後、9人で体育館の掃除をする。その時

「ん?」

「どうしたの、結衣ちゃん?」

結衣とあかりが見た先にはボールを手に持っている智花が「ゴールめがけてシュートをした。

「うわ…」

そのショートスタイルはとてもきれいだった。ボールはそのままゴールに入った。

「す、すいこよー智花ちゃんの今のショートー」

「うふ…すいくきれいだった…！」

すっかり、結衣とあかりは智花のショートに見とれてしまった。

その後、結衣たちは美星に車で送つてもいいことに

「久しぶりだね、あかり」

「美星先生もお元氣で」

「それとあんたは初めてだね」

「は、はじめまして、吉川ちなつです」

「京子から聞こへるよ。//アクラム似の女の子がこもって

「さよ、京子先輩! なに教えてるんですか!」

「だつてー」

「ははは。で、あの子たちなぜいつ?」

「まだあまつ……」

「『』やふふ、そつか…残念」

「でも、一人氣になる子がこました…」

結衣が言つ氣になる」と言つたら智花のことだった。まだあの智花のショートの「」とは忘れられなかつた。

「ふーん、じゃあ「」チ続けてみる?」

「3回の約束でしょ?」

「私は弓を放けてもここですけど」

「 じら、 京子」

そんな5人の他愛もない話は続いたのだった。

I | 田舎のパーク（繪書き）

「うーん、この小説に靠はいるかいらないか…。

2日目、七森中の娯楽部の4人、結衣、京子、ちなつ、あかりは慧心学園初等部の女子バス部のコーチに来ていた。仕切りは結衣である3人は女子バス部のサポートとしての役割を果たしていった。

「じゃあ、シューートとバスの練習に分けようか」

結衣の指導の下、真帆と紗季はシューート練習、智花とひなたと愛莉はバス練習に分かれた。バス練習では智花とあかり、ひなたとちなつ、愛莉と京子の組となつた。

「智花ちゃん上手」

「いえ、私もまだまだ」

「やー」

「わ…っと」

「おつやー..」

「さや…つとえい..」

それぞれの練習が終わつた後、5人で合同練習をする。「…。その練習ぶりを見て、結衣はこんな評価をしていた。

（なるほど…確かに智花ちゃんは経験者だけあって上手いな…。真帆ちゃんと紗季ちゃんは初めてとはいえ、少しずつ上達していくな

…。愛莉ちゃんとひなたちゃんはまだ時間がかりそうかな…）

そして、練習が終わり休憩に入った中、結衣は智花に練習メニューを見せてもらっていた。

「これが練習メニューだね」

「はい」

「基本をちゃんと抑えるメニューみたいだね。でも、もう少し上達できる練習も少し付け加えた方がいいかな…」

「やつですね…はつ…」

なぜかここで智花は結衣に少しずつ近づいてたこと気が付き、その場から離れたのだが、結衣はどうしたのかって顔をした。その時、真帆が上から結衣に抱き着いてきた。

「あーー！特訓メニューだ」

「わー！真帆ちゃん…」

（なーー、いくら小学生でも…結衣先輩は…ーー）

これを見たみなつに負のオーラが漂ってきて、それに気が付いたあかりが声をかける。

「じつじたの、ちなつかさん？」

「う、ううう何も…ーー」

「ねえねえ、ゆいにやんーす」に特訓で私たちを強くしてよ

「え？」

「一時間にレベルが3上がるすると…3日でレベル18…ねえ、
レベル18つてどれくらい?地区大会優勝レベル?」

「あはは…。それは無理だよ。いくら3日で地区大会なんて…」

「えー?」

「でも、」の調子で続けたら真帆ちゃんだつてもつと…」

「困るよー。」

「真帆ちゃん…?」

いきなりの真帆ちゃんの大聲にびっくりした結衣。それを聞いた京
子たちも驚いていた。

「どうしてー?ゲームなら一時間でレベル3くらいこくへのこ…」

「いくじりゲームができるも、今は無理だよ…。でも一か月間続けれ
ば強く…」

「一か月じゃ待てないよー。」

「あ、そんな」と言われても…」

智花に視線を向けるも何も言わずにそっぽを向いてしまった。

「...」

「あ…！」

真帆はそのまま体育館を出ていつてしまつた。

その後、コーチを終えた4人は更衣室で着替える中…。

「なんで真帆ちゃんなんだ？」

「よつほどバスケに思い入れでもあんのかな…？」

先輩はこれからもコーチ…

「それは…」

結衣ちゃん、なんか細切れか？」

一
え?
」

あかりから紙切れを受け取り、読んでみるとそれは『今すぐ女子バースの「一チをやめる』』といつ警告の手紙だった。

「誰だ？」
「こんな」

I田田の「チ」（後書き）

なんだか主人公が結衣になりそつな…

女子バスケ部の裏側…（前書き）

ちょっと設定にオリジナルを付け足しましたので…」これは察していく
れば幸いです。

女子バスケ部の裏側…

いよいよ、コーチの最終日となり、慧心学園へと足を運ぶ七森中の娛樂部の4人。

「今日で終わりだね」

「INのまま続けてもいいんじゃない?」

「いや、そういうわけには…」

「あれ?誰かが…」

ちなつが指差した方を見ると、小学生の5人の男子がならんでいた。

「おい、女バスのコーチたちだろ。話がある」

そういうわけで、4人は5人の小学生男子に体育館の裏側に連れて行かれた。そして、その5人からの話によると男子バスケ部のメンバーで、昨日の紙切れを書いたのは自分たちだといった。

「君たちがあの紙切れを…」

「今すぐ女子バスケ部のコーチをやめろ…そもそもなれば…」

「な、なんかあかりたち、小学生たちに責められてる…」

「…やめろって今日で女子バスケ部のコーチは終わりだよ」

「 「 「 「 「えー?」 」「 」「 」

「 3日約束だしね」

「 も、そつか…」

「 なんだよ竹中、 脅かすなよ…」

「 だつて真帆がすゞ」 」「 チがいぬつと自信満々だつたから… じゃあ、 試合には…」

「 試合…?」

「 なんの」と…?」

男バスの話がうまく合わない。試合とはいつたい何のことなのか結衣たちは男バスの男子から話を聞いてみるとことにして、するといんなことを言い出してきた。

「 今度の日曜日に俺たちと女子バスケ部で試合をするんだよ」

「 ええー?」

「 あなたたちはそのためのチークだろ?」

「 そんな話、 美星先生や女子バスの子たちから何も…」

美星にはただ、 「チークを3日間やつてくれって言われただけで男バスとの試合をするなんて一言も言われてもいなかつたため、 結衣たちは驚いた。 でも、 いったいなんのための試合なのかは知らないた

め、男バスに聞いてみる」と。

「でも、なんで女バスと試合なんて…」

「体育館の練習場所をかけてだよ」

「体育館をかけて…！？」

「俺たちは昨年の地区大会で優勝をしたんだ。でも、実力はまだまだだから練習したいと思ってる…だけど、女バスが練習で使ってるから駄目だつて…。それで顧問に相談したら今度は美星とけんかして、いつの間にか試合で決めよつて話になつたんだ」

「でも、一緒に練習しようつて思わないの？」

「やうだよ…」

「あんなへタクソな奴らと練習なんてできるか！アイツらのバスケなんて…ただの遊びじゃねえか！」

そんな竹中の話を京子は腹が立つてこんなことを口に出した。

「なんだよそれ…へタクソだからバスケをするなつてことか…？」

「そりゃあ…」

「じゃあ、君たちだつてへタクソだから入るなつて言われたらいざつ思つんだよー！」

「そ、それは…」

「バスケは勝つためじゃなく楽しむためじゃないのかよー?」

京子の怒りに少し呪を呪さず黙バスの子たちを見て結衣は止めて入った。

「京子、落ち着けよー。」

「だつてー結衣もむかつくと思わないのかよー?」

「京子の気持ちはわかるけど…」

「じゃあ、なんで止めるんだよー?」

「私らはもともと美星先生に3回聞コーチを頼まれ、それに試合するなんて聞いてもいないし、私は利用されたんだぞ。そこまで私は首を突っ込むわけにはいかないよ」

「だけど…」

そんな京子を差し置いて、結衣が一喝した。

「君たちの向上心は眞うけど私たちほどの味方じゃないし…」

「あなたたちがその気になれば女バスの勝利も…」

「そんな3回聞くでできるわけないよ…」

「そつか、だよな。なら今日は解放してやるよ」

男バスの5人はほつと安心したかのように結衣たちを解放した。その後、結衣はこんなことを言い出しつづいた。

「京子、あかり、ちなつかやん、いじは帰ってくれないか?」

「え...?」

「結衣ちゃん...」

「そんな...本当にいいんですか!-?」

「あの子たちは私が全部話すから...」

「結衣...-ほんとにいいのかよ!-?あの子たちを放つておくれの?」

「私たちに関係ないし...別に3日間だけの約束だろ...」

「...もう勝手にじりよ-.」

そういうつて京子はそのまま去つて行つてしまい、そのあとをあかり、とちなつは追いかけていった。その後、結衣は一人で体育館に入り、その先に5人の女バスの子たちがいた。

「あ、ゆいにゃん!」

「船見さん...」

女バスの5人はすぐさま結衣のところへ行つた。

「よかつた...来てくれないかと思いました...」

「昨日は『じめんね、ゆいに』やん…ってあれ？他の3人は？」

「あの、船見さん…3日約束ですが…」

「試合があるんだってね」

「え…！」

結衣の言葉に驚き、どうしてそれを…って結衣に聞いてみると。

「さつや、男バスの子たちから聞いたよ。『じめん、君たちを3日で男バスに勝てるような練習なんて無理だよ。もつとほかの方法で何とか…』

「他の方法なんてないよ…あたしたちには『ゆいに』やんたちしかいな
いよ…ねえ、ゆいに』やん…！」

「…」めん、それに私たち部外者だし…」

「そ…そんな…ひどいよ…！」

「ま、真帆…！」

真帆はそのまま、体育館から出でていった。そのあとを紗季は追いかけていった。

「船見さん…最終日の『一チ…」

「…うん、今日が最後だし…」

結局、結衣は一人でコーチをし、女バスの最後のコーチを終えた。その後、美星に車で家まで送つてもうひとつ途中、男バスとの試合のことを話した。

「結局、私たちを利用してたんですね？」

「本気で勝ちたかったからに決まってるだじょ？」

「かわいそうですよ。あんなに期待持たせちゃって……それに3日間で強くなんて無理ですよ……」

「……結衣はさ、6年生の時にバスケしてたよね？」

「は、はい……」

「あんた、あの時何があったの？途中で放り投げちゃうなんて……」

「……先生には関係ありませんよ……」

「……そう、そういうえばさ、気になる子がいたって言つてたよね？その子も見捨てちゃうの？」

「……」

そのまま、結衣の家につくまで無言のままだった……。

すれ違う道で…（前書き）

やつてしまつたぜい… - 口づきゅーふでも丘の方向へと突っ走つてしまひゅー！全国の嵐×智花が好きな方々へ、大変申し訳ございません…自分の方の妄想が止まらない…！

すれ違つ道で…

最後の「一チの翌日、結衣と京子の教室にて…

「本当によかつたの…？」

「…」

「あの子たちを放つておいて本当にいいの…？」

ガタツ

「あ…」

結衣は突然立ち上がり、そのまま教室を出ていってしまった。そんな様子を同じクラスである綾乃と千歳は見ていた。

「どうしたんやろ、船見さんと歳納さん…」

「喧嘩でもしたのかしら…？」

そして放課後、いつものようにあかりとちなつは娛樂部（元茶道部）の部室に来たのだが…

「あれ、結衣先輩は…？」

「今日は帰るひだる」

「結衣ちやん…」

そして、部活を休んで自分の買い物を済ませた結衣は……

「本当によかつたのかな……？あれで……」

あの後から女バスのことが気になっていたのだった。昨日、美星に言われた通り、『気になつた子を見捨てていいの？』……湊智花を見捨てていいくのかと。そんなことを考へてみると……

「「あ……」「

」「ひで、智花ちやんただのひだつた……。

「と、智花ちやん……」

「船見さん。あ、奇遇ですね……」

「今日は部活はいいの……？」

「はい、今日はお休みで……」

「ちよか……」

「ふ、船見さんは……？」

「ちよか……」

「ちよかですか……では

「うん」

そのまま一人はとおりすがつた。なのが、結衣は何を思ったのか、立ち止まつて「こんな」とを言い出した。

「と、智花ちゃん…」

「は、はい…」

「その…ちょうどあかりも帰つてきてると連つしあかりの庭でバスケの練習しない?ちょうどゴールとボールは用意してるし」

「いいんですか?」

「うん」

すぐさま、結衣はあかりに連絡し、智花を連れてあかりの家に向かつた。そしてあかりの家に着いた。

「結衣ちゃん、智花ちゃん、いらっしゃい」

「「あんね、あかり。急に来ちゃって」

「うん、平氣だよ」

3人はすぐさま庭に行き、結衣は準備をし、あかりと智花はいろいろと話し合っていた。

「智花ちゃんつて日本舞踊や茶道の稽古をやつてるんだ

「はい、両親から習つてます」

「ちなつちやんも茶道やってるから、今度一緒に教えてもらつてみたら?」

「今度機会ありましたら

「智花ちひちゃん、準備できたらよ」

結衣はボールを智花に渡し、あかりは二人のためにお茶を取りに行くため台所に向かった。

「じゃあ、フリースローの練習を…」

「あの、結衣さん!」

「なにかな?」

「わ、私と一対一で勝負してください…」

「え…?」

いきなりバスケで勝負をしきなんていいだしてきて結衣はびっくりした。

「もし、私が勝つたら、コーチを続けてください。お願いしますー。」

「あ…」

「コーチを続けてほし」と思つ智花を前にして、結衣は断るわけにもいかないので…

「うそ、いいよ」

そういうて、結衣はゴールを調整して、智花にルールを説明をした。

「ルールは智花ちゃんがゴールを一度でも決めたら勝ち。私はジャンプ禁止で…」

「や、そんな！ハンデなんていりません！」

「ハンデはゲームを平等にするためにあるんだよ。じゃ、はじめようか」

そして結衣の「一チを掛けた勝負が始まった。すると、智花は素早い動きで結衣を追い詰めていった。

（な…す”…）

さすがの結衣もびっくりした。小学生とは思えないくらいの動きで、相手に油断も隙を与えないプレイだった。

（こんなにうまいなんて…でも、ジャンプはしないな…）

バッ

「あー」

智花の隙を見て、結衣は智花からボールを奪つた。

「まずは一本はとったね」

「ま、まだまだ！」

すぐさま、また勝負は再開するも、何度も何度も結衣はボールを奪つてばかりだつた。

「わのそりあきらめん?」

「そんな!だつて、時間制限はないんだもん…あ…ません…だから、あきらめません!…」

(す)い子だ…(レ)まで真剣だなんて…)

そんなバスケ勝負も終わり、結局智花は「ゴールを決めれなかつた。

「はあ…」

「ごめんね、手加減したら智花ちゃんに悪いし…。あの時ジャンプしてたら私は負けてたよ。なんでしなかつたの?」

「それは…」

「?」

「結衣ちゃん、智花ちゃん、お茶持つてきたよ」

「ありがと、あかり」

ここでは3人はお茶を飲み、結衣は智花にバスケのことを聞いてみた。

「智花ちゃんは、どうしてそんなにバスケで真剣なの?好きだから?」

「それもありますが、私がバスケできるのはみんながいるからです」

「みんなって女バスの?」

「私去年まで慧心の生徒ではなかつたんです。バスケのことになると負けず嫌いになつて、どうしても勝たないと気が済まなかつた…。毎日練習して、みんなにも教養したんです。それで私は孤立しました。当たり前ですね。勝ち負けにこだわつてみんなのことを考えなかつた。その学校にはいられなくなつて慧心に転校してもずっと一人でいました。みんなと何を話せばいいのかわからなくて…。でも、ある日の体育の授業で真帆と竹中君が喧嘩して…」

「男バスのあの子か…」

「男女対抗でバスケ勝負をして、結局ひとりで脚気回して、またみんなにひかれちゃうなつて思つてたら…」

『ねえねえ、すごいね、バスケつて!私にも教えて!…もつかん!』

「それで女バスを作ろうつて話になつて、真帆が幼馴染の紗季を誘つたんです。最初はのりきではなかつたんですが、真帆の説得で紗季も入つたんです。その後、愛莉とひなたも入つてくれて、晴れて女子バスケ部になつたんです」

「そなんだ…」

「また嫌な私が出でくるかもつて心配しましたけど、すく楽しか

つた…。みんなが教えてくれたんです。勝ち負けよりも大切なものが
があるって」

「智花ちゃん…」

智花の話を聞いて、結衣は昔の自分を思い出した。昔自分も智花と同じようにバスケをやめてしまったな…と。自分も強さばかり求め
るばかり、周りからひかれてしまい、結局結衣はバスケに関わらな
いと思いやめたのだった。

「でも、男バスと試合して、女バスはどうするの?」

「その時はやめます」

「え!…?」

「もうバスケに関わりません。バスケがなくなつても、みんなとい
れば…」

「…本当にいいの?好きなバスケを…」

「バスケは好き、でも一番大事なのは5人でいられる場所だから」

「…」

「…最後にもう一度、結衣さんとあかりさんに会えてうれしかった
です!–京子さんとちなつさんとも会いたかったんですけど…」

智花はその満面な笑顔を結衣とあかりに見せた。その後、智花にシ
ヤワーを貸してやり、智花は自分の家に帰つて行つた。

「…」

あかりの家に戻ると、玄関にはバスケットボールが転がっていた。
それを見た結衣は…

「結衣ちゃん、今日夕飯は…」

「あかり、ちよつと智花ちゃんのところに行つてくる」

「え？」

結衣はそのまま家を出て、智花を追いかけていった。そして、歩道橋を渡る智花を発見し、智花に声をかけた。

「智花ちゃん…」

「…結衣さん…？」

「やめないで…」

「え…？」

「バスケをやめちゃダメー！」

「あ…」

「もうバスケはやめようと思つてたけど…無理なんだ…！君を見過
ごせなくて…！だからやめないで。バスケができる場所がひとつし
かないなら、手放しちゃダメだよ…！あんなすごいショートを打て

る君が簡単にやめるなんて言わないで

「…私だつて…やめたくないです…でもやめないと守れないんです…私の力では一番大切な場所を守るので手一杯だから…！」

「守つてあげる…」

「え…？」

「私が守つてあげる！君のバスケも居場所も…！全部守つてあげるから。まだ男バスに勝てる見込みはないけど…でも、智花ちゃんはすごい才能がある。まだ勝機があるよ」

「…えぐ…「ええん！」

結衣の言葉でうれしかったのか、智花は泣き出してしまった。結衣はそのまま、智花の頭をそつとなでた。

「泣かないで…。私も全力をつくすよ…」

すれ違つ道で…（後書き）

やはり百合の方向へと突っ走ってしまいます僕…。やむに困ったことがひとつ…智花のふたつ姉じいじょ…。同じじやあなんかあれだし…。

「一チ再び！

その夜、京子は自分の部屋で同人誌を描いてた頃…

ピリリリリリ

「ん？」

誰かからメールが来て、携帯をとつてそれを読んでみると…

『今日は無視して悪かった。改めて考えなおして、またあの子たちのコーチをしようと思うーだから、また一緒にあの子たちを指導に付き合ってくれる？ 結衣』

それは結衣からのメールでまた女バスのコーチをやることだった。最初は少し驚く京子であったが、次第にうれしい気持ちでいっぱいになつた。

「まつたく…」

ため息をついて、そのまま返信して、内容はもううんオーケーのメールだつた。

その後、このメールはちなつにも来て、ちなつも喜んで引き受けることに。

そして、結衣は美星のアパートに来ていた。

「ハハハ」

ドアが開き、ジャージ姿の美星がいた。

「ん？ どうしたの？」

「あの、男バスの試合のデータとかってありますか？」

「お……ふふ

美星はにやついてすぐに男バスの試合の映像が入っているDVDを結衣に渡した。

「遅かれ早かれもう準備はしていたさ」

「ありがとうございます」

「で、試合勝てそう？」

「…確率は低いです。でも、まだ可能性はありますー！」

「…ふふ、あの頃の結衣が戻ってきたんだね」

その翌日、七森中の娛樂部4人は慧心学園に来ていた。

「いやー、結衣がまたやつてくれてよかつたよー」

「まあそれは…」

「バスケ魂がよみがえったの？」

「…まあね…」

「よかつた」

結衣がまたバスケを始めてくれてとてもうれしそうだった京子であった。そして、体育館に着き、中に入つていいくと…

「「「「お帰りなさいませ、お嬢様！」」「」「」

「あ…」

「また…」

「メイド服だーーー！」

女バスの5人がまたメイド服で4人を出迎えてくれていた。結衣とあかりとちなつは苦笑いでいてその反面、京子は興奮していたのだった。そして、結衣は気を取り直して…

「えつと…、」の間は「めんね。あんなひどいことを言ひやがって。あつと試合は勝たせてあげるから」

「しようがないなー。許してやるよ、ゆこちゃん」

「真帆ちゃん…」

「私たちも、もつともつと練習しますから」

「あたしも頑張ります」

「おー、ひなもせぬー」

「結衣さん、京子さん、あかりさん、ちなつさん、改めてみなしへ
お願いしますー！」

「おひー。私らにお任せって智花ちゃんいつからアドの前で呼
ぶよつになつたんだ…？」

「昨日、こりこりあつてね。じゃあ、練習はじめるか」

すぐさま、9人は体操服に着替えて、バスケの練習を始める」と。
…。智花と愛莉とひなたは「ランニングをする」と。それをあかり
とちなつがサポートする」と。あの真帆と紗季はショートの練
習をする」とになつた。指揮するのは結衣と京子であった。

「じゃあ、」の距離からショートをしてみて。今日から試合までそ
の位置でショートをするよつて覚えておいて」

「少し遠くないですか？」

「大丈夫だよ。ショートを打つてみて」

「はー」

言われた通りに紗季はゴールに向かつてショートを打つた。しかし、
外れてしまった。

「あ…」

「あーおしこなー」

「大丈夫。この調子で。じゃあ、今度は真帆ちゃん」

「了解！」

真帆もショートをゴールめがけて打った。

「入れ！」

しかし、これも外れてしまつた。真帆はしょんぼりしていたが…
「ゴールにどぞいとるから大丈夫。あとは基本のフォームを思い出
して」

「膝をやわらく… ですよね」

「うん。じゃあ、私はランニングしてる子たちを見に行くから。京
子、この子たちの指導は任せた」

「うーーー！」

結衣は体育館の外にでて、智花たちの様子を見に行くとそこには…

「ひなた、しつかりー！」

そこにはランニングをしていたひなたが倒れていた。それを見た結
衣はすぐさまひなたのそばに行つた。

「ひなたちゃん！大丈夫！？」

「結衣ちゃん、『めんね…。ひなたちゃんが無理してゐのをあかりたちが気づかなくて…』

「どうしたんだ！？」

その騒ぎを聞きつけ京子が飛び出してきた。

「ひ、ひなたちゃん！？」

「…大丈夫…だよ…お姉ちゃん…」

「なーす、すぐに保健室に…！」

何が起きたのか、京子はすぐにひなたをおんぶつてダッシュで保健室へと向かった。それを見た結衣たちは呆気にとられていた。

「京子の奴、どうしたんだ…？」

「さあ…」

そして、ひなたを連れて保健室に向かって京子はとこうと…

「ひなたちゃん！すぐに保健室に連れてくから…」

「いやーいやーいやー 大丈夫。お姉ちゃんの背中で少し元気になりました」

「やつか

その後、下駄箱に到着して、靴を脱いだりするが、靴ひもがきつ

く結んであるためなかなか脱げれなかつた。

「ひなたちゃん、わらい。少しの間降りてくれるかな……？」

「だめーー。」

「え、どうですか……？」

「なぜならひなさお姉ちゃんの背中が腋に入りました」

「それなら仕方ないか……。でも……」

「ひなたー？ お前何やってるんだよー。」

すると、今度は田の前に以前、会った男バスの竹中がいた。

「おー、竹中」

「てか、あんたー」「一チを終わつたんじゃないのかー。」

「わらいな、わけあつて続かる」としたんだよ

「ふやけるなー早くひなたを降ろせー。」

「わらいこ、これもわけあつて……」

「あー怪我したのか……？」

「おー、してない」

「そっか、よかつた……」

竹中の反応を見て、京子は『まほーん』と叫び、そのあとこんなことを言い出してきた。

「わては、ひなたちやんのことが好きなんだろー？」

「な！？ちばーよ！と、とにかく！あんたたちが女バスのコーチをしても俺たちが勝つ！あと一週間で廃部だ！あがいても無駄だ！はつはははははー！」

竹中が去りうとした瞬間、京子は竹中を呼び止めた

「待ちなー」

「なんだよ……」

「靴を脱がしてくれませんか？」

竹中に靴を脱がしてもらい、保健室へと向かっていった。そして、京子はひなたに竹中のことで話していた。

「竹中君ってひなたちやんのこと好きなのかな？」

「うふふ~」

「あ、なんでもない。着いたぜ

保健室が見えて、保健室に入つていった。

「失礼しまーす…」

そこには容姿はレイヤードのショートヘアと縁無し眼鏡をかけた物腰の柔らかい理知的な大人の女性が椅子に座っていた。きっと保健室の先生だろうと思っていたが、その大人びた姿を見て、京子は見とれていた。

（うわ…すげー美人…）

「あらー、どなたかしら」

「えっと、私は以前、美星先生にお世話になつた…」

「あー、バスケの「一チに来てる4人のうちの1人ね」

「「」の子が具合悪くて…」

「おー、冬子」

「くすっ、あなたも無垢なる魔性の餌食みたいね」
イノセント・チャーム

「え?なんすかそれ…」

「無垢なる魔性…。その子のふたつ名よ。私…生徒にあだ名をつけるのが好きなの…」

そして、冬子は京子に女バスのそれぞれのふたつ名を紹介していく。愛莉は七色彩薺^{ブリズマティック・パド}、真帆は打ち上げ花火^{ファイヤー・ワーカス}、紗季は氷の絶対女王政^{アイス・エイジ}。それぞれのふたつ名を聞いて興味を沸いた京子は『智花ちゃんは?』と聞いてみたが…

「智花ちゃんはまだ決まってないんだけど…」

「やつですか…」

冬子は少し寂しそうにほほりし、京子も少し残念そうな表情を浮かべた。
そして、冬子はこんなことを言ひ出しあきた。

「よければあなたにもつけてあげようかしら…以前は…」

「歳納京子でーす」

「じゃ、京子ちゃんも考えておくわ」

「はいー。」

なんだかんだで杏子はひなたを保健室のベッドで寝かせた。

「お姉ちゃん」

「なにかな?」

「ひな、終わりたくない。でも、ひなバスケへタクソ。足遅い。シ
コードどどかない」

「…最初は誰だつてそうだよ。たくさん練習してうまくなるんだよ。
だから、ひなたちやんもうまくなれるよ。だから明日から練習は
厳しくなるけど、大丈夫かな?」

「おー、どんとこ」

『...な』

番外編 まりちゃん争奪戦！？智花vsかなつ（前書き）

ついでひとつ番外編を描いて思って書いて書きました！

番外編 まりちゃん争奪戦！？智花VSまなづ

休みの日、結衣はいつも3人と付け加えて智花、真帆、紗季を自分のアパートに招待した。そして、智花と真帆と紗季に親戚を紹介した。

「この子が私の親戚のまりちゃん」

「うわー、ゆにちゃんに雰囲気似ていてかわいいー」

「かわいいですね」

「えつと…りんりん」

「え、こひら…」

智花がまことに挨拶をすると照れくさうに挨拶をするまり。すると、智花の方に視線を向けてじいっと見つめていた。その後、まりは結衣に声をかけた。

「お姉ちゃん」

「ん？」

「あのね…」

なにやら結衣に何かを話してみるようだが…。そして、結衣は京子とあかりと真帆と紗季を呼んでこんなことを話していた。

「//ハクるんが来たつてびつべつしねやうだ……」

「あー、智花ちやんなんか雰囲氣的に似てるよね……」

「//ハクるんとあの魔女つ娘//ハクるん…へゆこにやんたひも見てるの…?」

「あー、京子が見てるんだよ」

「くえー もよーたんが見てるんだー」

「うふ。真帆けやんも見てるの?」

「うふー。」

「はあ… 真帆つたら…」

そんな真帆を見た紗季は呆れて結衣とあかりに「んな」と話をした。

「実は、真帆も//ハクるんが大好きなんです。だからトモにいつも
コスプレさせてるんです」

「わうなんだ…」

「智花ちやんも大変だね…」

「よーし、もつかん…//ハクるんのコスプレを…」

「あ…。」

真帆は智花を連れていった。そして…戻ってきて…

「まつりーんー//リクるんだよーー！」

真帆が連れてきたのは//リクるんのコスチュームを着た智花だった。もつコスプレに慣れてしまつたためか、この間のちなつのコスチューム時の時は全然違つ表情だつた。それを見たまりと京子はすごい興奮していた。

「あー！」

「おーーーちなつちやんとは雰囲気違つねーー！」

「それビビりつつ意味ですかー！」

「ほー、もっかん。あれやつて」

「うふ。愛と正義の…魔女つ娘//リクるん！華麗に登場…！」

「おおーーーー！」

智花の//リクるん変身の振り付けも完ぺきだつた。まりは興味深々に智花の//リクるん姿を見ていた。そんな様子をちなつは黒いオーラをただ寄せて見ていた…。

(な、なこよなこよー！私だつて…私だつて…ー)

今度はちなつは京子を呼びつけた。

「京子先輩！」

「な、なに…？」

「//ラクるんのコスチュームありますか！？」「

「え？ あるにはあるけど…」

「私も智花ちゃんに負けついられませんからー。」

すぐさま、ちなつは//ラクるんのコスチュームに着替えて、智花たちの前に来て…

「まつちやーん、また//ラクるんが来たよー」

ドアから出でてきたのは//ラクるんコスチュームのちなつであった。しかし、まつの反応はどうと…

「…」

「あ、あれ…？」

「//ラクるーん、魔法使つて」

「ガーン」

無視されてしまい、ちなつはますますくじむばかりであった。それに引き換え、智花はまりの好感度をどんどんあげていった。

「ほり、もつかん。あれだよ」

「う。な・ア・キ・」

「回」
「回」
「回」

「うん」

ちなつの妄想

子供の扱い上手しね。簪花なやん。

いえ、そんな…

『結婚しよう!』

は、
はい！

(なんに) とこなつてしまつたら———)

「あ、あの……あなたは……なにが眞似でも悪いんですか……？」

「え！？ オレ… いや… ！」

心配そうに紗季が声をかけてきた。ちなつは何を思ったのか、紗季にこんなことを聞きだしてきた。

「そ、そうだー紗季ちゃんって!!」
クルの魔法とかつて知つてる

かな……？」

「え……あ……すみません。やつこつの真帆しか知らないので私は……」

すぐさま、かなつは真帆の方に視線を向けるも……

「せ、せ、まつりんにも、一回」

「うそ」

ミハクるん智花に夢中になつたとしても声を掛けれる雰囲気ではなかつた。そして京子に聞いひとつしても結局、京子やあかりも智花に夢中であった。

(「、じつなつたら……」)

かると、ミハクるんちなつはミハクるん智花の前に立ち、じんなことを見こぼしてきた。

「み、ミハクるん智花ちゃんー私と勝負しなさい……」

「えーーー？」

「ち、ちなつかやん……ちよつと……」

「勝つたりミハクるんの座はまひつせー」

「え……えつと……」

「がんばれ、もつかんー」

「智花ちやんならいいわ」

「ちよつとーなんで京子先輩がそっち側にいるんですか！？」

「まあまあ

「そんなことないで、ミリクさんの座をかけて、智花とちなつが勝負をすることに。京子と真帆、そしてまつの人3人である。

「てなわけで、智花ちやん／＼ちやんのミリクの／＼なりきり対決！まず、審査の方は可憐が、愛情、正義感で決めるよーー！」

「おーー！」

「いいのかな…？あんなことさせやがって…」

「あかりはどひちを応援すればいいのかな…？」

「わへ…真帆は…」

そんなこんなで勝手にミリクるんなりきり対決が始まってしまったのだった。まづ、最初の審査は…

「まずは、パフォーマンスだ！」

「ば、パフォーマンス…ですか…？」

「やつ…やはりパフォーマンスといえば、変身シーン…まあさみくくるん智花ちやん…！」

「あ、はい……！」

「もっかん、がんばれー！」

あわてて、智花は構えて…

「愛と正義の… 魔女つ娘!! 振り付けるん… 華麗に登場…！」

「おーーー！」

「わすが!! 振り付けるん智花ちゃん…」

やはり振り付けは売べきであった。もちろん評価も圧倒的に高いのであった。それを見たちなつはいつもとは真剣そうに智花の変身の振り付けを覚えようと観察していた。以前にも京子にやらされたのだが、あれは京子の嘘であつて間違った振り付けをやらされたのだった。

(よしー変身の振り付けは覚えたーこれで結衣先輩に…)

そして、構えて…

「愛と正義の… つづわー！」

ガタッ

「痛…」

魔女つ娘!! ラクるんとここやつなどいりで転んでしまつた。その

せいが、さつきの智花の振り付けを忘れてしまったのだった。どうしようともうたえるちなつであったが、みんながじいとちなつを見ていたため、こんなことをしてしまった。

「か…華麗に登場…」

「それ…投入のポーズじゃん…」

以前、京子にやらされたポーズをしてしまった。もちろん、この勝負は智花の勝ちとなつた。そして、次の勝負はとこうと…

「次は、正義感！」

「せ、正義感…？」

「//ハクるんといえば、愛と正義の魔法少女ーその正義感をためすのは…これだー…」

京子が指差した方向を見ると…

「助けてー」

「ギーガギガギガ！世界を羞恥で満たしてやるー…」

そこには、助けを求めているまりとどこからでてきたのかガンボーの着ぐるみを着ていてる真帆の姿であつた。なんかわざとらしい雰囲気でもあつたが、これも対決のひとつである。

「ああ、まづは//ハクるん智花ちゃんー」

「せこーねイタをする」「せめつた打ち」

「これも真帆が教えたのか、ミラクルの台詞も完ぺきに言っていた。その後、魔法（演技）でクリアし、評価も高かった。これを見たちは智花の完ぺきな演技に感動していた。

（なんで智花ちゃんはあんなに完ぺきなの…。…ミラクルのんオタクなの…！？）

智花のことは完全にミラクルのんオタクだと、勘違いをしてるちなんだが、これも全部真帆におしえられて覚えたものであって、けして智花はミラクルのんオタクではない。そして、ヒツヒツヒツヒツの丑番になつて…。

「あ…おイタをする」「せ…めつた打ち…」

自身なれど口論を囁ひながら。それを見た結衣と紗季が口上で止めようとしたのだった。

「おこ、やつこっただろ。君のおじやあ、ちなつちゃんがかわいそつだ」

「わづか。ちなつちゃんのままだと身が持たないよ」

「結衣先輩…紗季ちゃん…」

「…しょくがないなー。じゃあ、結衣と紗季ちゃんの群衆によつこの対決は引き分けっこ」と

「でも楽しかったー」

結局、この勝負は引き分けに終わったのだった。だがその後も…

「//ハクるん、本読んで」

「うそ」

「智花ちゃん、子供の扱い上手いね」

(きりーー・智花ちゃんに結衣先輩を取られる…！)

ちなつの嫉妬はまだ続くのであった…。

愛莉に自信持たせよう作戦！？（前書き）

七森中生徒会に関しては男バスの試合後に出す予定です。

愛莉に自信持たせよう作戦！？

その夜、結衣は男バスの試合をビデオで見ていた。男バスのプレーを把握したいのはパターンをつかんだのだが…

「問題は愛莉ちゃんかな…？今日の練習の時も…。愛莉ちゃんされなんとかなれば男バスの子たちには勝てるんだけどな…」

ピココココココ

「ん？」

携帯が鳴っていて、電話相手は智花だった。

ピッ

「もしもし…、智花ちゃん？」

『あ、結衣さん…』んばんは…。その、今勉強をしてましたか…？』

「ううん、男バスの試合を見ていた所」

『あ、そうですか…よかつた…』

「ううん、どうしたの？」

『やの、お風呂のことで思つて…、愛莉のことで…』

「ああ、今私も愛莉ちゃんのことで考えてて…」

その後も愛莉のことで話し合つた。やはり愛莉の臆病をどうするかを結衣と智花が迷っていたとき、結衣は智花にこんなことを聞いてみた。

「そういうえば、愛莉ちゃんの誕生日が4月生まれだから背が高いって思い込みはいつからなの？」

『私が転入してからもうその思い込みが続いていて、愛莉は身長のことになると思い込みが強いんですね』

「なんだ…」

『大きいとか小さいとか言葉にすごく敏感で…スイカは小玉つていうくらいしか食べないって言つてましたし、好きな食べ物は小豆で嫌いな食べ物が大豆とか…』

「どれも大きい小さいの感じが入つていてるね…あーそうか、これだ!!」

『えー!?』

「智花ちゃん、私にいい考えがある」

翌日、今日もまた女バスのコーチに来ていた娯楽部の4人。そして京子とあかりとちなつは結衣にある作戦を聞かされていた。それは…

「ほんとにそれでいいけるの…?」

「いらっしゃなんでもそんなん…」

「大丈夫だつて。愛莉ちゃんをセンターに立たせるためだから、みんなには協力してもらひつよ」

「成功するかわかんないけど、やつてみるか…」

体操が終わつた後、京子は愛莉に「こんな」とを言つた。

「あ、愛莉ちやん背が縮んだんじゃない？」

「「「え…?」「」」

その京子の言葉に女バスの智花以外は全員驚いていた。それもそのはず、智花は昨日の夜に結衣に愛莉の作戦のことを聞いていたからだ。そして、愛莉は嬉しそうに京子に聞いてみた。

「ほ、本当ですか…!…?」

「うふー背が縮んでる感じがあるよ」

「よ、よかつた。実はこの前、競馬の騎士さんが背が伸びないようになし箇で寝てるつて話を聞いて、特注ベッドを作つてもらつたんです。マットレスを私の身長をりぞりに切つて、周りを板で囲つてもらつて、ふたも付けたんですよ」

「やつつか…（やじまであるなんて…）」

「それつて棺桶みたい…」

「じつ…」

「うれしい…もう効果が出たんだ。よーし、今日も頑張る!」

愛莉が張りきりだし、練習に入った。

「京子、ナイス」

「ふつふつふ、私にかかればこんなもんよ…」

その後も、練習し順調に進んでいった。練習が終わった後、結衣は智花に男バス戦での作戦を話し合っていた。

「じゃな感じ行こうと思ひの」

「私が竹中君を抑えねばいいんですね」

「うん。竹中君は男バスの中でも実力が高い。それに対抗するなら智花ちゃんが一番だと思つんだ」

「はい、頑張ります」

「後は愛莉ちゃん…愛莉ちゃんには悪いけど、ちよつと仕掛けをしようと思つてゐる」

「仕掛け…？」

「そのために、みんなにはそれぞれの役割の細かいところは教えないつもりでいる。負担が多くて申し訳ないけど、君の力が必要だ！」

お願いね、智花ちゃん！」

「は、
はい！」

「試合までもう少し、頑張ろうねー。」

「はい！」

その後も女バスの練習は毎日毎日続き、女バスのレベルも以前とは比べ物にならないくらいに上達していった。

そして、休みの日でもあかり宅で練習をして…

「いやふふ、『はんて来たよー』

「じゃ、みんなあがつてー」

卷之三

そして夕食後、真帆と紗季とひなたがあかりの部屋を見よつといつ
そり2階にあがつて行つた。

「真帆、こんなことしたら…」

「大丈夫だよ。あかりんの部屋をちょっとだけ見るだけだから」

「おー、あかりお姉ちゃんのおへやー！」

2階に着き、あかりの部屋に行き、見えてみると普通の部屋だつたためか、真帆は少しがつかりしていた。

「なーんだ。意外と普通だつた」

「おー、まほあれ」

ひなたが指差した方を見ると『お姉ちゃんの部屋』と書かれていた部屋があつた。しかも立ち入り禁止の張り紙が貼つてあつた。

「あかりんのお姉ちゃんの部屋かー」

「いーひ真帆、勝手に……」

「ちよこつじだけだつて」

すぐさま真帆は、部屋を開けてのぞいてみると…

「うわあ…」

「すごいくものが散らかつて…えー?」

あたりを見るといつぱには妹系の雑誌や同人誌、さらにはあかりの眞がいつぱに壁に貼られていてあかりの抱き枕まであつた…。

「おー、あかりお姉ちゃんがいつぱーい」

その光景を見た真帆と紗季はただただ震えていて…『そ、そういうばあかりんにこんな話聞いたよ』つて真帆が言つて、『最近パンツがよくなくなるんだ。この前だつてカニさんパンツが…』と紗季とひなたに話し、その下を見ると…あかりのカニさんパンツが…！

バタン

ただ黙つてあかりのお姉さんの部屋の扉を閉めた。すると、そこには智花がやってきて…

「あ、真帆と紗季とひなた…つてどうしたの？」

「…いやー、トイレ探してーー」

「え？ トイレなら一階に…つて紗季も顔色悪いけど大丈夫？」

「う、うん…大丈夫！」

「よかつたー。それと結衣さんが呼んでたからすぐ」に来てね

智花は一階に戻つていき、真帆と紗季は「こんな」と話をした。

「…いつかあかりん襲われるかも…」

「そ、そんな何言つてんのよー。」

あかりのお姉さん「」とは智花と愛莉、さらにその「」と知らないあかりたちには秘密に「」しようと誓つた（京子はとっくに知つているのだが…）。

対決！男バス（前書き）

次の番外編でがちゅりを書いつと考へています。ちなみに、最後の方でも百合が…！

対決！男バス

いよいよ、男バスとの試合の日。体育館のフィールドには女バスと男バスが並んでいた。その試合を「一チをしていた娛樂部の4人と美星とさらには他の生徒もこの試合を見ていた。

「いよいよか…」

「おはようございます、篠先生」

そこに男バスの顧問、小笠原がやつてきた。

「無駄な悪あがきもこれまでです。勝つのは我々です！」

「小物ほど吠えるんだよな」

美星と小笠原が火花を散らしていて、その姿を娛樂部4人はその迫力に少し引いていた。

「す、すごい…」

「美星ちゃん、燃えてるなー。がんばれー、女バスー！」

「でも、勝てるかな…？」

「大丈夫だよ、あかりちゃん。あの子たちは必ず頑張ってたんだから」

そして、試合開始の笛が鳴った瞬間、ジャンプボールを制したのは

智花だつた。そのまま、真帆にボールが回り、再び智花へとパスされていった。

「よし、作戦通り」

「いいやーー！」

その後、ボールは愛莉にバスされ、そのままゴールへと投げ出された。得点を最初にとったのは女バスであつた。それを見た美星はびっくりしていた。

「す」「…」

「ただのまぐれだ」

「感じのわづーやつ」

その後も愛莉を中心に女バスは得点を重ねていく。

「す」「こ、」れで2点田」

「これで男バスの子たちもワンツーマンで止められなことを探らせる」

「でも、愛莉はどうして…」

「1めんなさい、美星先生。私たち、愛莉ちゃんをだましてるんです」

それは試合が始まる前、結衣は女バスにそれぞれのポジションを発

表していた。

「じゃあ、みんなのポジションを発表するよ。ひなたちゃんはポイントガード、紗季ちゃんはシューティングガード、真帆ちゃんはパワードフォワード、愛莉ちゃんは…スマールフォワード」

「え…？」

意外なことを聞かれた愛莉は少し驚きを見せていた。そして結衣から「こんなことを言わされる。

「ほんとは」のポジションは智花ちゃんなんだけれど、あえて愛莉ちゃんにすることにした

「スマール…私が一番スマール」

「やっぱ、Jのポジションはず」く重要で失敗すれば智花ちゃんと交代してもいいよ」

「交代…」

「うん。失敗したらセンターに行つてもらうね。そこは大きい人がやるポジションなんだ」

「ええ…？大きい人…」

それを聞かされた愛莉はショックを受けていた。でもこれは結衣のだましであつてそのことは愛莉には黙っていた。結衣も申し訳なさそうに美星に全部話した。

「じゃあ、愛莉はスマーリフオワードのつもりでセンターに

「はい。でも、こうするしかなかつたんです。愛莉ちゃんに自信を持たせるためにも…」

「でも、勝たなくちゃ女バスが…」

「わかつてるって」

その後も試合は続き、女バスが一気に点数を稼いでいった。そしてタイムアウト、女バスの5人は結衣たちのとこに集まり、作戦会議をした。

「みんな、いい感じだよ。あとは作戦通りに行つてもらえれば十分だよ」

「　　「　　「　　「　　「　　「

試合再開、再び智花は愛莉にバスをしようとしたが、愛莉は男バスの2人に封じられたのだが…

「真帆！」

「よっしゃーー！」

「真帆ちゃん、すーーーい」

智花はまっさきに真帆にバスを繰り出し、そのまま真帆は「ゴールめがけシユートし、ゴールしたのだった。

「す」「いな…。あの子たちがあそこまで成長するなんて…」

その後も紗季がゴールを決めた。しかし、その後からだつた。女バスたちの調子が狂い始め、男バスに点数を取られてばかりだつた。ついには、同点に追い詰められてしまった。

「ああーなんでだよー。」

「…スタミナだよ」

「え？」

「男バスの子たちはまだスタミナが残っている。けれど、女バスの子たちはスタミナ切れ…」

「どうするんだよー！」のままじや…」

「大丈夫、そこはちやんと考えてある」

そして、2回目のタイムアウト

「智花ちゃん、次の作戦。一気に攻めに行つて得点を稼ぐ」とに専念して」

「わかりました」

「そして愛莉ちゃんは守りに入つてゴールを守つて」

「はー」

その後も結衣はそれぞれに作戦を話し…試合再開

「行くよー。」

その後も試合は続き、点は取り合い、ついには1点差で男バスが勝つていた。そして、時間もあとわずか。ボールは智花の手に渡っていた。

「はあはあ…」

そして、田の前には「ゴールをふさぐ3人の男バス…。そして、奥にはスタミナ切れ状態の真帆、紗季、ひなた、愛莉が…。それを見た結衣は最後まで智花たちを信じていた。

「智花ちゃん…」

「私が…私が負けるなんて…！」

そして、そのまま「ゴールめがけてジャンプショートをした。

「そんな、些細なこと…だつて今は…みんなと一緒にだもん…！」

そのショートはゴールに向かっていったものの、ゴールには届かなかつた。

「そんな…」

「もう終わりだー！」

結衣たちも誰もが終わったと思ったその時だった…

「任せて、もつかん！！」

すると、真帆がそのボールを取り、そして…

バッ

「あ…！」

そのボールはゴールに入り、そして試合は終わった。

「や…やつた　…！」

最後の真帆のゴールが決まつたことで女バスは男バスとの試合で勝つたのだった。その後、お互に喜び合つた。男バスのチームは小笠原が連れて去つて行つた。

「よかつた…ほんとによかつたよー！」

「ほんとによかつたよ、ひなつちちゃんー！」

「うんー！」

「…私、守れたかな…？智花ちゃんの居場所…」

そんな喜び合づ智花たちを見守つていた。結衣の表情からは安心感が出ていた。

そして、あかり宅で祝福のパーティをしていた。

「 「 「 「 「 「 「 かんぱーこ」 」 」 」 」 」 」 」

そのパーティは大いに盛り上がり、結衣がこんなことを言ひ出してきた。

「いやあ、あの時の真帆ちゃんが決めるところはずこかつたよ。私は智花ちゃんが決めると思つてて…」

「私も」

「あかりも」

「私もです」

「私もてつきり智花が決めるかと…」

「え？ あそこは真帆が決めるといろでしたよ」

「私もです」

結衣と京子とあかりとちなつと美星は智花が決めるのに対しあそこは真帆が決めると女バスの子たちは言つていた。

その後も線香花火で遊んだりしていた。

「ほれ、これを見ろー！」

京子は線香花火を使って文字を描いていた。それを真帆とひなたに見せびらかしていた。

「おー…わよーたんすげー…」

「京子お姉ちゃんすいーーー」

「ハハハ、そういう風に使つちや危ないよ」

そして、結衣は別の場所で花火を準備していると智花が声をかけてきた。

「あの、結衣さん」

「どうしたの、智花ちゃん？」

「その…」「一チを続けてくれませんか?」

「いや、私らはもともとど素人だし、今度はプロの人を…」

「結衣さんたちじゃなきゃダメなんですね!」

「え…?」

「その…私、結衣さんが好きなんです!」

「ええ…? いきなりそんな…」

「だから、最後まで…結衣さんに教えてもらいたいんです!」

「智花ちゃん…」

「じゃあ、智花がフリースローで50本決めたら一チ続行でビン

？」

「わなつ美里が出て来たんだ」と机に手を打った。

「これ小学生でもフコースロー50本は…」

「やつめかー」

（元気取立つやつだね…）

対決！男バス（後書き）

こちらの計画では、結衣×京子、結衣×智花を書くつもりでいます。
ちなつさん…あかりさんとお幸せに…

番外編 初めてのデート！？（前書き）

完全に百合の方向へと突き進んでしまったロウきゅーふ。
花勃発です！
結衣 × 智

番外編 初めてのテート！？

ある日の日曜日、結衣と智花は遊園地に来ていたのだった…。

「ついたね…」

「その、結衣さん…行きしょっ」

「うん…」

2人がどうしてこうなってしまったのか、それは3日前のことであつた…。いつものように体育館で女バスのコーチをしていた結衣と京子。今日はあかりとちなつは櫻子と向日葵の頼みごとで来てはいなかつた。そこに京子が急に女バスの5人を呼び出してきたことから始まった。

「みんなー、集まつてー」

いきなり京子は5人を呼び出した。いったいどうしたのか、結衣が京子に聞いてみると…

「おー、何してるんだよ…」

「へへーん、実はこの子たちにくじを引いてもらひんだー」

すると、京子は抽選B.O.Xと書かれた箱を出してきた。そこににはめだちたG.P.Tという言葉が消されていた。そして、京子はこんなことを言って出してきた。

「今度の日曜日、5人がくじ引いて当たりが出た子が結衣とカップルЃつにしようと思つてー」

「…………えええー?」「…………

急な」とで結衣は怒りだした。

「ちょ……なに勝手に決めてるんだよー?」

「まあまあ、これも女バスのコーチとなつてからまだ交流もしてないでしょ?だから、結衣と一緒にカップルЃつにして、さらに仲を深めよ!と思つてー」

「それって私だけなのか……?」

「うん」

「なんでそんナ…」

「あたし、ゆこちゃんとなりべーでも行きたいなー

「えっと……私は結衣さんとなりこよー

「その……トートトトーとありますよな……」

「結衣さん……。」

女バスの5人はとてもわくわくしててる様子で京子は満足げになつ

ていた。

「それじゃあ、くじを引いてねー」

5人はさつやくじを引いてそれぞれのくじを手に持っていた。

「それじゃあ、こっせーのせであけるよ」

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

…とその結果、智花が当たたといひことで結衣と一緒にカツプルっこいをすむこと。

「その…結衣さんは他の人とこんなことした経験は…」

「えっと…一度だけ…かな」

「ど、どんな人でしたか！？」

「いや、学校の友達とだよ。その時も京子が…」

「やうですか」

本気の恋愛じゃない」とを聞いてほっと一安心する智花。すると、こんなことを聞きだしてきました。

「その時はビリヤビリなんことをしましたか？」

「あの時は何すればいいのかわからなくて、ベンチで一田中話し合つてただけで…」

(それは友達同士だからなのかな…？でも、結衣さんの友達だしそうよね、きっと…)

「…じゃあ、行こうか」

「は、はい」

そんなこんなで遊園地に入場する2人。その2人を陰で見ている人物がいた。それは…

「京子先輩、これはどういうことですか！？」

それはちなつと京子と真帆と紗季である。ちなつは結衣と智花が力ツブル^{ツヅ}こ^ツすると聞いて2人をつけてきたのだった。

「いやー、その時ちなつちゃんがいなかつたからねー

「そりゃじやなくて、なんで結衣先輩と智花ちゃんがカツブル^{ツヅ}こなんてやってるんですか！？」

「これは女バスとの仲を深めるための交流だよ。まあせっかく遊園地に来たんだし遊んで行こうよ、ちなつひやーん」

「ちよー離してくださいー！」

京子はちなつを連れて他の遊園地の乗り物へと足を運んでいく。残ったのは真帆と紗季だけである。

「きょーたんとちなたん行っちゃったね

「どうあるの？」これから…」

「そりゃあ、あたしらだけでもつかんとゆこちゃんを追いかけるに決まつてるでしょ」

「行くの…？」

「あつたつまえじゃん！早くいかなないと見失つちやつよー」

「はあ…」

真帆と紗季は2人の様子を見る」と。最初に結衣と智花が乗るのはメリー「ゴーランド」だった。

「やついえば、あかりが好きだつて言つてたな」

「その…結衣さん。一緒に乗りませんか？」

「いいよ」

そして、2人は一緒に乗ることに。後ろに智花が結衣にしがみついていて、まるで馬を連れた王子が姫を乗せていくような感じであつた。その光景を見ていた真帆と紗季はメリー「ゴーランド」の他の馬車に乗つていて、つやりのぞいていた。

「もつかんやるー」

「あ、あれじやあ…ちよつと近によつな…」

「あ、動きましたよー」

その後、メリー・ゴーランドが動きだし、結衣と智花はとても楽しそうだった。

「楽しかった?」

「はい」

「じゃあ、次は…」

「結衣さん、これがいいです」

その後も、2人はいろいろ遊園地を周り、コーヒー・カップ、ジェット・コースター、さらにはお化け屋敷など大いに楽しんだ。そして最後は…

「観覧車、乗りましょう!」

「あー…

「いやですか…?」

「もうじやなくて、ちょっと京子のことで思に出しちゃって…」

それは京子が刺激的なもので妄想しためっちゃ早い観覧車のことを結衣は思い出していた。それはそれでひどいな…って思つてしまつ結衣。

「じゃあ、乗るつか

「はい」

2人は観覧車に乗つて、そのあとを追う真帆と紗季もまた乗つたの
だった。そして、結衣と智花はとこいつと…

「しかし、カッフル！」で本氣でデートみたいなことになつちや
うなんてね」

「ぐ、デート…／＼」

「デート」という言葉に顔を赤くなつてしまつ智花。すると、結衣は何
を思ったのか「んな」と言つてきただ。

「あの…智花ちゃんは楽しかつたかな？今日の…」

「あ…えつと、とも…」

「やつか…」

その後もつまく会話ができずじただ黙つてしまふことしかできなかつた。
すると、智花が…

「結衣さん」

「なに？」

「結衣さん…その、本気でデートとかしてみたかつたですか？」

「ええ…？」

いきなりのことで困惑してしまう。急にテートをしてみたいとか言われて何と答えるべきかわからない。どう答えるべきか考えた結衣は…

「えっと…」

「あ、すみません…変なことを聞いてしまって…」

「ううん。でも、私も一度は…してみたいかな」

「…」

すると、智花はそっと結衣の方に体を寄せていった。

「智花ちりやん…？」

「その時は…またカッフル？」「しませんか？」

「…こじよ」

2人はそのままでただただ静かに夕日を眺めているのだった。その様子を見ようと頑張っている真帆だが、結局どうなったのかわからぬままであった…

「ああ、もうー全然見れなかつたよー」

「当たり前でしょ。こんな上じやあ…」

「でも、女の子同士のデートもこじよね」

「えー?...まあ、私も一度は...」

「ゆーこーちゃんとしたこの?..」

「なーだから、その!」とを軽々しく言ひかけやダメー。」

だが、その頃京子とかなつはとこいつと...」

「結局、京子先輩と全部の乗り物に乗ってしまった...。結衣先輩ど
こにいるんだる...」

「次」れ乗らひつよー」

「もう夕方じゃないですか!てか、それもひつ乗りましたよー。」

「何回乗つても楽しんだから早へー」

「うふ、京子先輩ーーー。」

まだまだ続くようであつた...」

番外編 初めてのトークー? (後書き)

いやー。どうぞおつかれさまでした…。

あれ?なんか忘れてるよ?な…。

まいか、次回もお楽しみに!ー

智花の挑戦とふたつ名（前書き）

今日は短いです

智花の挑戦とふたつ名

男バスの試合の日の朝。結衣と京子はあかりと一緒に登校するためあかりの家まで迎えに来ていた。しかし、いへりんポンポンと鳴らしても無反応であった。

「じつしたんだろ、あかり」

「真面目でも悪いのかな…？」

「あ、京子ちゃん、結衣ちゃん」

すると、庭の方からあかりがでてきて少しづつくつした。

「じつしたの？ 庭で…」

「うふふとね」

あかりは2人を庭の方に案内してやつてきてみると…

「智花ちゃん…」

智花があかりの庭を借りてフワースローをしていたのだった。

「じつして智花ちゃんが？」

「あ、結衣ちゃん！ 京子ちゃん、おまよひーじゃれこめか」

「おまよひ。もしかして…」

それは昨日のことであった。それは智花がコーチを続けてほしいと結衣に頼んだ結果、50本フリースロー成功したらコーチをするという約束を結衣は思い出した。

「でも智花ちゃん、私らはいつでもコーチをしてあげても…」

「いえ、自分で決めたことですから最後まで…」

といつづり、フリースローをつづけたのであった。

「大丈夫かな…？智花ちゃん」

「まあ、本人がやりたいって言つてるんだから…」

そして、時は過ぎて放課後、娯楽部の部室にて。そのことをちらついて話した。

「智花ちゃんが50本…ってそれはいくらなんでも」

「今日から毎日あかりの家でやるわけですね」

「でも…？」

「そ…そりですよね…」

「ちょっとーなぜ結衣の時だけ…？」

そして、毎日智花はあかりの家にいき、フリースロー50本目指し続けていた。それを結衣と京子も毎日みることにしている。しかし、なかなか決まりず平均して2・30本が入っていたぐらいだった。

それでも、毎日続けるたびに平均が40本代ゴールに入るようになつたのだった。それから毎日毎日、続いて：

「…これで48本目か…」

「ん?」

突然、雨が降ってきたのだった。

「智花ちや…」

ここで区切りうと智花を呼ぼうとしたのだが、それはとても真剣なまなざしだった。その後も投げ続けて49本目が決まった。

「あ…」

そして、50本目のショートがゴールめがけ、行つた。すると、雨がやみ晴れてきたのだった。そしてその瞬間

バツ

「あ…！」

「す…すごいよー智花ちゃん！…」

50本目のショートが決まり、あかりは喜びでいっぱいだった。

「す」「いな…。とても小学生とは思えないよ」

「輝く
魅力」
ラナンキユラス・アンティーブ

「え…？」

いきなり京子が何か言つてきたので結衣は思わず反応してしまった。

「なんだよそれ…」

「智花ちゃんのふたつ名だよ」

「ふたつ名…？」

「ちなみに真帆ちゃんは打ち上げ花火で紗季ちゃんは氷の絶対女王
政で愛莉ちゃんは七色彩虹でひなたちは無垢なる魔性だよ」
ファイヤー・ワークス
ブリスマティック・パド
アイス・エイント・チャーム
インセント・チャーム

「誰がつけたんだよ」

「智花ちゃん以外は冬子ちゃんだけ、智花ちゃんは今私がつけた
の」

「ふふ、誰だよ」

なんだかんだと言つて約束通り、結衣たちは女バスのコーチをまた
続けることにしたのだった。娯楽部に関しては1年間休部すること
に（主に何をしていたのかはわからないが…）。

そして、慧心学園にまた娯楽部の4人は来ていたのだった。

「また来ちゃつたね」

「でも、私は別にやつてもよかつたよ」

「だから京子先輩が教えるんじやないのに」

「じゃあ、入るか」

体育館の扉を開けて、その先には…

「ええー!？」

「「「「お帰りなさい、あなた!」」「」」

女バスの5人が裸エプロン（下に水着を着ている）で4人を出迎えてきたのだつた。しかし、結衣とあかりとちなつはその光景を見てさすがに引いてしまつたが、京子は鼻血でぶつ倒れてしまつた。

「お、おーー京子ーしつかりしろーーー！」

「えつと…それって…」

「紗季のアイデイアだよ」

「ちょー！バカ真帆ーー！」

紗季の意外な一面を見て、あかりとちなつは思わず苦笑してしまつたのだった…。

智花の挑戦とふたつ名（後書き）

ええ…智花のふたつ名は天船さんのアイディアを選びました。天船さんへご応募ありがとうございました。

会話と生徒会（前書き）

アニメ「うきよーぶ」の八話の回はこの小説では省略します。理由は言うまでもなく… つてところです（笑）。また、扉の出番もないかもです…。また、今回から小説の書き方を変えます。

「…………」

慧心学園にある人物たちがやつてきた。それは七森中の生徒会たちであった（会長は除く）。

「（）に歳納さんたちがいるんやで」

「慧心学園の初等部…………ってか、なんでわたくしたちまで？」

「いいじゃん、面白そうだし」

「待つてなさい……歳納京子！…」

なぜ生徒会たちが来ているのか、数日前のことであった。七森中生徒会室、そこにはいつも以上に落ち込んでいる綾乃と励ましている千歳がいたのだった。

「あ、綾乃ちゃん……そんな落ち込まんといて…………」

「なんで……なんで歳納京子がいないのよ！　すぐに帰っちゃうし、部室にもいないし！」

そして同じく生徒会メンバーの大室櫻子と古谷向日葵が来た。

「あれ？　杉浦先輩、元気ないようですが……」

「ああ、最近会いたい人に全然会えんくてな」

「そういうば、赤座さんからこんなものを預かつてますが」

向日葵からある紙を綾乃に渡した。

その紙には綾乃も驚くこんなものだった。

「な、なによこれ！？」

「どないした？ 綾乃ちゃん」

千歳もその紙を見ると……

『娛樂部 一年間休部届け』

「娛樂部つてあかりちゃんの入ってる部活じゃ……」

「……今度の休日に歳納京子を尾行するわよ——」

てなわけで、結衣たちをつけて慧心学園まで尾行してきたのだった。

そんなことも知らない結衣たちは、今度クラス対抗の球技大会の試合の合宿で来ていって、今は女バスの子たちと一緒にお昼ご飯を食べるこにしていた。

「へえ、これみんなが作ったんだ」

テーブルの上には女バスの子たちが作ったおにぎりとお味噌汁があつた。

全員はテーブルの前に座り、お昼ご飯をとる」と云ふ

「まさか合宿までされることは思わなかつたよ」

「いいじやん。私はこの子たちがいてくれるだけで幸せだよ

「もう、京子先輩は調子がいいんだから……」

わつそく結衣はおにぎりひとつと云ふ

「それ、トモが作ったおにぎりなんです」

「智花ちゃんが？」

「その……どうぞ……」

「じゃあ、いただくな」

「この星形は……」

「それひなが作った」

「この小さいのは……？」

「私です」

「この丸っこいのは」

「私が作りました」

「そしてあたしのはこれ」

智花、ひなた、愛莉、紗季、真帆の順で自分たちが作ったおにぎりを紹介していく、結衣たちはそれぞれのおにぎりを食べた。

その後も楽しくお昼ご飯を食べた後は女バスの子たちは体育館で練習をしに行き、結衣たちは食器を洗っていた。

「料理までしてくれるなんていい子たちだよね」

「うん、みんないいお嫁さんになれるよー」

「京子先輩、手伝ってくださいよー！」

「でも…なんで竹中君は…」

結衣はさつきの女バスの子たちの話が気になっていた。それは竹中がどうしてバスケを選ばなかつたのか……。彼がいれば、十分な戦力になると思ったのだから。

「た、大変です！」

すると、突然紗季がやつてきたのだった。

「どうしたの、紗季ちゃん？」
「すぐに来てください！」

いつたい何が起きたのか紗季と一緒に4人は体育館に行くとそこには…

「あれは…」

真帆とあの男バスのキャプテン、竹中夏陽が喧嘩をしていたのだった。

「竹中君……！？　どうしてここに……？」
「早くとめないと……」「止めようにも全然いうこと聞かないから……あの2人」「でも、止めないと……！」

結衣はすぐさま2人の喧嘩を止めて、どうして竹中がここにいるのか結衣は聞いてみると…

「バスケにエントリーを……？」
「そうだよ」
「てめーバスケが嫌だからってサッカーに…」「先生が間違えて俺をバスケにエントリーしちまつたんだよ…」「間違えてエントリー…」「で、バスケにエントリーしたものは今日の合宿に参加だつて聞いて来たんだよ」

なんだかんだで練習は始まつたものの、竹中は1人だけ、みんなとは離れたところで練習をしていた。

いつたいどうこうことなのか結衣は美星に電話して聞いてみると

……

「どうして竹中君がここに……」

『おー、いつとくの忘れてた。合宿一人参加者一名追加、竹中夏陽以上』

「以上って……真帆ちゃんと竹中君の中が悪いことを知つて……？」

『あいつさ、断らなかつたんだよ。間違えてバスケにエントリーしちまつたんだけつて聞いたら別にかまわないと合宿の参加も嫌がつてなかつたし』

「竹中君が……」

『バスケの方が大事だと思つてるんだよ。あたしからエントリーさせておいたし』

「そうですか……」

その後も美星の話を聞いた後、結衣は竹中の方に行つて……

「な、なんだよ……」

「一緒に練習しないの？」

「はあ？ 別にあんたらには関係ないだろ」

「でもさ、せつかく来たんだし一度くらいは」

すると、真帆がこちらの方に気が付いて不機嫌そうな顔をして結衣に言つた。

「ゆいにゃん、そんなバカほつといてもいいよー。」

「黙れアホ真帆！」

「もういつぺんいつてみ……」

「歳納京子お……！」

「ええ！？」

「な、なんだ……？」

「あ、綾乃……？」

突然扉が開き、真帆と竹中の喧嘩がはじまるタイミングに七森中の生徒会の副会長、杉浦綾乃と池田千歳、大室櫻子に古谷向日葵がやってきた。

そして、靴を脱ぎそのまま体育館に上がってきた。

「まつたぐ」んなといふので……」

「お邪魔します~」

「あ、櫻子ちやんに向日葵ちやん

綾乃是すぐさま京子に近づいてきた。

「な……なに……？」

「部活の一年間休部届がきて、黙つてついてきたら」んなといふで何やつてるわけ？ しかも小学生相手に！』

「えつと……」

「とにかく、無断不純行為は罰金バツキンガムよ！』

「ぶはー、ば、罰金……罰金バツキンガム……」

「何が面白いんだ、それ……」

結衣の笑いのツボを見て呆れる竹中。

そんなこんなで京子は綾乃たちにもちやんとわけを教えてあげたのだった。

「バスケの『一チを……？』

「それでいつも放課後にすぐ帰つちやつんやな

「なんで今まで言わなかつたのよ？』

「女バスの子たちにいち早く会こたいからつこ……」

「はあ……」

京子のいい加減さに呆れてため息をしてしまった綾乃。
ここで京子は綾乃たちにこんなことを言い出してきた。

「せっかく来たんだから、綾乃たちもこの子たちのマーチをしてみたら?」

「な、なんでそうなるのよ!」

「それにちょうど合宿だし、着替えは美星ちゃんが手配してくれるから」

「勝手に決めないでよ!」

「まあまあ、ええんとちゅうの? 岳納さんにはねたことや」

「私は賛成!」

「まあ、せっかくですから……」

てなわけで七森中生徒会の4人もこの合宿に参加が決まり、さつそく京子は美星に連絡をし美星も喜んで手配してくれることであった。

まだ戸惑っている綾乃は「なんと」と聞いてみると

「先生もよく賛成してくれたな……」

「でも、バスケの「一チって言つたつて何をすればいいのかしら?」

「主に結衣が練習を指揮して、私らはサポートするんだよ。いつもいつしきてるから」

「それと、あの2人仲が悪そうだけど」

櫻子の指をさした方を見るとまた真帆と竹中が喧嘩をしていたのだった。

「あー」

「なんで男子が一人いるの？ 女バスのマッチをしているんじゃ……」

「実はね……」

綾乃たちにもどうして男子である竹中がいるのか、今度のクラス対抗の球技大会のことをすべて話した。

「でも、真帆ちゃんと竹中君は仲悪そうやけど」

「どうして仲が悪いのか、私たちもわからないんだよ」

「ちょっとランニングに行つてくれる」

体育館から出てシューズを履き、竹中はランニングに行つてしまつた。

真帆も追いかけようとするが、みんなに止められた。

「なんだかコーキも大変そうね……」

「うん……」

仲直り大作戦（前書き）

ゆるゆりのアニメを見ているせいが、こればかり更新してばかりです。なもり先生のツイッターを見てもわかるとおりなもり先生が仕事しそう…。

仲直り大作戦

合宿初日の中、紗季と愛莉は宿題のため勉強をしており、そこに綾乃と向日葵が2人の勉強を見ることに。

真帆とひなたと櫻子とあかりとちなつが寝ていてそこに京子と綾乃の百合プレイを妄想をしたのだろうか千歳が鼻血を出して倒れていた。

当然のじとく最初、千歳の鼻血に女バスのみんなは驚いていた。別の部屋で竹中は寝ている。

そして、また別の部屋では結衣と京子と智花は真帆と竹中がどうすれば仲良くなれるか相談していた。

「強力ですか？」

「真帆ちゃんと竹中君がどうすれば仲直りになれるか作戦を考えてほしいんだ」

「私も2人には仲直りしてほしいですけどさうの苦手で……あまりお役にたてないかと」

「そつか、ごめんね。智花ちゃんなら気軽に話せると思つてさ」「ふええ！？」

いきなりの結衣の発言で智花の頬は赤く染まってしまった。京子は話を切り出すかのように結衣に言った。

「となると、私と結衣で考えるしかないね」

「といつてもあの2人をどう仲直りさせればいいんだか……」「や、やります！」

「え？」

「得意じやありませんけど、結衣さんが私が一番だつて言つてくだるのならお断りできません！」

「あ、ありがとうございました……」

「頑張っちゃいますよ、私も！」

急にはつさる智花にびっくりしてしまった結衣と京子。

「とりあえず、作戦会議に……」

「頑張りましょーうー！」

「う、うん……」

「智花ちゃんひこんなキャラだっけ？」

作戦その1。

みんなで美星から借りてきたゲームをすることに。

先ほどから真帆と竹中のペアが連勝していく、挑戦した櫻子と向日葵も負けてしまった。

「あー、負けちゃったよ」

「櫻子があそこで失敗するから」

「向日葵だって真帆ちゃんばっかり狙ってるから負けたじゃん！」

櫻子と向日葵が喧嘩を始めてしまったが、これはいつものことなので気にしなかった。

「これで4連勝！」

「へ、余裕だ余裕」

2人はいい感じに息が合っていた。

「ゲームなんてよくありましたね」

「美星先生がもってけって言われてね。ゲームがこんなところで役に立てるとはね」

「綾乃ー、次は私らでやるつよ」

「な、なんで私も！？」

「いいじゃん、せつかくだからさ」

そこに千歳は眼鏡を取り外し、脳内では……

『ほり、私が教えてあげるから』

『や、優しく教えて……』

「豊作やわ……」

説明しよう、千歳はメガネをはずすと視界を遮り、神経を集中させて本格的な妄想に入り、鼻血を出してしまつ。

千歳の鼻血にきずいたあかりはすぐさまティッシュを渡した。

その後、京子と綾乃のペアで挑戦するも結局、真帆と竹中に負けてしまった。

「あー、負けた」

「強いわね、あの2人……」

「結衣ー、変わつてよー」

「私？」

「じゃあ、智花ちゃん変わつて」

「ええ！？ 私ですか？」

(ちょ、杉浦先輩！ なんで智花ちゃんに渡すの！？)

黒いオーラが漂いつつも誰も気づかぬまま、結衣と智花のペアでゲームをすることに。しかし……

ドオオン

「あ、あれ？ これで終わり？」

「うわ……」

まさか智花がここまでゲームが強いとはだれも思いもしなかった。智花一人で真帆と竹中を倒してしまった。結衣はただただ唖然とするばかりだった。

「……ヘタクソ」

「……お前だろ」

2人はコントローラをひっぱなげ、また喧嘩を始めてしまったのだった。

「ちょ、ダメだよ！」

「喧嘩しないのー！」

「はつ！ ほつ！」

喧嘩しているのにも関わらず、智花はゲームに熱中していたのだ

つた。

この作戦は失敗であった。

作戦その2。

今度はトランプで七並べをした。

しかし、ここでトラブルが……

「バス」

「私もバスです」

「私も」

「あかりもバス」

「うちもバスやわ」

「私もバス」

「わたくしもバスですわ」

誰も出でずにバスが続いていった。
そして、竹中の出番の時に……

「ちひり」

「み、見るなよ。」

「夏陽！　お前が止めてるんじゃねーのか！？」

「ちげーよー！」

そして、また喧嘩を始めてしまったのだった。

「2人とも、喧嘩は……」

「結衣さん、下ー。」

「え？」

智花の指差した方を見ると、ハートの5と8が落ちていたのだった。

「どうやら配ることでに落としてしまったようだ……。」

「なんで」「なるんだよ……」

作戦その3

竹中にも昼食を作るのを手伝つてもいいこととした。

他のみんなは順調に進んでいるのだが、たまねぎを切つている真帆と竹中はたまねぎを切つていくほど涙が出ていた。

「じめん、目がしめて……全然進まない」

「うう……なんで俺がこんなことしなきゃいけねーんだよ」

「だったら、夏陽は食べるな……！」

「第一、お前の切り方が……！」

「なんだとーー！」

「やるかーー！」

なぜか野菜を向け、喧嘩を始めてしまったのだった。

この作戦も失敗であつた。

そして、廊下にて結衣と智花は真帆と竹中のことで話し合つていた。

「うまくいかないね」

「あの2人、前は仲が良かつたんです。真帆がバスケを始めてから急に仲が悪くなつたつて紗季が首をかしげてました」

「なんで真帆ちゃんがバスケ始めただけで仲が悪くなるんだろ」

「……原因は私なのかもしません。真帆が私のためにバスケ部を作つてくれたから……」

「そんなことないよ。バスケやりたかったのは智花ちゃんだけじゃない。真帆ちゃんがバスケをやりたくてバスケ部を作つてくれたんだから。それにこれは真帆ちゃんと竹中君の問題なんだからあまり自分を責めちゃダメだよ」

「トモ！ 結衣さん！」

「トモ！ 結衣さん！」

「」で紗季が来て急に叫んだため結衣と智花はびっくりしてしまつた。

「や、紗季ちゃん？」

「「」めんなさい……暗くて気づかなかつたもので……」

「「え？」

「だ、大丈夫です！ なにも聞いていませんし、携帯で写真撮つてませんから」めんなさい……トモと結衣ちゃんがそんな関係だつたなんて……キヤー！」

「紗季ちゃん、落ち着いて……これは紗季ちゃんと思つてる」と違つかり……つて千歳まで……」

「」のタイミングで紗季のそばに千歳があり、眼鏡を取り外していじつな妄想をしてしまつたのだつた。

『ゆ、結衣さん……、今日はその、一緒に寝てくれますか？』
『いいよ。わあ、おいで。かわいい子猫ちゃん』

『結衣ちゃん……』

「これはこれでありますな……」

「わや！ 千歳さん、鼻血！」

結衣と智花の丘合の妄想で鼻血が出てしまい、妄想が止まりなくなつてしまつた。

結局、千歳のせいで大騒ぎになってしまった。数十分後なんとかおさ

まつた。

女バスの5人が大浴場に入ってる頃、京子たちは待機していた。

「まったく、千歳はここまで来て……」

「ごめんな……船見さんと智花ちゃん見ていたらつい……」

「あれ？ 結衣先輩は？」

「結衣なら竹中君と一緒にジュースを買いに行つたよ」

そして、結衣は竹中と一緒に近くのスーパーに行き、ジュースの買いだしをちよつと済ませたところだった。

「『めんね、買ひ出しこつき合わせちゃつて』

「別に。暇だし」

学園まで結衣と竹中は夜道を歩きだしていった。

結衣は竹中と他愛もない会話をしている、ここで結衣は真帆のことで竹中に聞いてみることに。

「竹中君はどうして真帆ちゃんがバスケるのが気にくわないの？」

「……何も知らないからそんなこと言えるんだよ」「知らないってなにを？」

「やめちまうんだよ。バスケだつて！ 真帆はー！」

「真帆ちゃんがバスケをやめる？」

「真帆つて何をやらせてもすぐにつまへなるんだ」

「確かに、私も驚いたよ。真帆ちゃんがすぐにバスケだつて上達したし」

「……真帆は逆上がりもはやぶさとびだつて誰よつもすぐで覚えち
まつー。俺だつてまけたくねえから必死で練習して、同じことをや
れるよつこやつたけどり……で、俺ができるよつことアイツは
すっかり飽きててさ。『なんな』ことよつかくれんぼしよつ『つてこ
うだぜ！ アイツはなんでもできちまつと途端に飽きちまつ。鉄棒
とか縄跳びならいいけど、バスケも同じようになつたらたまんねえ
よ俺……やつなる前に、じつちから絶交したんだ！」

「真帆ちゃんが飽きてバスケをやめるつて言いたいの？」

「ちよつとシユートができたくらいでバスケの何がわかるんだ！
ちよつとやれるよつになつたくらいでアイツはすぐでやめちまつ

「ひめちまつにやつて言いたいの？」

竹中との会話で気持ちがわかるよつになつてきた結衣。

学園に帰つてきて、ボールが弾む音が鳴つていて、見てみると……

『116……117……』

真帆がシユート練習をしていたのだった。
そんな様子を見る竹中も驚いたのだった。

「前に智花ちゃんが言つてたよ。真帆ちゃんはこいつもある練習をし
ているんだつて。真帆は女バスのために頑張つてるんだよ。真帆ち
ゃんは見つけたんだよ」

「見つけた……？」

「本気で打ち込めるものにだよ」

まだ真帆はシユート練習をしており、竹中はそれを見て何かを感じ取つたかのよつて寝室に行つとした。

「竹中君はまだ真帆ちゃんがやめると思つの？」

「……真帆つてさ、お化けとか苦手でさ。ああゆう薄暗いといつが

大嫌いなんだよ

「……おやすみ」

そのまま、竹中は寝室の方にいった。

結衣は黙つて真帆が練習してるとこを黙つて見守つていたのだ
つた。

仲直り大作戦（後書き）

また次回も番外編をやろうと考えています。

そして、また困ったことに……。ひなたのパンツ事件をどうしよう！

番外編 結衣と京子の一日（前書き）

今回はゆるゆりの原作6巻のお話です。そこに真帆と紗季が出ると
いつ話です。

「」でタイトル「」を……

「「アツカリーン」」

あかり「はーい」

智花「なんですか？」

ちなつ「」に呼ばれたってことは……」

＼アツカリーン／

あかり＆ちなつ＆智花「「えええ！？」」「

3人は透明になってしまった。

あかり「この小説でもやるの！？」

智花「なんですか！？」「これは……」

ちなつ「私たちの出番はここだけってこと

智花「そんな……」

ちなつ「影が薄いのが移つた！」

あかり「それあかりのせいなの！？」

智花「私ヒロインですよね……？」

番外編 結衣と京子の一日

ある日の休日、京子は結衣の家でゲームしながら今度の同人のネタを考えていたのだが、結局思いつかず。

その後、結衣とともに公園に出かけていったのだった。すると、そこには……

「あ、ゆこちゃんにゃーたん」

「おー、真帆ちゃんに紗季ちゃん」

「むちむち」

「今日は2人だけなの?」

「はー」

「せつかくだからあんばーぜー!」

「うふー!」

砂場で京子と真帆はトンネルを作ることにしたのだが、結衣と紗季はベンチで座っていたのだった。

というのも砂場で遊ぶのはやめておいた方がいいと思っている顔をしていた。そんなことも構いなしにトンネルを作っていると猫がやってきた。

しょわわわわ

「 「 …… 」 」

砂場におしつこをしてそのまま立ち去つて行く猫。それに対して京子と真帆は砂場で遊ぶのをやめたのだった。

今度はブランコの方へ行き、ブランコで遊んだのだった。

「 憲りない 2 人だなー 」

「 ほんとに真帆は 」

「 京子と真帆ちゃんは似てるなー 」

その後も 2 人はブランコから飛び降りるなどの遊びで大いに楽しんだ。今度はパンダのばねの乗り物を見つけて京子は乗るのだが……

「 なんじゅ 」 「 じゅ 」 …… ばね弱すぎだろ 」

「 中学生の体重だとそつなるわな 」

「 今度は真帆がする 」

「 真帆も 6 年生でしょ 」

公園で遊んだ後は小腹がすいたためワックへと向かった。ワックの中に入り、カウンターへと向かった。

「 店内でお召し上がりですか？ 」

ワックの店員が言つと京子がこなことを言い出してきた。

「テイクオフで」

ペシフ

京子にツッ 「//を入れる結衣。その後、テイクアウトと答えたの
だった。

「注文は何にしました?」

「スマイ……」

ペシフ

「あたしてりやきねー」

「私はチーズでお願いします」

「私ダブチ」

「えーと、てりやきとチーズバー ガーとダブルチーズバー ガーあと
はポテト」で

「かし」いました」

その後、ハンバーガーを買った後はベンチで4人で食べることに
した。

「つま」

「おこしょーゆこちゃんー」

「真帆、行儀悪いわよ」

「外で食べるのもつまいなー」

「きょーたんはいつもダブルチーズをダブチって略すんだー」

「ナウでヤングな略語だよ」

「えつと……」

「せつとこじこじよ」

あると、食べていのうひに京子はなにか反應した。

「ピクルス抜いても、ひの忘れたー」

「苦手だっけ?」

「わづではないけど、避けて食べたい」

「私は平氣ですか?」

「ゼロップにはこつてるハツカみたいなやつか

「ええ!? あれはメインティッシュだー。」

「わづだよー むーしゃんー。」

「わづなの?」

食べ終えた後は4人は結衣の家に帰り、結局京子の他にも真帆と紗季も結衣の家に泊まつて「ぐー」とこ。

「いやー、まりりんと会つて以来だね」

「それにしてもいいんですか？ 私たちまで……」

「いいいitttt」とよ

「まつたく……」

4人はお風呂に入つた後、結衣、京子、真帆、紗季の順でパジャマがパンダ、トマト、ワニ、イチゴだつた。結衣と紗季はともにゲームを楽しむことにするが、京子と真帆は公園で遊び疲れたのか布団で眠つていた。

「真帆は全く……」

「京子も公園で遊び疲れたんだろうね」

「お互い大変ですね」

「うん。でも、京子がいないとなんか落ち着かなくてね」

「私も真帆をほつておいたら何をしでかすか」

「……待つて」

「寝言か」

京子から寝言が聞こえてきたのだった。するとこんな寝言を囁いてきた。

「だから体にボンドぬっておなつてこつたじやん」

「どうこつ状況だよ」

「もつかん~バス……」

「真帆つたら」

京子の夢はどうこつものかわからないが、真帆の夢はバスケをしてこるらしい。数分後、京子と真帆が目を覚ましたのだった。

「今何時?」

「8時」

「8時かー結構寝ちゃつたよ」

「とにかく、体にボンド塗るつじやつこつことっ」

「ええ! ? 結衣つてそんなことあるの? ?」

「お前だよ」

「真帆もバスケの夢を見てたんだね」

「おー、楽しそうな気分だったのはそれかー」

そして京子と真帆もまじり一緒にゲームをする」と。すると、結衣が「こんな」とを言つて来た。

「やつにえば、ワックの店舗をどこかで見たことあるよ!」

「アタシはなんかどこかで見た雰囲気だなーって思った

「あー、あかりのねーちゃんだろ」

「ぬづいてたのかよー!」

「あかりのお姉さんでしたか……」

突然なぜか真帆と紗季はお互いに田を合せめたのだった。どうしたのか京子が聞いてみると「……」。

「ぬづしたの?」

「いやーあかりんのお姉ちゃんの部屋が……」

「バカ真帆!」

「あ……」

「?」

「「え?」」

あかりのお姉さんの部屋の「」を聞こ耳か京子がわらひとし

たのだった。京子は2人を部屋の隅っこに連れて行った。

「部屋見たの？」

「えー？ 京子さんもですか！？」

「うん……」

「きょーーたんも見てたんだ……」

「その、このことは内緒だよ」

「はー……」

話が終わり、結衣の元へと戻つて行つたのだった。その後、ゲームのボスを倒し、結衣が満足げであった。

「勝てた」

「そりゃああんだけレベルあげりゃあ勝てるわー！」

「ゆーにゃんつてレベル上げの上手いねー」

「ボスをあつさり倒すのが快感なんだ。ふふ」

「なにかストレスでもたまつてゐるのか……？」

「結衣さんってなにかあったのかしら……？」

「アタシに聞かれて……」

京子は他のゲームをやるために、ケースから選んで取り出したのだった。

「次これやろ?」

「おー恋愛ゲームかー」

「れ、恋愛ゲームー?」

「いいけど……漫画のネタだしさ?」

結衣にそれを言わると京子がびっくりした顔となり、結局それは明日となってしまったのだった。

そんな結衣と京子と真帆と紗季の一 日であったのだった。

和解と鉄板マスター（前書き）

このクロスももう口うきゅーぶら話あたりか……。それにしてもなんか番外編ばかりに力入れているような……。本編も頑張ります！

和解と鉄板マスター

合宿3日目、朝食を食べ終えた後、結衣とあかりは皿洗いをしていた。皿を持ってきた紗季が結衣に声をかけてきた。

「いつも洗い物お願いしちゃってすみません」

「いいよ、紗季ちゃんたちにいつも炊事を任せているんだし」

「やうだよ」

「夏陽にも手伝わせましょうか？　あいつ、何もやっていませんし」

「大丈夫だよ。私とあかりで好きでやつてるんだし」

「あの、昨日はすみませんでした。真帆と夏陽のために私を頼りにしてくだけたのに……冷たい言い方してしまつたなつて」

「……大丈夫だよ。竹中君のことなら」

「？」

そんな結衣の発言に不思議そうな顔をする紗季に対してもあかりはちんぷんかんぱんそうな顔をしていた。

その後、グラウンドに行き、ランニングをすることにした。もちろん七森中の生徒会メンバーたちも加わることに。

「ラスト一周、頑張つて」

「歳納京子、こつもこつな」としてこののへ。」

「まあ、女バスの「一チだからね」

京子と綾乃の会話をしているところを見た千歳は走りながらも眼鏡を取り出してこんな妄想をしていた。

『わあ、一緒に走りつ。私が付いてるよ……』

『や、やめじくじく……』

「素敵な朝やな……」

「千歳さんー、鼻血ー。」

智花が千歳の心配している中、櫻子と向田葵は張り合しながらもランニングをしていて、あかりとちなつは愛莉とひなたと並んで走っていた。

そして真帆はというと竹中と一緒に走ってるから、不機嫌そうな顔をしていた。紗季が竹中のことで真帆を話していた。

「じつこひ」とへ。」

「関係ないよー。一緒に練習したいなら勝手にすればいいし」

「……やつね」

「リラックス」で「今」一ソング終わり、休憩に入る」と。紗季が結衣に午後のスケジュールを聞いた後、紗季はクスッと笑った。

「夏陽が練習するのって結衣さんのおかげですよね」

「え？」

「結衣さん、昨日こなごなと仕掛けてたみたいだし」

「あー、ゲームやトランプの」」と。でも、失敗したけれどね……

「リラックス」で結衣が昨日、竹中がどうして真帆と仲が悪いのか紗季に全部話したのだった。

「それで夏陽……」

「でも、竹中君も真帆ちゃんの」とが真剣にバスケットをしてる」とをわかつてくれたみたいだしね。まだ真帆ちゃんとは、めくしゃくしているけど、合宿に参加してくれただけでも良かつたよ」

「ふふ……。やうこえば、櫻子さんと向日葵さんってなんであんなに仲が……」

「あかりから聞いたんだけどお互い生徒会副会長を田舎じてこないバル関係つてとこかな」

「やつなんですか

「でも、それほど仲は悪くないみたいだけどね」

その後、結衣と紗季の会話が続き、体育館で真帆と紗季と竹中、そして櫻子と向日葵が掃除をすることになった。

「ちえ、なんで向日葵と一緒に掃除しなきゃいけないんだよ」

「それせいかの台詞ですか」

相変わらずの仲である櫻子と向日葵で、真帆も不機嫌そうに掃除をしていた。

「なんで俺たちなんだよ……」

「モーザー、なんで夏陽なんかと」

「俺なんかどうひつ意味だ?」

「モーザーのつ意味だつてのー」

「まあまあ、いいじゃない。私たち幼馴染なんだし」

真帆たちのやつとりを見て向日葵が一いつつてきた。

「三沢さん、櫻子と似てますわね」

「じつこのひつ意味だよそれー」

「早く掃除しなさい。しなきゃ遼さんたちも来ますわ

「ちえー」

それから、5人で早くも掃除が終わって真帆がボールが入ったか
『』を持ってきた。

「少し早いけど、練習はじめよっか

「うん」

「やつてよーゼ。合宿だってのに練習量絶対足りないしさ。アイ
ツあまいから」

アイツとはあつと結衣のことだらつ。それを聞いた真帆が怒りだ
した。

「ゆーにゃんを悪く言つなー。」

「でも……」

「うわ」

いきなり竹中はか『』からとつたボールを真帆にバスしたのだった。

「そんな悪い奴じゃない」

「……当たり前だろ」

「じゃあ、私もやーるー！」

「わたくしたちは遠慮なんかの口一チをやつしるんですよ」

「いいですよ。櫻子さんたのもやつてこただいでも」

「それとひまりんあたしの」とは真帆がまほまほって呼んで。それとみんなのことさん付け禁止

「でも……」

「紗季ちゃんが言つてるんだし、やろーーー」

櫻子は向日葵を「ホール前に連れて行き、バスケを始めたのだった。
そして真帆はといふと

「あー、はずしちゃつた」

真帆が投げたボールは外れてしまい、そのまま後ろへと弾んで落ちて転がりそれを竹中が拾つた。

「なんだよ……」

2人の沈黙は続き、それを見ていた櫻子と向日葵も黙つて2人を見ていた。すると、竹中が……

「わ、悪かった」

「え?」

「シカトして悪かった。ちょっと勘違いしてた。お前のこと」

「……や、やあひょー。なんかかゆいだな、あひこいつー。」

「あひよー

そして竹中は真帆にボールをバスした。すると真帆が照れくしゃみで竹中を追いかけまわしはじめた。

「真帆ちゃんともやるなー。よしー。私も混ぜりーー。」

「あ、櫻子ー！……まつたぐー」

櫻子も加わり、竹中を追いかけはじめてしまった。

数分後、ここで結衣たちが体育館に来ると真帆と竹中と櫻子が一緒にバスケットをしていた。それを隅っこで紗季と向田葵は見ていた。

「真帆と竹中君が……」

「それここ櫻子ちゃんこまでー」

「一緒に練習してるー」

「仲直りしたのー。」

「わあ、どうなんだよー」

「なんか仲直りしてるつまーー」

「櫻子も真帆さんたちみたいに仲良くなれたら……」

その後、智花たちも加わり、バスケの練習を始めた。そして数時間後、ここで練習が終わった。

「練習はここまで」

「今夜の夕飯の買いだし私とちなつさんと愛莉だよね」

「うん」

「じゃあ、お買い物に行つてきまーす」

「ああ、実は夕べに材料は買つてあつてね」

「材料?」

「結衣がお好み焼きにするんだって」

「「「「「お、お好み焼きー?」「」「」「」「」」

紗季以外の女バスと竹中が大声をあげ、結衣たちも驚いてしまつた。

「みんなお好み焼き嫌いなの?」

「いえ、そうではなくて……」

なんだかわからないまま、夕飯を作ることに。すると紗季が……

「誰？　この辺をねらったのか？」

「あ、あたしだけど……」

「あなたねえ、ほんと田の粗いおひし金使つてどうするのよー。山芋はなめらかで入れる意味ないでしょー。これもつー度すり鉢で……ああやつぱこーー。自分でやるわー。」

そして今度はキャベツを切つてこむ智花と愛莉の方へ向かつた。

「トモー、キャベツはなんなく長く切つたやダメー。荒くみじん切りー。」

「ま、まこー。」

今度は肉を切つてこむ十歳と結衣の方へ行つた。

「結衣さん二十歳をともむさんにてぬれりませてはません」と

「」

「う、うめこ……」

「あはは……」

「う、と夏陽ー。何じでかそつとこむるわけー。」

「う、粉にだし汁を……」

「余計なことしないでそんなあつこままでいたら熱に入れたら台無しになるでしょー。」

「す、すみません……」

「みんなー もうこいわー あとは全部、私がやるからー。」

お好み焼きを作るのを紗季一人で指揮をとつていたが、結局一人でやることになってしまった。

それを見ていた京子やあかり、そのほかにも綾乃も櫻子もみんな驚いていた。

「びつしたんだら、紗季ちゃん……」

「あんなにお好み焼き作るの」「だわるなんて……」

「実は、紗季の家つてお好み焼き屋さんでよく店の手伝いをしてるそつなんです」

「へえ」

「それで焼きそばやお好み焼きにはす」「こだわりがあつて」

「あの冷静な紗季ちゃんにも意外なところがあつたんだね」

意外な紗季の一面を見た京子たちはただただ紗季がお好み焼きを作っているところを見ているだけであった。

和解と鉄板マスター（後書き）

なにか足りないと思つたら、ロリコン呼ばわりがないのが百合の現実……。Hロはがちゅりシリーズでも智花たち出そうかな……？

窃盗の贋金バッキンガム（前書き）

この話は「どうか」「どう迷った結果やるせになってしまった。とはいってもやはり結衣たちは女子中学生だからロリコン呼ばわりされていないのが口うきゅーぶらしくないところ。でも、頑張つていきます！」

窃盗の罰金バッキンガム

「ひなたちやんと竹中君がいない？」

結衣と京子が買い出しに行っている間、智花たちの話によると夕食の後にひなたと竹中がいなくなつたの」と。
あかりや綾乃たちも探したもの、見つからなかつた。

「夏陽のやつ、ひなが好きだからうそつきの誘拐を……」

「それはないよ。まだ探してないといふはある?」

「学校でいけるといふは……」

「あー もしかして、裏の神社かも」

「神社?」

「夏陽が作ったバスケのゴールがあるんですよ」

「よし、探してみるか」

「ええ!? あたし……」

「あ、そうか……」

「え? なにが」

昨日のこと、竹中から真帆は暗ことひねりは苦手だとついひとを思

い出した結衣は真帆にこいつこつた。

「部屋にはあかりや綾乃たちもいるし、真帆ちゃんはお留守番した
ら?」

「へ、うん……」

涙目になりながらも少しあとで暗いところが苦手だったそうだ。結局、真帆はあかりたちと一緒にお留守番で結衣と京子、そして智花と紗季と愛莉で裏の神社に行くことにした。

「竹中君とにかく、ひなたちゃんがこんなところを通ったのかな?
?」

「それにしても、真帆が暗いのが苦手なのよくわかりましたね」

「昨日、竹中君がそう言つててね」

「それに対して、ひなはお化けとか全然怖がらないんですね」

「へー、ちなつちゃんはすげー怖がりなのに」

「あれ? なんだろ」

懐中電灯の照らした先には地面になにかが落ちていた。その瞬間、紗季と愛莉は結衣の後ろに隠れて智花は結衣の服の裾をつかんだ。

「よーし、私が見てくる」

「大丈夫か?」

「『涙を付けてくださいね』

強気な態度で京子は地面に落ちてこむものを拾つてよく見てみると
とにかく布で丸めたものだった。

「ハンカチかな……つて…」

すると、広げてみるとそれはハンカチはまだひなたと書かれて
いたパンツであった。

「なんでこじんな……」

「なんだつたんですか？」

「うわああー…

智花が声をかけてきて、いきなりのことでびっくりした京子はそ
のひなたのパンツをあわててポケットの中にしまって、誤魔化した。

「いやあ、ただの布きれだつたよ…………」

「なんでそんなにびっくりするんだ?」

「や、そりゃあ……いきなり声かけられたらびっくりするよ…
…。暗いんだし。ははは……」

「「？」

こつたことうしたのか、誰もが心配そうな顔をして京子を見てい

た。なんだかんだでそのまま、神社へと向かっていくと……

『もちろんひざでなげるわけじゃないんだけど……』

そこにはバスケのショートを教えていた竹中とそれを教えてもらつているひなたの姿があった。それを見た結衣は驚いていたのに対して、京子はキラーンとなぜか目を光らせていた。

「へえ、竹中君つてあんなところがあるんだ」

「ふつふつふ、やっぱりひなたちゃんのことが好きなんだなー」

「何か言つたか、京子？」

「ううん、なんでも」

しばらく、2人の様子を見ているとひなたがこんなことを言い出しだして生きた。

『あれれ？ 持つてきたハンカチがない』

(あー もしかして……)

ひなたのことにポケットにあつたひなたのパンツを見つめる京子。きっとパンツをハンカチだと間違えたんだなつと納得していたのだった。

そして、ひなたはあきらめることなくバスケの練習をしていて竹中もまた、ひなたの特訓に付き合つていた。

その後、みんなは体育館へと戻つていき、このとこをひなたと竹中に内緒であかりたちにはなした。廊下を歩いていた綾乃と千歳が

話し合っている中、浴場から上がった竹中が急いで部屋に戻つて、く姿を見かけた。

「どうしたのかしら、竹中君」

「綾乃ちゃん、なんか落ちてるで」

「何かしら?」

竹中が落としたものを綾乃是拾つてみるとそれは……

「う、これは……」

急いで、綾乃是竹中の部屋へと向かい扉を勢いよく開けた。それを見た竹中はびっくりしていた。

「な、なんだよ……」

「これはなんなのよー。」

「あー！」

綾乃が見せてきたのはひなたのパンツであった。しかも京子が拾つたやつであった。どうしてそれがあるのか、実は京子はひなたにじつそりと返すため、わざと浴場にパンツを置いてきたのだった。そのパンツを竹中が拾つたのだった。それを見た竹中は大慌てで答えた。

「いや、それはその……浴場で……」

「着替えを忘れるわけないでしょ！　あなた、小6にもなつてこんな変態行為していいと思ってるの？」

「え？　と……」

「無断不純行為をするなんてこの杉浦綾乃が許さないわよ！」

「す、すみません……」

「私じゃなくてひなたちやんに謝るべきでしょ！　不純異性行為は罰金バツキンガムよ！」

その後、綾乃の説教が終わつた後、パンツは竹中は綾乃とともに泣く泣くひなたに返したのだった。竹中はとまどぼ部屋に戻つていく途中、結衣に出会つた。

「あ、竹中君……ってどうしたの？」

「いや……その……」

さつきの騒動を言ふのはずもなかつた。すると、球技大会のことと結衣に話した。

「あのね、球技大会のことなんだけどさ、選手交代ができないだろ？」

「やうなのが？」

「怪我したとかいがいで選手交代ができないんだよー。知らなかつたのかよ？」

「いや、美星先生に押し付けられて合宿をやられたかい……。でも、スタメン選びが重要なね。やっぱり智花ちゃんと竹中君は……」

「……約束しろ、ひなたは外すな」

「え？」

「アーッ、頑張つてるからー！ まだまだだけど、チャンスを『え』ほしこんだよー！」

「それは、誰だつてそうだよ。女バスのみんなや竹中君だつて」

「バスケは5人でやるんだ」

その後、竹中は部屋に戻つていぐのをただただ啞然としか見ていなかつた結衣。翌日、竹中が……

「どうじつ」とだよ、夏陽ー！」

「球技大会はお前たちだけでやれ」

「なんで？ 合宿で一緒に頑張つてたのに……」

「やうだよ」

「あんた、やつぱり私たちと一緒にやつたくなーいの？」

あかりとかなつと紗季が言つても竹中は言い返してきました。

「もうこいつはいじらない。ナビ、今日は任せていいかなってお前ら
5人に」

「竹中君……」

「俺にとつけや男バスを外で見られるいい機会だからな。女バスだけで頑張れよ」

真帆が竹中を止めるように結衣に頼んでみると結衣は……

「自分がでなくても勝てると思つてるんじゃないかな？ 竹中君は

「えつと……それって女バスだけで勝てるってこと？」

「そうなの？」

「……勝つ自信がないなら、考え方直してもいいけどな

「なにを……」

そのやつ取りを見た櫻子と向田繁は「こんなことを言い出しだした。

「なんだか、青春ですわね」

「私も青春したかったなー」

「櫻子じゃ、無理でしょつけれど」

「なんだよ、それ！」

また櫻子と向日葵の2人が言い合いになつてゐる間、女バスは優勝田指し、はりきりだしてきた。その後、球技大会の試合はといふと、美星にビデオを撮つてもらい、娯楽部で見ることになった。

「みんな、すばらしい！ 優勝しちゃつたよーー！」

「よかつたね、結衣ちゃん」

「女バスの子たちが優勝しましたねー。」

「うん。よかつたよほんとー」

無事優勝できて、結衣たちまとも喜んだのだった。

窃盗の贋金バッキンガム（後書き）

昂がないとやつぱり度がないなーっと感じてしまつ血分。てな
わけで次回の番外編は昂を出します！ 昂が出ていても丘合の口ウ
きゅーぶに変わりありません。

番外編 フリースロー対決！ 結衣VS昴（前書き）

いよいよロウきゅーぶの主人公長谷川昴の登場です！

ただ、この小説での昴は原作とは全く違います。

まずは智花たちとの面識がないこと。これは結衣たちがローチしているためです。

そしてロツ度がないこと。これも智花たちに出会っていないためです。

ロツアーメなのにロリ度がないだと…… ≪(・_・) ≪

つと懸つている方に言つてしまおきます。

これは百合小説です(^ ^ ^)

……なんかあほらしくなってきた(; ; ; ;)ノ

あかり「今回あかりの出番ありますよ？」

(° °) 「クッ

あかり「よ、よかつた～（涙）」

さすがにここまで出番なかつたらかわいそつだからね(*、 *、 *)

番外編 フリースロー対決！ 結衣VS昴

今日も女バスの「一チを終えた結衣たちは美星に車で家まで送つてもうつっていたある日、美星が「こんなことを言い出してきた。

「いつもいえば、今度私の甥っ子に会つてみない？」

「美星ちゃんの？」

「長谷川昂つてこつんだ」

長谷川昂といふ名を聞いただけで結衣は興味を持ったかのよつと美星に聞いてみた。

「どんな方なんですか？」

「結衣と同じくバスケに熱中していたやつだけど……」

「？」

「いいや、今度会つてみた時にわかるよ」

そんなわけで4人は美星に連れてこられ、昂の家に来ていた。

「アポとつているんですか？」

「いいや」

「え……？」

「まあ、入れよ」

「あ、はい」

なんだかんだで不安になりながら家に入ることになってしまった。美星は勢いよく家の扉を開けて、そのまま台所へと上がりつた

「おーい、昴」

(いいのかな……?)

(まあまあ、美星ちゃんが言つてるんだし)

(あ、あかりなんだか不審者になつた気分……)

(なんか美星先生、京子先輩みたい……)

「あら、美星ちゃん。昴君は今不在なの」

「ち、逃げられたか」

「ううそつとあがつた台所には非常に温和でおつとりしてそうな女性がいた。おそらく昴の母親だろうと結衣たちは思つていた。

「あら、その子たちは?」

「ああ、今女バスのコーチをしてくる子たちだよ」

「船見結衣ですか」

「歳納京子でーす」

「赤座あかりです」

「吉川ちなつです」

「まあ、あなたたちがこの前美星ちやんがいつていた子たちね。どうぞ、あがつていつて」

「お邪魔します」

そんなわけで4人はテーブルの椅子に座り、七夕はお菓子やらぬ茶をテーブルの上に置いた。

「えいわぞ」

「すみません。こきなり家に入つてきて……」

「いいのよ。結衣ちやんたちのことは美星ちやんからちやんと聞いてこるわ」

「せういえば、歸れとつて今部活なんですか?」

「いや、アイシは部活やつてないんだよ」

「えー。」

「でも、バスケに熱中してゐたよな?」

「実は昴が通っている高校のバスケ部は1年間の活動停止処分になつちまつてさ」

「「「ええー?」」」

活動停止処分と聞いた結衣たちはさすがに驚いてしまった。どうじてそうなつてしまつたのか美星に聞いてみると。「…………すると、美星は…………

「その高校の部長が顧問の先生の娘さんとしけけおちりやつてさ」

「かけおちつて…………」

「しかも小学生だぜ?」

「ぶはあー……」

さすがの京子も思わず飲んでいたお茶を吹き出してしまい、笑い転んでしまつた。

「な、なんだよそれ…………。小学生に恋をしたつてことー?..」

「ま、笑つてしまつのも無理はない。それにしてもかわいそうだよな。せつかくスポーツ推薦で入学した高校でまさかの休部になつてしまつなんてな…………」

「…………」

その後も七夕は買い物に行くといつて出かけていき、結衣たちは

会話しながらも昴を待っていた。

そして、玄関の扉が開く音が鳴り、誰かが帰ってきたみたいだ。
それは……

「ただいま」

「よハ、ロコロノ一昧～」

帰つてきたのは長谷川昴であった。美星がいるのを見た昴は少し苦い顔をしていた。

「ミホ姉……」

「お姉ちゃんは今お買い物にいらっしゃるから」

「や、てかその子たちは?..」

「ああ、」の前話した例の女バスのコーチたちだよ」

「船見結衣です」

「歳納京子でーす」

「赤座あかりです。京子ちゃんと結衣ちゃんとは1歳年下の中学生です」

「あかづきちゃんと同じ中学1年生の吉川かなつです

「俺は長谷川昴。君たちの」とはミホ姉から聞こてる

「実は昴に会わせたために、」のトたちを連れてきたんだけど

「それだけか？」

なんの興味をなさそりに昴は冷蔵庫から牛乳を取りだし、コップに入れて飲んでいた。

「せっかく会いに来たんだから、なんか話すことないのかい？」

(美星先生に連れてこられたんだけどね)

「もういいだろ……」

「なんだよー、せっかくバスケの」と語り出す。

「やっぱバスケはやめたんだ。なんだか冷めたんだ。休部になつてから……」

(「）の入……私と同じだ

険悪な雰囲気になり、誰も言葉を出さなかつたが、結衣だけは違つていた。昴にこんなことを言ひ出しつきた。

「昴さん」

「ん？」

「私と勝負しませんか？」

「結衣……？」

「勝負つて？」

「私が勝つたらバスケを続けてください！ 昴さんが勝つたらもう手は出しません」

「なんでまた……」

「おやあ？ 中学生相手に怖いのか？」

「はあ！？ そんなわけないだろ！ わかつたよ。やればいいんだろ？」

「ゆ、結衣先輩……」

「大丈夫、勝つてみせるよ」

「結衣ちゃん……」

「大丈夫だ。結衣はそんな簡単に負けたりはしないよ」

そんなわけで家の庭に行き、昂はバスケのゴールとボールを準備し、結衣がルールを説明した。

「ルールはフリースロー対決。どちらかがフリースローを多く成功したら勝ち。一本一本交代でいいですか？」

「構わない。先攻は君からでいいよ」

昂から先攻をもらい、結衣からやることに。そして結衣は「ゴール

めがけ、ボールを投げまずは一本成功した。

「までは一本！」

「結衣先輩、さすがです！」

「結衣ちゃんすー」ーー

「じゃ、次は俺だな」

結衣からボールをもらい、昴も「ゴールめがけボールを投げた。そのボールもまた一本成功した。

「うわあ……」

「あつちもすー」ーー

「やつぱり高校生だからかな？」

「次は君だよ」

その後も結衣と昴の「ゴールを決めていき、勝負はまだつかぬまま続いていった。しかし、結衣の体力も限界に近くなっていた。

「はははあ……」

「少し休んだらどうだ？」

「いえ、まだ……」

その後もボールを投げ、ゴールをまた一本決めていった。

「結衣、大丈夫？」

「うん……」

京子も心配している中、まだまだやれそうであった。しかし、見かねた昴は結衣に聞いてみた。

「どうしてここまでして……」

「あきらめほしくないから……」

「あきらめてほしくない？」

「私も一度、バスケをあきらめたんです。でも、女バスのコーチをしていくつちにあの子たちがその情熱を取り戻してくれたんです。だから、昴さんも……！」

「ゆ、結衣……」

「結衣がここまで頑張ってるんだよ。それで昴はここまであきらめちゃうの？　あんたにとってバスケはなんだったの？」

「ミホ姉……」

そして、昴の番になりボールを「ゴールめがけて投げた。しかし、そのボールはリバウンドし外してしまった。

「あ……」

その一瞬、大歓声が響き渡つた。

「やった　！」

「結衣ちゃん、勝つたんだよーー！」

「結衣先輩、高校生相手にすごいですー！」

大いに盛り上がっている中、美星は昴の元へと駆けつけこんだことを話しかけた。

「今のはボールわざとやつたでしょ」

「さあな。でも、教えられたよ」

そして、昴は結衣の元へと行った。

「ありがとう、結衣。君のおかげでバスケへの情熱を思い出したよ」

「いえ、私も昴さんがまたバスケをやつてくれるだけだ」

その後、お互に握手を交わし、この勝負は終わった。

数日後、今日も女バスのコーチに来ている結衣たち。すると結衣は美星に今昴はどうしているか聞いてみると。

「昴なら友達のすすめでバスケの同好会に参加してるんだって。そこでバスケを教えるんだってさ」

「またバスケをやつてくれてよかつたです」

「アイツ、来年こりは全国を田舎すりて回りたよ」

「夢が大きいですね」

そんなじいやかな話しがこじいの結衣と美星であった。

番外編 フリースロー対決！ 結衣VS昴（後書き）

昴の出番はこの話だけかもしません。一応、もう一度言つておきますが百合小説です。口りではありますん（^ ^;）

またまたテートの巻ー? (前書き)

昴×智花が好きですが、完全に裏切っている自分。今回は久しぶりに百合回といきますかー（、、）

百合が書きたくて仕方ないやつです〇（ ）〇

またまたデートの巻ー?ー

休日、結衣は智花と一緒にスポーツショップに来ていた。しかし、智花はスポーツショップに来るのが初めての様子で驚いていた。2人はバスケを使うシューズが置いてあるコーナーに来ていた。

「こんなにたくさん……」

「前に使っていたメーカーってこれだけ?」

「はい、そうです。どうしようかな……? あ、これもいいかも」

実は今朝、結衣と智花はいつものようにあかりの家の庭を借りて、バスケの練習をしていた時だつた。練習の時に智花のシューズのひもが取れてしまつたため、シューズを買いに来ていたのだった。その日は京子もちなつもあかりもそれぞれ用事があるため、来てはいなかつたのだった。

「あれは……」

その後、智花はシューズを買いスポーツショップを後にした。

「今日は本当にありがとうございました」

「気に入ったの見つかってよかったですね」

「はい」

「じゃあ、これからどうしようか

「あ、結衣さん。一緒に映画とか見にいきませんか？」

「いいよ」

2人はそのまま映画館へと向かい、智花が見たい映画は京子が好きな『ミラクルの映画』であった。

「『ミラクルの』？」

「真帆にいつも『ミラクルの』映画を見ることに。そして映画が始まり、結衣は前にも京子と一緒に見たことがあるので話は知っていたが、智花は真剣そうな顔をしてみていた。

（まだ見ていなかつたんだ……）

なんだかんだで2人は『ミラクルの』映画を見ることに。そして映画が始まり、結衣は前にも京子と一緒に見たことがあるので話は知っていたが、智花は真剣そうな顔をしてみていた。

『う、雷香ちゃん！ まさかあなたがライバーなんだつたのー？』

『裏切られたような顔しないでよ。お前が勝手に信じこんだだけじゃないか』

『そんな……じゃああの時勉強を教えてくれたことも給食をわけてくれたことも全てうそだつたのー？』

『あつはははは！ お前はとってもお人よしだつたから近づくのが簡単だつたよ』

『そんな……落とした消しゴムを拾ってくれたり、肩についていた芋虫をとつてくれたのも全てうそだつたの！？』

『お前はとつてもお人よしだつたから』

『そんな……じゃあ、私の命令で焼きそばパンを買っててくれたりジュークを買っててくれたのも全てうそだつたの！？』

『あつはははは……つてお人よしは私かー！』

横を見てみると、真剣そうなまなざしをしていた智花の姿があった。これほど真剣に見るのはミラクルファンしかいないと思っていた（京子も含めて）。

でも、智花はこれがまだ初めてミラクルんであつた。そして、話は終盤を迎えていた。

『行こう、雷香ちゃん。2人で力を合わせればあんな敵、簡単にたおせると』

『しようがないわ……私はお人よしだから…』

ソレして、ミラクルの映画は終わって、2人は外に出でほつと一息。結衣は智花に映画の感想を聞いてみた。

「どうだつた？」

「なんていうか、ライバーんつていい人だなーつて思いました。あとミラクルるんもかつこよかつたです」

「そつか。じゃあ、喫茶店でもよつていいく？」

「はい」

2人は喫茶店へとよってこへ」とした。

「やつじえば、涼子ちゃんでもいいやうの映画は……」

「ああ、アイシはもう3回も見てる。それで一回私も付添いでもう見ててね」

「そ、そうですか……」

3回見ていると聞いた智花はすぐと思つた顔をしていた。結衣も見かねて別にすくないよと言い返す。

すると、結衣はポケットにあつたものを智花に渡した。

「智花ちゃん、これ

渡したもののはピンク色のリストバンドであった。

「こつも智花ちゃんとは朝練に付合つてもうつてしょかつたらつと思つて」

「い、いいんですか……？」

少しあらがいの姿の智花に結衣は頭にはてなを浮かべていたがあいつかと思つてひついた。

「その、ありがとうございます。大切にします！ 結衣さんの力を分けてほしことに使わせていただきます」

「うん」

そんな2人の落ち着いた雰囲気が続いたのだった。

またまたトートーの巻ー? (後書き)

やるやりフ話で//トクルの映画をつけてまして、タマですがこの小説の時期は原作通りで夏です。細かいことばは気にしないでください
(> ^ ;)

いやー、久しぶりの田舎ですかって感じでしたねー……

書いた恋じてる 前編（前書き）

いよいよ一発目の回です。そして予定通り、アニメ映画の話は省かれます。理由は簡単でもなべ……ひとつといふと、

書に恋してる 前編

今日もまた、女バスのローチをしてくる結衣たち。練習を見てみると智花をはじめ真帆や紗季、ひなたも少しずつ上達してきたのであった。

しかし、愛莉だけはなんだか調子が出ていない様子であった。表情を見てみるとなんだか元気が出でこなくなっていた。そして練習が終わった。

「…………」

「いやー、あの子たちバスケットまくなつてきたよねー結衣

「うそ。でも……」

すると、結衣は愛莉を呼び出した。

「愛莉ちゃん

「は、はー」

「どうが調子悪いことないもの? もし何かあつたらすぐここに来て

「結衣さん……」

「じつしたんだが、愛莉ちゃん

「なんだか元気がないみたい……」

「ずっと前まではあんな様子じゃなかつたのに」

しかし、何事もなかつたかのよつて答えた。

「心配してくださつてありがとうございます。でも、大丈夫ですか
ら」

「あ……」

それでも愛莉を心配する結衣。更衣室へと向かつていく愛莉にこ
んなことを叫び出した。

「愛莉ちゃん…」

「は、は…」

「別に無理はしなくてもいいよ。愛莉ちゃんだつて私にひとつ大切
な人だからー」

その発言を聞いた愛莉は驚きのあまり大声を出しちゃった。す
ると周りにいた智花たちまでもが興奮してしまつたのだつた。

「ふえええー！」

「ゆ、結衣さん…」

「うおおおおおー。アイローン、告ぐねたー！」

「ひなは？ ひなのこと大切ー？」

「ソラにきて愛莉が追い上げー！」

「ちよ、違つよ……！」

「ゆ、結衣先輩…… 愛利ちゃんのことが……」

「結衣、隠さなくともいいんだよ、

結衣ちゃんす」レホ

たから違ひては!!

結衣の説得でなんとか騒ぎはおさまり、どうして愛莉が最近元気がないのか智花たちに聞いてみることにした。

「プールの授業？」

「はい、再来週から

「アイリーン泳けなしもんね」

「それで元気なかつたんだけね」

「めんなさー……めんな」と心配せながら、

おれがたはもおりがたい

「そーだ、水泳もゆいにゃんたちに教えてもらえばいいじゃん」

「おー、お姉ちゃんたちのすこいーーー」

「そんな……結衣さんたちに悪いよ」

「大丈夫だよ。ね、ゆいにゃん」

「うん」

「よひしゃー、場所はひづのプールでいいよね」

その発言を聞いた京子は驚いてしまった。

「ええー!? 真帆ちゃんの家つてプール付き……! ?」

「前に真帆ちゃんは大金持ちだつて聞いてなかつたのか?」

「「」ねん……」

話を聞いていなかつたため知らなかつたよつであつた。

「「」あんなさい、私なんかのため」「……」

「「」うん、これも愛莉ちゃんのためにやるんだから」「

「もうこの言い方してるとまたトモの機嫌が悪くなりますよ」

「わ、悪くならないもん!」

(やつぱり智花ちゃんも結衣先輩の「」……)

「ちなつかちゃん？」

「ハハん、なんでもないよ」

「智花ちゃんのことも大切に思つてこるよ。」
「これも女バスみんなのために何かしてあげたいんだ。もちろん、紗季ちゃんのことだってね」

「ふえ！？ そんな、私なんか……」

「紗季ちゃんだって大切な子なんだから」

「おー、ひなも？」

「うそ」

「練習ですか？」 次の日曜日はひのじですか？」

「うそ、いいよ」

そんなこんなで愛莉のための水泳の練習が始まらつてしまっていた
だった。

この話、もしかしたら3部作に分かれて続くかもです。

書いた恋じてる 中編（前書き）

書き始めてから2か月がたちました。

この小説は京綾で書いています。

理由は綾乃のキャラソンを聞いてたらこのカップリングも好きになつてしましました。

まあ、結衣×智花を書いていますし、このカップリングを書かないわけにはいかないので、(^_^)。

書に恋じてる 中編

「今度の田曜日?」

「あの日に愛莉ちゃんの水泳の特訓するんだよ」

今度の田曜日の休日に愛莉の水泳の特訓のことを綾乃と千歳に話した。すると、京子が綾乃たちを誘い出してきた。

「よかつたら、綾乃と千歳も来るかー?」

「な、なんで私たちまでー?」

「来てくれば、綾乃と千歳も来るわー!」

「まあええんとちやうの? そしたら歳納さんにお会いね!」

「つ……わ、わかつたわよー!」

綾乃と千歳も来ることになつた。そして今日の女バスのコーチに来ていたのだが、なぜか真帆とひなただけになかった。

「そういえば、真帆ちゃんとひなたちゃんは?」

「ゆこちゃん、ちよつと来て」

真帆に呼ばれて結衣は体育館の倉庫の中へと向かつた。しかし、暗くて何も見えなかつたのだった。すると、突然扉が閉まり、ライトがついたのだった。

「え？」

「」の瞬間、結衣はびっくりした。すると、飛び箱の上に誰かが飛び出でた。それは、水着姿の真帆であった。

「じゃじゃーん！ エーリヒー、ゆっこちゃん、似合ひ似合ひー。」

「え、あ……うん。とつとも」

「だよねー！ じゃあじやあ、」の水色となりびしが好き？ つて着てみないとダメか」

真帆は水着を脱ぎだし、水色の水着に着替えようとしていた。すると結衣はひなたのことを真帆に聞いてみた。

「真帆ちゃん、ひなたちやん？」こねか……」

「おー、ひななら！」こねるよー」

後ろからひなたもやつてきてひなたもまた水着に着替えていて結衣に披露していた。結衣も似合ひと言ふ練習に戻りつつするが……

「「めん、みんなのとこに戻らないといけないから……」

「あー、まだいっちゃんダメだよー、ひなー！」

「おーー。」

真帆の命令でひなたは結衣に抱き着き、止めに入った。その隙に

真帆は別の水着へと着替えたが、ここで扉が開き紗季がやつてきた。

「真帆、あんたね……って何してるのよー。」

「ソリで紗季が来たことによつて真帆とひなたは紗季に見られ、紗季は結衣に謝ったのだった。」

「本当にすみません」

「いこよ、気にしないかい？」

「ちよつと水着選んでただけじゃん」

「その方法が間違ってるのー。」

「まあまあ、それより紗季ちゃんたちも練習しなくていいのかい？」

「こかね、練習しなきゃ」

「おー」

京子の台詞に口ロツと切り替わったかのように真帆とひなたは更衣室へと向かい、着替えに行つたのであった。

「うひー、結衣さんちゅうさんとお説びしつなわーー。」

「すみません。真帆、結衣さんたちが家に来てくれるのが楽しみで

張り切つてました」

「そつか」

「じゃあ、あかりたちも頑張らなきゃね！」

「じゃあ、おまえも運転教習のためこじてるんだからねー!」

「あ、はい！ 私も頑張ります！」

「よーし、私におまかせだよー！」

「だから、京子先輩が全部教えるわけでもないし」

そして、日曜日。真帆の家に智花と一緒に来ている結衣と京子と綾乃と千歳。あかりとちなつはその日はまた急用で来れなかつたといふ。

でも、次の週は来れるのこと。
きくて庭もまたとても広かつた。
とはいっても真帆の家はとても大

「うわあ……」

「すげえ
……」

「……………」

「綾乃ちゃん落ち着いて」

「はい、まる」と三沢家の敷地だそうです」

結衣と京子は驚いて綾乃はとても興奮をしていたのであった。すると、門が開き、そこには本物のメイドがお辞儀していた。

「お待たせしました。わたくし、三沢家にお使いしてあります久井奈聖といいます。どうぞ、いらっしゃい！」

メイドの聖に案内されてやつとく、結衣たちは水着に着替えて5人が来るのをプールで待っていた。

とはいってもこれだけ広いとさすがの綾乃も興奮状態がまだおさまってもいなかつた。

「べ、べ、別にすごいとかって……お、お、思つてもいないんだかうー！」

「綾乃ちゃん落ち着いて」

周りを見てみるとバスケのゴールまであった。京子もまたあたりを見回してテンションも最大限に上がつていた。

「ほんとにすげー！」

「落ち着けって」

「ゆいちゃんーん！」

5人が水着に着替えて結衣たちのところに来たのであった。

「すみません、遅くなつて」

「ゆいちゃん、やつはじめよつぜ」

「じゃあ、まずは準備運動を……」

「こりなーい。アイリーン捕まえるのここに走ったから見てみると少し恥ずかしそうにしている愛莉の姿があった。自分の水着が見られたくないからか顔も赤く染まっていた。

「なんか、ほんとに小学生なのかな。愛莉ちゃんつて……」

ペシッ

「京子、それ言つたらダメだろ」

「わりいわりい」

そんなこんなで、やわらかく結衣は水泳のローチをすぬけになつた。

「まずはプールで思いつきり遊んで、それから慣れてこいつと思つ

「よひしゃーー！思いつきり遊べるやーー！」

「ど、歳納京子ー！これは愛莉ちゃんのためにやつてんだからー。」

「（）で眼鏡をはずした千歳が京子と綾乃の百合を妄想し始め、鼻血が出てしまった。普段にかかりそうであつたが、聖が急いでティッシュを持ちつけてくれて千歳の鼻血を止めた。

「世話を掛けて」「めんな

「いえ、これも務めですか？」「

「じゃあ、愛莉ちゃんは私と手をつないでるから一緒に

「は、はーー！」

いつして、全員はプールで思いっきり遊んで行つた。これも愛莉のためにと結衣は頑張つてゐるが、京子は真帆とともにほしゃいでしまつてそれを綾乃と紗季が注意をして、それを見ていくる千歳はまた妄想をし始め、鼻血は聖に止めてもらつていた。

愛莉は少しずつプールに慣れ始めていたところであつた。そして、ここからが本番であつた。

また、あかりとひなつが省かれてしまったよつたが……

書に恋してる 後編（前書き）

いやー、ちなつ×あかりはいい！ 今日買った同人誌にて。

それはさておき、この小説では百合とは関係ありませんが、昴×葵
つてのも書いてみようかなーっと思います（ほんの少しだすが……）
。ちなみに番外編でです（^_^）

ヽアツカリーンヽにされた昴をほっておけない自分です（ーー）

そして、今回は京綾の回です！ー！

書に恋してる 後編

遊び終えた後は、よこよこ泳ぎの練習に入った。結衣と愛莉、京子と智花、綾乃と紗季、真帆とひなたのペアでまずはプールに潜る練習をしていた。

ちなみに千歳はプールの外で見ることに。理由は言つまでもなく妄想で鼻血を出されには困るためである。
さつそく結衣の指導の下でやっていた。

「まずは少しあつ、水に……」

少しづつ水に潜つていいくのだが、顔が入る寸前に愛莉は飛び出してしまつた。

「「」「」めんなさこ……」

「大丈夫だよ。もう一度」

しかし、何度もやっても愛莉は飛び出しつづけ。

「「」めんなさこ……」

「ううう、もう午前の練習はいじまでにしそうか」

「腹減つたー！」

「意地汚いわよ、歳納京子ー！」

そんなこんなで午前中の練習を終え、昼食をとつた。

「…………」馳走様でした」

「お茶とトマートを！」田嶋わせじいたさあす。しづしお待つを

「…………」

「ほ、本当に真帆ちゃんの嫁つてか！」こわね……」

「綾乃ちゃん、興奮しそやで」

「真帆ちゃん、ラムレーズンあるの？」

「あるよー」

そんな話をしている間、愛莉は一人でどこかへと行ってしまう。
それを見ていた結衣は愛莉を追いかけていった。
そして愛莉の元へと向かつた。

「愛莉ちゃん」

「結衣ちゃん……」

その後もどうして愛莉は泳げないのか聞いてみると、過去に池に落ちてしまい、それ以来水が怖くなつたと結衣に話した。

「池にか……」

「昔ボートから落ちて、それから足を出して顔を出していれば何とか平気なんですが私、本当に情けなくてせつかく結衣さんたちに

来てくれたのにみんなにも迷惑ばかり……」

その泣いてる愛莉の姿を見ている結衣。そして、愛莉に「いつ
つたのである。

「大丈夫だよ。私たちも愛莉ちゃんのやまにこるから。まだ時間は
あるんだから」「

「でも私、じんぐりへいかつとも前に進めないから水泳でもバスケ
でも、迷惑を……」

「誰も愛莉ちゃんを迷惑だとせ思つてはいないよ。涼子がいつも言
つてたよ、誰だって最初からつまにわけじやないって。それに愛莉
ちゃんがそんなこと思つていたらみんなが心配しちゃうよ」

「…」

「愛莉ちゃんとは一步一歩つまくなつてるよ。『一チである私が書つ
てるから』だから愛莉ちゃんのできる範囲でここよ。みんなと一緒に
歩いて行こうよ」

「結衣……わん……」

「じゃあ、みんなのところへ行く行こうか」

「はー。それと私、これからもがんばりますー。これからもよひし
くお願こしまや」

「うそ」

一方、結衣と愛莉がいない頃のプールでは綾乃が京子に言いたいことがあると言つて京子と綾乃はただ2人立っていた。

それを陰で愛莉のぞいて女バスの4人と千歳が温かく見守つていた。

「じょいよ告白やな……」

「はい……」

実は、数分前のこと。結衣が愛莉を追いかけた時であつた。紗季がこいつそりと綾乃にこんなことを言つてきた。

「綾乃さん」

「何、紗季ちゃん?」

「今がチャンスじゃないでしょつか?」

「えー? な、何の?...?」

「京子ちゃんと告白ですよ」

「ふえええー?」

なぜ紗季が綾乃が京子のこと好きだつていうことを知つているのかといふと前の合宿で千歳が全部教えていたからである。

もちろん、女バスの子たちは全員知つてゐる。するとそこに千歳が割り込んできた。

「そやー、ここで歳納さんに告白しないともうチャンスはないで!」

「ち、千歳……」

「頑張つてください！ 綾乃さん！」

「あややん！ ファイト！」

「おー、綾乃お姉ちゃんがんばー！」

「……わ、わかったわ！」

てなわけで、みんなにホールを送られた今、京子に告白するときも
であった。

「話つてなに、綾乃？」

「と、歳納京子……そん……あつた時から、……だつたの……」

「え？」

「あつた時から歳納京子のことが好きだったの……！」

「……え？」

大声を上げて告白する綾乃にいきなりの告白に思考停止まで追い
込まれ、体が固まった。その後も京子は戸惑いながらも言い返す。

「え……えつと……」

「好きだったのよ……あつた時からずっと……」

京子もまた、綾乃と同じくらいに顔を真っ赤にした。

「その……付き合つてくだわーーー！」

またもや声を上げて京子に告白する綾乃。まだ少し困惑しながらも京子は気を取り直し、改めて綾乃に言い返した。

「へ、うん。いいよ」

「本当にー？ 遊び半分じゃなくてーーー？」

「あ、遊び半分だなんて……。綾乃がここまでも真剣だなんて思つてもいいし、だから付き合つてもいいよ……」

「あ……」

その言葉から綾乃是嬉しさのあまり歓喜を上げていった。

「私……やつと素直に伝えることができたよ……」

ソリで京子がこんなことを言つてきた。

「せっかく付き合つんだから、これからは歳納京子じゃなくて京子つて呼んでよ」

京子に叱られたまま、綾乃是京子の名前を叫ぶ。

「え……えつと……京、子……」

「うん」

陰から見ていた5人は嬉しそうな表情を浮かべていた。

「綾乃さん、よかつたですね」

「あややんがきょーたんに告白したぜーー！」

「これからが本番ね！」

「おー、京子お姉ちゃんと綾乃お姉ちゃんはもう恋人同士！」

「綾乃ちゃん、よかつた……」

千歳もうれしさのあまりか、いつもよりも多く鼻血が出でていた。急いで聖がティッシュで止めていった。

そして結衣と愛莉が戻ってきた。でも、京子と綾乃のことは秘密にしてさつそく泳ぎの練習に入った。

「じゃあ、みんなで両隣の子と手をつないで」

結衣の指示通りに結衣、愛莉、智花、真帆、紗季、千歳、ひなた、京子、綾乃の順番で手をつないだ。

しかし、綾乃は少し恥ずかしそうな顔をしていたが、そこは気にせず結衣は愛莉に言った。

「今はみんなで手をつなげばそばにいてくれる。だから1人なんかじゃない。10秒でいいから、顔に水をつけてみて」

「はい、やつてみまよ」

愛莉はさつきとは別人のように少し前向きになっていた。深呼吸をしてから、一気にみんなで水に潜った。みんなは10秒数えていく。1・2・3・4・5・6・7・8・9と数えていき、そして……

「ふはあ」

10秒間潜り切ったのであった。

「やつたね、愛莉ちゃん！」

「頑張ったね！ 愛莉ちゃん！」

「愛莉、えりーいえりー」

「アイリーンならできるってわかつてたぞ」

「泳げるよつになれるのも、時間の問題よ」

女バスの4人が愛莉に一斉に集まり、励ましの言葉でいっぱいであつた。

「Jリーカまで成長するとはね」

「それを言つんなり、綾乃ちゃんも頑張ったで

「綾乃も？」

「実は……」

「わー！ 千歳！！」

綾乃があわてて千歳の口をふさぐ。その後も何でもないわよと結衣に言い返した。綾乃が告白したことは女バスの子と千歳以外にはいつのが恥ずかしいようだつた。

番外編 櫻子と向日葵のはじめてのパーク（前書き）

今回は櫻子と向日葵が「パーク」に来る回です。

今、昴×葵も製作中です。これも番外編でやります。

それと今回の話は微少口が入っています（笑）

番外編 櫻子と向日葵のはじめのコーチ

SMSでの会話で智花と真帆とひなたと京子が話し合っていた。
ちなみにこのSMSでの会話は京子も以前から女バスの子たちと話
し合っていたのであった。

『明日きょーたんたち来れないの?』 真帆

『「」めんね。私と結衣、あかりとちなつちゃんも用事があつて』 京子
『じゃあ、あしたはおやすみー?』 ひなた

『「」つづん。明日はあかりが代わりの人�이가れてくれるって言ってたか
ら』

『誰ですか?』 智花

『それはね……』 京子

そして翌日。今日の慧心学園の女バスのコーチに来たのは……

『いやー、久しぶりに來たよー』

『早くこきますわよ、櫻子』

『わかつてるよ』

櫻子と向日葵が來ていたのであった。実は昨日のことであった。

「ちなつちやん、明日「一チに来れるかな？」

「「」めん、私も無理なの……」

「「じりしよつ……。京子ちゃん」と結衣ちゃんも来れないって言つてたし……」

そんなあかりもちなつも困つてゐる中、櫻子が割り込んできた。

「なら、私が行つてあげるよ」

「櫻子ちゃん？」

「私もあの子たちに会いたいし、「一チもむちりんしてあげるよ」

すると、向日葵も割り込んできた。

「ちょっと、あなた一人でできるんですの？」

「できるよー、私一人でもー！」

「だいたい「一チがどんなものか知つてるんですね？」

「だからできるつーーー！」

「ひして口げんかをしてしまつた結果、櫻子と向日葵の2人で行くことになつた。2人は体育館へ行き、そこには女バスの5人が体操服を着て待つていたのであつた。

「あ、来た」

「やべりがひまつん待つてたよー」

「やつはー、みんなー」

「お久しごりです。櫻子さん、向日葵さん」

「智花さんたちもお元気で何よつですか」

「だからー、さん付けは禁止だよー」

「えつと……」

「「」あんねー。」「この辺でねー」

「でも、櫻子さんだけは呼び捨てですかね?」

それを聞いた途端黙り込んでしまった向日葵。「」の沈黙を断ち切るかのように真帆が言つてきた。

「次からさん付け禁止でいいよね」

「わ、わかりましたわ。えつと……真帆……ちゃん?」

「えと、ひまりん」

「じゃあ、着替えよつか

櫻子と向日葵は体操服に着替えてやべりがひまつん待つてたよーのだが……

「えっと……何からやればいいんだろ……」

「せっかく練習メモ一式を赤座さんたちからもらつてませんわ」

「大丈夫です。私たちが持っています」

智花は向田葵に練習メモ一式を渡した。それを向田葵は見て、さっそく練習に入ろうとした。

「まずは……シユート練習からですか？」

「よし、私が教えていくよー。」

「だからわたくしもいますわよ」

5人はシユート練習に入った。それを櫻子と向田葵が見る。その後も2人で話し合つ。

「うーん、どうかな……」

「なんていつか、みなさんうまいですね」

前にも練習するといふは見たのだが、以前よりもうまくなつていった。それを見て物足りなくなつたのか、櫻子がこんなことを。

「よし、私もやってみるかー！」

「ちよ、櫻子ー。」

「まあまあ、やるだけだから」

ボールを持ち、女バスたちがやつているボールとは反対のゴールの前に立ち、シュートしたのだが、外れてしまひ。

「あーはずしちゃった」

「まつたぐ……」

「ねえ、今度はひまりんもやってみたら?」

「いいんですか?」

真帆のお言葉に甘えて向日葵もシュートしてみる」と。やつてボールを手に持ち、ゴール前に立つた。

ボールを構え、シュートした瞬間であつた。その大きな胸が大きくなつて、櫻子の機嫌が悪くなつてしまつた。

「ぐぬぬ……」

向日葵のその後のシュートはゴールに入った。

「おー、ひまわりお姉ちゃんす!」——

「ひまわりお姉ちゃんす!」——

かわ

「あやああー」

櫻子が勢いよく向日葵に近づき、向日葵の胸を掴み取つたのであつた。

「ちよ、小学生たちの前で何をしてくるのですねー?」

「おひさま禁止!」

「だからなんですか、それ!?」

その後も2人は言い争つになつてしまつた。すると、真帆とひなたと愛莉がこんな会話をしていた。

「わらじえぱ、ひまつんもおひさまいでかいなー」

「おー、あこじべりーはあるー」

「ふえええ!」

「確かにあこじんといい勝負だ」

「真帆ちやんまだ……」

「ねえ、わらわら上めない?」

「のまだと、練習が進まなこと思つた紗季は真帆に囁つて、やけで真帆がひなたにこんなことを囁つてきた。

「よーし、ヒナー、いけ!」

「おー!..」

真帆の命令でひなたは向田薬の後ろに回り、向田薬の胸をつかみ揉んできたのであった。

「ひやああー ちよ、ひなたちやん……！？ 何を……！」

「おー、ひめわつお姉ちゃんもすーるーこー」

「あー、むつー 向田薬のおつぱいは私のだよーー。」

その後も、櫻子も加わり、2人で向田薬の胸をむし羽田だ。

「ちよとー 2人ともやめてー！」

その後、2人の暴動はおさまった。かなり時間もロスしてしまっていた。櫻子と向田薬はみんなに謝っていた。

「すみません……。ほら櫻子もー。」

「うー……めんね」

「いいですよ」

「真帆もこつもこつな感じでやつてますから」

「どつこつ意味だよそれ」

「では、練習の続きをまじゅうつー。」

「もうですね」

その後も練習は続行し、今度は実践練習に入る」と。見てもわかるとおり、智花が一番つまく、それに次いで真帆と紗季もつまかった。

「智花ちやんと紗季かやんもですか」

「真帆ちやんと紗季かやんもですか」

しかし、ひなたと愛莉が少し不安な動きであった。

「「フーん……」

「櫻子？」

「愛莉ちゃんとひなたちゃんは前に比べてつまくなつてこるけど……。なにか悩みでもあるのかな?」

「アリですわね。癖のある動きではありますが、まだ動きに慣れていないよつですわね」

「なんだか、私たちアーチっぽくない?」

「そんなことよつ、あの子たちをアリのよつな練習でいけばいいか考えてますの?」

「「フーん……」

さすがにアーチをやるのは初めてなため、2人はアリのよつに指導をすればいいかわからなかつた。

こつも「一チをしている結衣、京子、あかり、ちなつせのよひな練習でやつていたのか考え込んでしまつた。

「どうすればいいんだら……」

「あの……」

「なにかな？」

「もう練習が終わりましたので」

練習が終わつて、櫻子と向田葵のところへとやつてきた5人。すると、櫻子が智花にどのよひな練習をしているのか聞いてみると「にした」と。

「ねえ、智花ちやん」

「はい」

「こつもどこのよひな練習でやつてこるのかな?」

「えつと……」

少し考へ込む智花。でも、数秒後に答えた。

「基本から充実に練習しているだけですよ」

「基本から?」

「トモ以外の私たちはみんな初心者で、結衣さんたちからはいつも

基礎から教えてもらひてるんですよ

「そうなんだ……」

智花以外は初心者だと初めて聞いた櫻子と向日葵。2人とも経験者だと思い込んでいたため少し驚いてしまった。

「だから、そこまで大まかに気にしなくてもいいですよ」

「そうだよ」

その後も練習メニュー通りに進めていき、コーチが終わった。

「…………」「ありがとうございましたー」「…………」

「みんなよく頑張ったよ」

「途中大騒ぎになりましたけれど」

櫻子と向日葵は体操服から制服に着替え終え、体育館から出るとそこにはある人物が待っていた。

「いやふふ、『チ』苦労さん」

「えつと……」

「私は篠美星。女バスの顧問だよ」

「あ、初めまして。わたくしは……」

「あー、あかりちゃんが前言つていた

「ちよっと、先生に失礼ですわよ」

「あなたたちのことはあかりから聞いてるよ。家まで送つてあげるよ」

「いいんですか?」

美星は車で櫻子と向日葵を家まで送つて行った。

「すみません、わざわざ送つてくださいわ」

「いいわよ。それよりあの子たちのマーチをやつしておいた?

「うーん、正直何をすればいいか……」

「わかりませんでした……」

「ま、そつなるか。どうへ~ もつかくだからこのままマーチをしてあげても」

「それは……わたくしたち生徒会の仕事もありますし……」

「そつかー。もし、暇な時だけにマーチに来たら? あの子たちも喜ぶからね」

「喜ぶって……」

「あの子たちも2人のことが大好きだからね。だから会ってくれるだけでもうれしいよ」

「えつと……」

なんて答えるべきかわからな向田葵であったが、櫻子は喜びのあまり、じつ告げた。

「はい、また機会あれば」

「や、櫻子！」

「いいじゃん。あの子たちに会えるだけでも私は嬉しいよ。向田葵もやうでしょ？」

「それは……そうですが」

「『』やふふ。櫻子と向田葵、いい『』ンビだね」

2人のことを美星は口説いた。そんな櫻子と向田葵の初めての口一チは終わったのであった。

番外編 櫻子と向日葵のはじめのページ（後書き）

櫻子と向日葵だけの話でした。

それと、この小説でやくしまをやるひつかな……

海の誘い（前書き）

やつとアニメ9話。原作では10話から12話あたりの後に海の話になっていました。

てか、口つきゅーぶの〇▽△とかでないかな……？

海の誘い

夏休み、結衣たちは真帆の別荘に遊びに行ってしまった。

「いらっしゃいまほー」

別荘の扉から真帆が出てきた。

「いらっしゃいふふ、来たぞ来たぞ」

「相変わらず真帆ちゃんす、こなー」

「でも、私たちまで来ちゃつていーのかな……？」

「なにこいつらの。ゆここやんたちが来なきゃ始まりなーよ」

「せうですよ。普段からお世話をなつてるんだし」

「遊びつかわせさせてくれてあつがとつぱれこまか」

「おー、お姉ちやんたち楽しくあいほー」

「なんか照れるな……」

「つふふ。あかりも招待してくれてつねしこみ

「じや、わくわく着替えて海でおよいーだ、わ」

わくわく結衣たちは水着に着替える」と。早く着替え終えた結

衣と京子とあかりとちなつと美星は先にプライベートビーチで遊んでいた。

あかりとちなつは砂浜でトンネルを作ったり、結衣と京子と美星はといづビーチベッドでくつろいでいた。

「やつは海は最高だぜー」

「連れてきた」と感謝しろよ

「わっしゃあ、真帆ちゃんやみんなには感謝の気持ちでいっぱいだよー」

「夏休みはしつかりとホームしてもらひからな

「わかつてますひ。でも……」これからどうじょうかと、男バスや球技大会など田標はありましたけど

「田標あつたら上達するもんね」

「じゃあ、プロを田指すとか

「無理だ」

「ゆいにゃーん、きょーたーん、ちなーん、あかりーん、お待たせー」

真帆の声がして振り向くと水着姿の真帆とひなたと紗季と愛莉の姿があつたが、智花だけは恥ずかしがっているのか後ろに隠れていった。

「どう？」

「かわいいじゃん」

「どうでも似合つよ真帆ちゃん」

その後も紗季、ひなた、愛莉が1人1人と水着を披露した後は今度は智花の番であった。智花は頬を赤く染めていてまたなんていおうか少し戸惑っていた。

「えっと……あの……」

「うん。智花ちゃんも似合つてるよ」

「ふえええ！　ええと……ありがとうございます……」

「よかつたね、智花ちゃん」

「似合つてるぞ、もつかん」

「おー、みんなで選んだー」

「でも、大丈夫？」

紗季の一言で4人は智花の胸のとこを見た。

「えー？ 平気だよ！」

5人で盛り上がっている中、ひなたが結衣に「こんなことを……

「あのね、お姉ちゃん。実は智花が少し御胸が……」

パ
ツ

「なんでもありますーん」

「アーティストの世界」――アーティストとしてのアーティスト

みんなに口止めされ、海の方へといった。その後もみんなで海で遊んでいた。愛莉は泳ぎを結衣に見せていた。

「どうですか、結衣さん？」

「前よりすゞへ上達してゐるよ」

「えへへ。結衣さんや綾乃さんたちのおかげです。綾乃さんと千歳さんたちにも会いたかつたです」

綾乃は急用で千歳は千鶴と一緒に出掛けてしまつたからね」

私は今、空を飛んでいるんだぞ！」

「やあーたんすげー！」

「おー、やあうひーお姫ちゃんか」——

砂場では京子が真帆たちになにやら話を見せていた。それを見て
いた結衣はさすがに呆れていた。

「何やつてんだか、アイツは……」

「ねえ、鬼！」

真帆の提案で鬼！」を叫ぶ。じゃんけんの結果、鬼はひなた。ひなたが十秒数えている間みんなは一斉に逃げていった。

（手加減してあげるか……）

そして数え終わるとひなたは結衣の方へと追いかけていった。

「待てー」

「捕まえられるかなー」

結衣は手加減をしてひなたに合図を少し遅く走って結局ひなたにタッチされた。

「あーあ、捕まつたな」

「ふー、お姉ちゃん本気で逃げて」

「ひー、ゆこちゃんー やる気あるのか？」

「！」

「まったく結衣はー」

すると、紗季がこんな提案をしてきた。

「なら、結衣さんと京子さんとあかりさんとちなつさんが捕まつた

らなんでも好きなことできるとか……」

「 「 「 「 なんでもーー?」 「 「 「

「ええ……ー? あかりも?」

「なんで私までー?」

「おひしゃー! 負けないぞーー!」

じつして女バスの5人は鬼になり、結衣と京子とあかりとちなつが逃げることになってしまった。

真っ先に女バスの5人は分かれて1人1人を追いかけていった。

「あかりさん、タッチ!」

「ひやあ!」

「ちなたん、覚悟ー!」

「きやあ!」

あかりは智花に捕まり、ちなつは真帆に捕まってしまった。そして京子はというと紗季とひなたに追い詰められていた。

「くそー、なかなかやるなーー!」

「京子さんでも手加減はしませんよ」

「おー、きょうじお姉ちゃん覚悟ー!」

「おつと」

京子はなんとかまたいで逃げ切った。

「はつはつは！ 私を捕まえるなんて10年早いぜーー！」

「えーーい！」

「うわー！」

しかし、その先には愛莉がいてすぐさま京子に突撃していった。
2人はそのまま同時に倒れてしまった。

「あ、大丈夫ですか？」

「う……うん……」

顔に愛莉の胸が当たっていたのか、京子は撃沈していた。残るは
結衣だけであった。しかし、結衣も簡単には捕まらなかつた。

「さすが、クラスで一番早いだけある……」

「てか、私たちずつとここで待機なんですかーー？」

京子たちは円が書かれている砂場に待機していた。そこに美星が
見張つっていた。

「美星ちゃんも参加してんの？」

「いや、あの子たちに頼まれて見張りやつていいだけだからね」

そして智花たちはなかなか結衣を捕まえることができずと考え込んでしまった。

「ゆこにやん早いな……」

「どうする?」

「こやふふ、少女たち私がヒントを教えてあげるよ」

その頃、結衣は海でぷかぷかと泳いでいた。

「少し本氣出したか……。あかりや京子も捕まつりやつたしな

……」

すると、なにせひ黒い物体が結衣に近づいてきた。

「な……まさか……!」

それに気づき、逃げようとするが田の前には紗季がわざと横にはひなた、愛莉が。すると、もう一つ黒い物体が結衣に近づいてきた。そして飛び出して出てきたのは智花だった。

「結衣さん覚悟ーー!」

智花は結衣に飛びつき、捕まえたのだった。だが、智花は何かにあたつたのか少し結衣の元から離れてことなことを言い出した。

「結衣さんも少し……」

「え？」

結局、みんな捕まつたため約束通り好きないとやられねー」と。あかりとちなつには砂の城で埋められ、京子と結衣にモードベッドで寝ている智花と真帆に大きい葉っぱで印いでいた。南の島によくある光景であった。

「なんで私とあかりがやんばるにな」と……」

「なんだか少し熱いよ……」

「うふふぐづ～」

「うふ、やめ……」

ひなたと紗季は「しょぐづせじめ、あかりとちなつは笑に出しつしまった。

「あつちも楽しむわー」

「私たちはireでいいのか……？」

「みんなー、みんなお風呂しましょうかー」

「で聖がバーベキューの用意を持ってきてくれていた。みんなせっそく準備をし、その後お風呂を食べてる」と。

「おこしー」

「おいしいね、アイリーン

「真帆ちゃん、ラムレーズンある?」

「（）今まできたところでお前はどうしてラムレーズンばっかなんだ……」

「姉ちゃん。」

振り向いた先にはショートヘアの中性的な印象な女の子と容姿はレイヤードのショートヘアと縁無し眼鏡をかけた物腰の柔らかい理智的な大人の女性が立っていた。

「かげ?」

特別編 『ハロウインスペシャル みんなで仮装パーティー』（前書き）

今回はハロウインと「」とでハロウインの話ですー。

久々に竹中君も登場です（ほんのちょびっとですが……）

昂「俺は！？」

／アツカリーン／

昂「な、なんで透明になるんだ！？」

警察に通報されたやつの~~いつ~~の~~いつ~~ココフカ？

昂「あれはゲームの話で……」

（ - - - ）

昂「そんな顔をするなーー！」

昂はまたの機会の登場と「」とでハロウインパーティーをビリベ。

特別編『ハロウインスペシャル みんなで仮装パーティー』

今日も七森中の娯楽部は慧心学園の女バス部のコーチに来ていたのだが、京子だけがいなかつた。

「ゆいにちゃん、きょーたんはどうしたの?」

「それが後でくるって言つてたんだけど……」

その瞬間、体育館の扉が開きそこには魔女の衣装を着た京子の姿があつた。

「トリックオアトリート」

「」「……」「」

その姿に結衣とあかりとちなつは思わず目に入つてしまつ。以前にもサンタ姿で来た時と同じであつた。

女バスの5人もまた、京子の魔女のコスプレに注目をしていた。

「ほら、お菓子あげないといたずらしちゃうよ。」

そういうと、京子はくれくれと言わんばかりにお菓子を要求してきた。今日は何をかくそ、ハロウインである。

そのため、京子は魔女のコスプレをして結衣たちにお菓子を求めていた。

「もー、今日はハロウインだからさー」

「いや、そんなこと言われてもおかしい今はなし……」

「ふうー

お菓子がないことにふくれつ面になる京子。せっかく魔女のコスプレで来たのにがっかりな気分になってしまい、不機嫌になってしまった。

見かねた結衣は京子に……

「後でお菓子あげるからさ」

「あよーたん、似合つね」

「おー。れぬひーね姉ちゃんかわいいー」

「ナウ?」

真帆たちの褒め言葉で機嫌を取り戻す京子。すると、真帆が……

「実はあたしらも衣装の用意してるんだー」

「ほんとー?」

「今日はハロウインだからねー。みんな、集まつて

真帆が智花たちを連れて更衣室に行ってしまった。結衣たちは待つことになってしまった。

じぱりへすると、更衣室から智花たちがやつてきた。

「お待たせー」

振り返つてみるとみんなハロウインの衣装を着ていた。まずは智花は天使の衣装で真帆と紗季は海賊の衣装でひなたは不思議の国のアリスに出てくるアリスの衣装で愛莉はお姫様の衣装を着ていて結衣たちに披露していた。

「אָלֵין」
עַל כָּל־

「みんなすうじく似合ひでぬよー」

「よかつた」

わー。ひなたちかん可愛いよー。

「おー。あかりお姉ちゃんにほめてもらってひなうれしい」

簪花ちゃんのもじ舎

「あらかじめおもつ」

真幅たやんと絶季女やんのは海賊かー

真帆が選んだもの

一
せたんにはこれ

「それは……」

真帆がちなつに渡したのは//「クルの」//「ブレセント」であった。

「あ、ありがとう真帆ちゃん」

前に京子にもらっているためあるんだが、せつかくもらつたので断るわけにもいかないのでせつそく着てみた。

「なんでも私が……」

「ちなつちゃん。可愛いよ~」

「ちよ、京子先輩!」

//「クルの」//「スプレ姿を見た京子はちなつに抱き着いてきた。

「京子先輩! 杉浦先輩がいるのにこんなことしてこいんですか! ?」

「ちなつちゃんはちなつちゃんと大切だと語つてるよ」

「せつかく衣装も着たことだし、仮装パーティーしちゃうよ」

「でも、練習は……」

「今日だけはお休みでいいよ。ゆいこちゃんとあかりんの分も用意してるから」

「…………」

真帆の提案で勝手に体育館で仮装パーティーをすることになってしまった。真帆から渡された衣装で結衣とあかりも衣装を着ることになった。

結衣はドラキュラの衣装であかりはかぼちゃの衣装を着ていた。

「よーし、みんなでおどろーゼー」

さつそくみんなは踊りを始めた。

その頃、体育館の外では竹中が来ていた。

「なんだか、騒がしいけど何やつてんだ?」

体育館が騒がしいことに竹中は気になつて体育館の中をのぞくとそこには衣装を着ていたみんなの姿があつた。
それを見た竹中は驚いてしまつ。

「な、何やつてんだよー?」

「あ、夏陽」

「今日はハロウィンだから仮装パーティーしてるんだー。竹中君も入る?」

「なんで俺まで……」

「いいからいいから

「ちよ……！」

真帆でつられて竹中も衣装を着ることになってしまった。竹中の衣装はミイラであった。

「なんで俺はミイラなんだよ……」

「衣装それしかなかつたから。じゃあ夏陽も仮装パーティーに参加ね」

「まつたく……」

こうしてみんなは体育館で仮装パーティーをすることに。踊つたりゲームをしたりと大いに盛り上がつた。
そしてパーティーは練習時間の終わり時刻で終わつた。

「あー、楽しかつたー」

「結局練習をまつりやつたな」

「また明日からやせられただどな、めこちゃん」

「俺までやせられたけどな」

「おー、たけなかは楽しくなかつた?」

「い、いや。楽し……かつた」

「当たり前だろー」

「今日だけだからなー」

「楽しかったね、智花ちゃん」

「うん」

「トモも盛り上がってたよね」

「てが、京子の魔女の衣装はどこから持ってきたんだ？」前の方
夕の時も

「それは秘密だよ」

「いつと聞いた」

「これでハロウィンの一日は終わった。

特別編　『ハロウインスペシャル　みんなで仮装パーティー』（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回からは本編に戻ります。

次の番外編は京子×綾乃のお話にしようか、昂×葵のお話にしようかどっちかにしようかと迷っています。

まだ京子と綾乃のいちやにいちつぱりを書いていませんので書きたいと思っています。

特別編 もしも慈心学園女バスケ部と「一チ」の七森中娯楽部の4人が文丘学園の

今日は特別編です。

六甲水さんの『バカとバスケと召喚獣』とのラボです。

この企画に協力してくださいました六甲水さんありがとうございました
す／(*^_^*)＼

内容は女バス部と「一チ」である七森中の娯楽部が文丘学園の見学会に来たらどういふストーリーです。

ただ、本編とはほぼ同じ展開でそこに七森中の娯楽部がいたらこう話です。

特別編 もしも慧心学園女バスケ部と「一チの七森中娛樂部の4人が文丘学園の

ある日、今日も慧心学園の女バス部の「一チに来ていた結衣たち。あるいは、美星が結衣たちにあることを話してみた。

「文丘学園の見学会?」

「や、今度の土曜日から2週間、1Jの子たちを連れて見学会に行くんだけど、結衣たちも来る?」

「なぜまたそんな……」

「いいよーー 美星ちやーん」

京子が割り込み、OKの言葉が出でた。

「おい、京子……」

「いいじゃん。高校がどんなところか見てみたいんだもん」

「あかりも行きたいなー」

「私もです」

京子だけでなく、あかりやちなつも賛成の声が上がった。

「じゃ、決まりだな。今度の土曜日で文丘学園で」

「まつたく、しょつかないな」

結局、結衣たちも見学会に行くことになってしまった。

そして、土曜日。文月学園の見学会にみんなは来ていた。さつそく2年Fクラスのいかにもばかっぽそうな顔をした吉井明久とじじくさい喋り方をする女の子にしか見えない男の子木下秀吉に案内され、Fクラスの教室に向かっていた。

ちょうど授業も終わり放課後だったため、6人の自己紹介を教室でしようとした話になつた。

「ついた。ここが教室だよ」

明久の指差した方を見ると教室の看板らしきものがあつたがともボロボロだつた。しかも教室に入つてみると、そこは机替わりなのか、ちゃぶ台で椅子もなく座布団が置いてあつた。それを見た京子の最初の反応がこうだつた。

「うわ……きたな……。しかも教卓もボロボロだし、ここって教室なの？」

「京子、失礼だぞ」

「そうですよ。いくら汚くて臭くていかにゴキブリやクモ出てきそうで、ボロボロのちゃぶ台や座布団にいつかはつぶれてしまうんじゃないかなって感じの教室でも失礼ですよ！」

(君が一番失礼なことを言つているような気がするけど……)

「Jのことを見つたのは明久だけでなく他の5人誰もが思っていた
だろうみんなちなつのことをじいと見ていた。

それはともかくとして、さっそく明久たちは結衣たちに自分たちの自己紹介をした。

「とりあえず、僕から、僕は吉井明久。よろしくね」

明るめに紹介するも、真帆が小声で紗季に……

「ね、あの人バカっぽくない?」

「ダメよ、真帆。あんまりそんな事言つちや

「おー、バカっぽいお兄ちゃん」

「確かに、あのバカっぽい人のせいでの教室がこんなことになってしまつたとか……」

「だから失礼だろ」

「あ……泣いちゃつたよ……」

「京子先輩! あの人世間、いや宇宙一バカな人でもそんなことを言つちゃ失礼ですよ!」

「いや、ちなつちゃんもそれは……」

真帆や京子の一言でかなりへこんだ様子で明久は教室の隅っこで体育座りをし泣き出してしまつた。

「どうせ僕はバカなんだ……」つわああああん……」

ちなつの一言で明久は泣き出して教室から飛び出しへりかへと行ってしまった。

「行っちゃった……」

「追いかけますか?」

「いや、ほっておけば帰ってくるぞ。次は俺だな。坂本雄一だ。とりあえずこのFクラスの代表をやつていい」

雄一が自己紹介をすると、またもや真帆が……

「あれ? あの人前見たことがあるよ」

「そうなの?」

すると、京子がこんなことを

「あー、前に黒いきれいな髪の人と一緒にデートしていた人かい。前に見たけれどその黒い髪の人、スタンガンの人を襲っていたよ」

「それほんとなの?」

「うん。」Jの田でちやんと見たよ

「なんか、怖いよそれ……」

そんなこんなで5人で話が盛り上がっている中、雄一はため息をついてつぶやいていた。

「まさか小学生と中学生に見られていたとは……」

雄一の自ら紹介が負えると今度はポニー・テールをしていた女の子の番になつた。

「島田美波です。みんなよろし……」

「あのお姉ちゃん小さいね。」

また真帆が一言。しかし、その言葉を聞いて美波の機嫌が一気に悪くなつてしまつ。それを見た結衣はこれ以上言ひつのをやめるように真帆に言つた。

「真帆ちゃん、それ言つたらあの人怒りそつだから……」

「そうだよ。真帆ちゃん。大きくなりたくたつて大きくなれない人だつているんだよ」

またちなつの爆弾発言によつて美波の機嫌が悪くなつてしまつた。すると、美波は教室から出ようとして、瑞希が止めに入つた。

「あ、どうに行くんですか？」

「ちょっと、アキを捜してくる……」

アキとは明久のことである。美波は明久を捜しに教室から出でていつた。

「さつと明久さんのこと」が心配でいつたんですね」

「いや、それは違う」

「？」

「いいか小学生たちと中学生たち、さつきのお姉さんには胸の話はしないほうがいい」

「機嫌が悪くなるからですか？」

「そういうことだ。明久が死ぬことになってしまふから気をつけるんだ」

（死ぬ……？）

雄一の意味深な言葉に考え込む結衣。そして次はムツツリー——と土屋康太の番であった。

「……土屋康太」

すると、ポロッと写真が一枚京子の方へと落ちてきてそれを拾つ。

「何か落ち……」

写真を見てみると、女装をしている明久の姿が映し出されていた。

「え？ これ……」

「……見てないな？」

「えー？ あ……はー」

京子はムツツコーーに写真を返すことにした。そして次は秀吉の番であった。

「木下秀吉じゃ。よろしくなのじや」

「ねえ何での人、女性なのに男物の制服来てるの？」

「きっと男に生まれたくて男の制服を着ているんだよ」

「いや、ワシは……」

「せり、自分の」とをワシと書つてゐしね

「セリは関係ないと思つのじやが……」

「のまあじや、うちはあかないので話はいいだ区切る」とした。
最後は姫路瑞希の番となつた。

「姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

「優しそうな人ですね」

「あの人、ライバルなんの『スプレ似合』いそつ……」

「セリかよ」

結衣のシッ パーの中、瑞希は結衣たちの中では高評価であった。すると、ここで美波が帰ってきたが、明久の姿はなかった。

「あれ？ 明久はどうした？」

「探したけど、全然見つからなくて……。まったく、アキはどう行つたのや！」

「そのうち帰つてくるからほつとおくか。じゃ、次は小学生たちと中学生たちの番だな」

そんなわけで次は結衣たちの自己紹介となつた。まずは智花たちから

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆でーす」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉……です」

「ひなた、袴田ひなた」

「私は船見結衣です。この子たちのコーチを務めています」

「歳納京子でーす」

「赤座あかりです。京子ちゃんと結衣ちゃんとは1歳年下の中学1年生です」

「あかりちゃんと回りじく吉川ちなつです」

結衣たちの自己紹介が済んだら美波が結衣に質問をしてきた。

「コーチって……」

「バスケです」

「へえーバスケか。それにしても船見たちは大変そうだな。まだ中学生で」

「いえ、私たちも頑張って智花ちゃんたちのコーチを務めているもので」

「こつともゆいちゃんの指導のもと頑張っているんだよ」

「はは、やうが……つて翔子!？」

翔子とこつ言葉で結衣たちは後ろを振り返るとそこにはAクラス代表の霧島翔子の姿があった。

翔子は雄一に近づいてきた。それを見た京子は……

「あ、この人だよ。雄一さんとトークしてたのって」

「…………雄一、楽しそうね」

「お、お、お前……なんで……」「…………」

「…………やつを、泣いていた吉井から年下の女の子たちと欲情し

てると聞いて「

「あんこやん…… よつこよつて翔子こ……」

「…………お仕置きが必要ね」

「ちよ、翔子！ 離せ……」

雄一を連れだし、翔子は教室を出ていった。その後、雄一がどうなったのか誰も知らない。

「愛し合つてるんだね。あの2人」

「にしても、度が過ぎてこようよつなんだが……」

結局、いなくなつたのは明久と雄一だけである。雄一はともかくとして明久はすぐに戻つてくるだらうと思い、教室の中にもいるものだけで会話をすることになつた。

そしてなぜかあかりは瑞希に勉強の方を教えてもらつていた。

「わー、瑞希さんつて頭いいんですね」

「そんなことないですよ」

「えへへ。あかりはとっても嬉しいです」

「あ……」

その満面なあかりの笑顔を見た瞬間、瑞希はつじドキつとなつた。その後も頬を赤らめあかりに少しずつ近づいていく。

「な、なんですか……？」

「あ、あかりちゃん……可愛いですー！」

「ひやあー！」

すかたずあかりに抱き着く瑞希。その後もすりすりとあかりに抱き着いたままであった。

「み、瑞希さん……！」

「あーもう、明久君と同じくらい可愛いですー！」

「なんで明久さんー?」

結衣のツツユニアリを入れる中、瑞希はまだあかりに抱き着くのをやめることがなかつた。次第に瑞希の胸があかりの顔にあたつていた。それをみたムツツリー二は興奮しだしついには鼻血をびしゃあと吹き出してしまつた。

ガクッ

「つ、土屋さんが倒れましたよー?」

「あれはいつものことだから気にしなくていいですよ

「そういえば、千歳もいつもあんなだったな……」

ムツツリー二も倒れ、残つたのは女子だけとなつた。

「ハシセ駅じゃ〜。」

おひと、女子 + 紫吉だった。それともかくとも、瑞希は「これな」とを言つて呟いた。

「あの……おかつちやんをお持ち歸つしてみにどうしか?」

「ええ〜。」

「のー嘗めあがに驚いてみつかつ。しかし、原子とかなつの反応はとこいと……」

「うーん、どうもんか……」

「いのせあかつちやんは瑞希さんの方で……」

「うわー。結婚はしねこのー。」

「こべりなんでもわれは……」

「アリですよ。おひの方が心配します」

「む」

結衣と智花の説得でなんとかあかりのお持ち歸つは阻止された。しかし、まだあからめない瑞希は「こな」とを……

「なり、あかつかん。今度おひに遊びに来てください。こつでも歓迎しますよ」

「あ……はい」

「瑞希の趣味ってわからなーいわ……」

「まつたぐじや」

さすがの美波と秀也も瑞希の行動を見て呆れかえってしまう。その後もみんなでいろいろと会話をした結果、もづ帰ることにした。

その頃、みんなから忘れていた明久は……

「 もう……死にたいよ……。あんなかわいい子までバカにされて……」

誰も目をむかない場所でひつそりと隠れてただ泣いていた。かわいい子とはちなんつのことだわい。

そして雄一は……

「 しょ、翔子！ われはまずいだるーー！」

「…………年下に手を出したお仕置や」

「 もやあああああーー！」

何かしら、翔子からの制裁を受けていた。

「…………」

教室でただ倒れていた。

特別編 もしも慈心学園女バスケ部と「一チの七森中娛樂部の4人が文月学園の

えーコラボした結果、明久と雄一とマッシュリーの扱いが大変ひどいことになってしまった。

正直、自分でも扱いがひどいなーっと思いました。

いつの間にか百合に発展しかねていました……

ビハビハになってしまったのか（自分でいうなー）

感想としては、明久と雄一とマッシュリーが→アッカリーンーになってしまったことに後悔……

別に明久たちが嫌いなわけではありません。

ただ面白くしようと思つた結果、いつなつてしまつただけです。

以上です m(—_—)m

臨時部活（前書き）

今度こそ、本編です。

最近特別編ばかり書いていたもので……

「おー、げつたんじゃん」

「げつたん?」

「知ってるの?..」

「ひなたの妹のかげつちゃんです」

「それに冬子ちゃんまでいるじゃん」

「「」の前、京子が言つてたのってあの人か」

「帰りましょ、姉ちゃん」

「いや」

「どうして私の言つことが聞けないんですか?」

ひなたと一緒に帰らさせようとするかげつにひなたは抵抗していった。すると、結衣がかげつに声をかけてきた。

「まあまあ、せっかく來たんだから帰ろうなんていわすこ……」

「あなたが船見コーチですね」

「あ、はー」

「さなり声を掛けられて結衣は思わず答えてしまった。すると、
かけつが……」

「こつも姉さまに無茶とかわせていませんか？」

「えー？」

「ちょっと… 結衣先輩がそんないじわるするわけないじゃない！」

かけつの発言でちなつが割り込んでいた。その後も2人は口げん
かになってしまつ。

「でも、姉さまが無理をしているかもしれません」

「そんなことないわよ！ ひなたちゃんは一生懸命頑張っているん
だもの！ あなたに何がわかるつていつの？」

「ふー、おねーちゃんたちをいじめちゃだめ」

「え？」

「おねーちゃんたちはとっても優しくてひなの大切な人達です。お
ねーちゃんをいじめるとかげだつて許しません」

「う……」

ひなたの一言に黙り込んでしまうかげつ。すると、ひなたは結衣
の方を向き謝つたのだった。

「おねーちゃん、『めんなさい』

「ね、姉さま……」

「ジロッ」

「ハ……すみません」

ひなたに睨みつけられ、かげつも結衣に謝った。気を取り直して
結衣は……

「ハハ。よかつたらかげつかやんむ！」飯食べる？』

「やうだよ、げつたん。話はそれから」

「……はい」

そしてかげつと冬子も加わり、ハハヒヒに来たのかを結衣と
美星は聞いてみた。

「かげつが冬子に？」

「突然保健室に来て、海に連れて行つてほしつて」

「でも、ジリシヒー！』がわかつたんですか？」

「私の線路離岸を甘く見ないで」

(なんちゅう先生だ……)

さすがの結衣と美星も呆れてしまつ。

「かげつちゃん、ひなたちゃんの旅行が心配で仕方なかつたみたい」

「やうだりつな

「どうしてですか？」

「三年前へひこになるかしひ」

冬子からひなたとかげつの過去のことにについて話してくれた。ひなたが成長しないのはかげつ自身のせいだと思い込んでいるらしい。それを聞いた結衣はみんなに……

「みんな、これから臨時の部活をしなうと頑張るんだけど」

גַּתְּנָהָרִים וְעֵמֶקֶת הַנִּזְבָּדָה

「いやなんどソレで部活なんてー。」

「もし、体調が悪くなつたときには中断する。それでいいかな、ひなたちやん？」

「おー。かげ、ひなは強いよ」

「姉さま……わかりました」

「がんばう、かげつちゃん」

「ついりのりひつ」の特訓は厳しいぞー

「大丈夫です。体力には自信がありますから」

「かげつちゃん、すうい自信だなー。私に勝てるかな?」

「別に京子先輩がやるわけじゃないのこ」

そんなわけで結衣の指導の下でひなたとかげつで体力勝負をする事になった。しかし、勝負は全部かげつが勝っていた。

「なんか、かげつちゃんすういよ……」

「ま、私はビリてわけでもなけどね」

「偉そうこ……」

京子の一言でジッパリを入れるだけな。

「おー。走った」

「どうかな、かげつちゃん

「この程度のメニュー。全然たいしたことあつません

「あつちもあつちで偉そう……」

またジッパリを入れるちなつ。結衣はかげつをほめた。

「すういね

「それより、そろそろ姉さまを休ませてください」

「ひなたちゃん本人が言つてるの?」

「え?」

「ひなたちゃん、まだやれやつ?」

「おー。全然平氣。まだまだ」

「//|バスの試合は24分ある。この程度ならみんな大丈夫だよ」

「でも、姉さまは……」

「かげ、マラソンしよ。ひな、かげと一緒に走りたいな

「でも……」

「走りたいな

ひなたの無垢なる魔性の前にさすがのかげつも逆らえず答イノセント・チャームえでしまつ。

「は、はい……」

そんなこんなでひなたとかげつは体操服に着替えて真帆の別荘から海の砂場までひなたとかげつはマラソンすることになった。

「大丈夫、ひなたちゃん?」

「おー。だいじょーぶ」

「私も並走するから」

「結衣さんが一緒に安心ですね」

「ただなー、ザッタんに勝てるかな?」

「どうして?」

「かげつちゃん、去年のマラソン大会学年一位なんですね」

「へえ、すばらしいね」

「それを言つなら結衣だつてクラスで一番早いんだよ」

「いばるとこじゃないですよ、京子先輩」

そして、準備が整いひなたとかげつはスタート位置についた。

「それじゃ、位置について」

「かげ、ひなが勝つたらもう口出しなさい」

「わかりました。じゃあ、私が勝つたら無理はやめてくださいね」

「よーい、スタート!」

真帆の合図で2人は走り出した。その2人の後を結衣が追いかけ

る。先にリードしているのはかげつの方だった。

そして別荘のベランダから美星と冬子とあかりが見ていた。

「結衣ちやんたち頑張ってね」

「ふふ、走つてゐる走つてゐる。一生懸命走つてゐる子供の姿つて素敵

「あなたも走つてくれれば?」

「あらー、こじわるねえ。私は子供たちも好きだけど美星ちゃんの」とせ……」

「よゐな、変態

「わつと這つて」

「なんかあかり……聞こぢやいけない」と聞こぢりつたかも……

「つふふ、もちろんあかりちゃんの」とも好きよ

「ふええ!?

そんな3人のやりとりをしてゐる間、ひなたとかげつはもう中間あたりにいた。しかし、それでもかげつの方がリードしていた。

(姉さま、あんなに息が上がつて……)

「本氣出しちゃ

「え?」

「ひな、かげの全力見たいな。だいじょーぶだよ。負けないから」

「でも……！」

「真剣勝負なんだし、本気だしあっても全然かまわないよ」

「……わかりました。本気で行きます」

ひなたのお願いに応えてかげつは本気で走り出した。そのまま差をどんどん広げていった。

「すごいな、かげつちゃん」

結衣もかげつの走りを見て関心していた。

その頃、智花たちは「ゴールの海の砂場にいて「ゴールの線を書いていた。

「やつぱり私たちも走ればよかつたかしい」

「ひなちゃんなら大丈夫だよ」

「はは、紗季。げったんの心配症が移ったのか？」

「私だつて信じてるわよ」

「結衣がいるんだし、大丈夫だよきっと」

「そりですよ。結衣先輩があんな生意気な子供に負けるはずないですもん」

「ちなつかちゃん……これはひなたちゃんとかげつかちゃんの勝負だから……」

「うん、絶対大丈夫」

その頃、ひなたとかげつと結衣は「どうとかげつがどんどん差を広げていた。気が付けばもう10メートルくらいの差になっていた。そしてかげつは走りながら昔のことを思い出す。小さいころのひなたと自分のことを。すると、もうゴール手前までのところで後ろを振り返るそこにはひなたの姿があった。

しかも差がすっかり縮まっていた。かげつも驚き、そのまま走つていいく。

その頃、ゴールで待つ智花たちは……

「あ、来た」

「お、結衣たちだ」

ひなたとかげつと結衣がゴールの方に来ていた。そして、みんなはひなたとかげつを応援する。

結衣も見守る中、2人は最後の全力を振り絞った。そして、2人とも同じタイミングでゴールした。

その瞬間、みんな一斉に「ゴール」と叫んだのであった。2人は力を出し切ったため地面に膝が付いてしまう。

「姉さま……」

「ひな……楽しかった。やつと……かげと走れた」

「はい……姉さまのラストスパートす」かつたです」

「おー。かげに褒められた」

「もう、私がいなくとも姉さまは大丈夫なんですね」

「どうしてひとつ?」

「え?」

「1人はだめだよ。みんな一緒にいい。まほもともかわきもありもかけと一緒にじゃなきや。ひなうれしい。走るの苦手だったから。ひなと遊んでもかけは楽しくないと思つてた。心配かけてごめんと思つてた」

「そんなこと……」

「ひな、こっぱい走れるよつになつた。だから、これから一緒に遊ぼ

「…………はい」

「おーし、みんな戻つたらお風呂だぞー」

真帆の別荘に戻りついた瞬間、かけつは結衣に声をかけてきた。

「あの、これこらすみませんでした」

「ハハん、大丈夫だよ」

「姉ちゃんの」とよひじへお願ひします」

「わかつしる。それとあまり自分を責めちやだめだよ」

「え?」

「かげつかやんがつりことひなたかやんも辛くないと感つかい」

「あつがとハジマるこます。これからは姉ちゃんをこゝぼこ応援できる
と思こまわ」

「やつか」

「ま、ひなたかやんの」とも私におまかせだよ」

「だから、京子先輩が全部教えるわけじゃないの?」

その頃、あかりはとこつと……

「うふふ、あかりちゃんも可愛い」

「ちょ、美星先生助けてーー。」

「すまん、あかり……」

「そんなあーー。」

あかりは冬子に抱きしめられたまま襲われていたのであった。

結構長くなってしまった。

お風呂のシーンはラッキースケベをかけるといがないため省き、代わりにあかりと冬子のラブ・ラブ（？）シーンで終わらせました。次回の本編は活動記録で教えたとおり、アニメー0話から1-2話の話を飛ばして原作6巻の話になります。

夏のキャンパー（前書き）

「」からアーメの話ではなく原作6巻からの話です。

今僕は原作7巻を読んでいます。

原作9巻は修学旅行の話だといった感じもあるゆつの修学旅行の話を入れてみようと思います。

夏のサンティー

朝、あかりの家にて、結衣と智花は今日もあかりの庭を借りてバスケの練習をしているのだった。

結衣の家はマンションなため練習できる場所がなく、京子の家もちなつの家もバスケの用具がないため唯一あかりの家だけが練習場所となっている。

練習が終わり、玄関にてあかりが出迎えてくれていた。

「練習お疲れ様」

「『』めんね、あかり。こつも庭を使わせてもらひやつて

「つうん。あかりは結衣ちゃんと智花ちゃんが毎日来てくれるだけでうれしこよ。智花ちゃん、シャワー浴びてきたら?」

優しそうにあかりは智花に気配りをした。しかし、智花は外履きの靴ひもから手を放すと

「……いえ。結衣さんが先に」

中腰のまま優しく微笑んだ。でも、結衣は申し訳なさそうに智花に言った。

「いや、智花ちゃんが先にシャワー浴びてきなよ。汗もかいしたことだし。風邪ひかせちゃいけないから」

「……するこです。そんな言い方

結衣の言葉に拗ねたような声で小さく抗議した。

「わかりました。厚かましくて申し訳ないですけど……。その代わり」

すぐさま眉尻を下げる笑みを見せてくれたのち、不意に何かを言つてきた。

「その代わり？」

「実は先週の金曜日に算数の宿題が出たんですけど、どうしてもわからない問題があつてその……」

「教えてほしいことがありますかな？」わかつた。あとでやつてあげるよ

「……………ありがとうございます！」

「そんな大げさな……」

「じゃあ、シャワーの後で飯食べてから勉強しよ

「はいっ！」

返事をした後、バスケットシューズを丁寧にそろえてから小走りで浴室の方へと向かった。

そして結衣とあかりはあかりの部屋に行き、智花を待つことにした。

「もう数か月になるか……バスケのコーチをしてから

「そうだね」

「最初は美星先生のお願いを京子が強引に引き受けたから私は毎日智花ちゃんたちの「一チをしてきた。そして私はあの子たちから私のバスケへの想いを思い出させてくれたんだ」

「そういえば、結衣ちゃん一度やめちゃつたもんね」

「来年になつたらや、また本格的にバスケをしようと思つてるんだ。あの子たちの「一チを終えてから」

「その時はあかりたちもバスケしていいかな?」

「それはもううんオッケーだよ」

「ありがと」

「うれしそうにあかりは言ひ。すると、あかりは智花の親御さんのことを結衣に聞いてみた。

「やういえば、智花ちゃんの親御さんってどう思つてるのかな?」

「私も一度もあつていないから何とも言えないな。確か智花ちゃんの親御さんって日本舞踊や茶道の稽古を習わせてるんだよね」

最初、智花が家に来た時に聞いたので結衣とあかりは知っていた。親御さんることを話していると、ドアからこんこんと控えめなノックの音がした。

「智花ちゃん、上がったの？」

結衣が呼びかける。

「はーつ。すつきつしました」

すぐさまあかりはドアノブを回し、扉を開ける。

「別にノックしなくてもそのまま入ってきていいんだよ。今家は私たち以外誰もいない」となんだから」

「うーんめんなさー……」

別に謝らなくても とあかりは言いそうになつたのだが、結衣がまた智花が謝つてくるんじゃないかと思い、言いかけた。

「次は私がシャワーを浴びてくるね」

「うん。智花ちゃん、何か見たいテレビないかな？ ゆうひーリビングにテレビがあるから」

「えー？ い、いえっ！ ベ、別にみたいテレビはありませんし……！ 今観なくとも……ぐ、ろく……一、六・じのみんながあらすじを教えてくれますし……」

アニメを観ることを恥ずかしいと思つてゐるのかと結衣は思つた。別にアニメを観ることなんて恥ずかしいわけでもないと思つて結衣は智花に……

「別に京子だつてミリカくるん観ててゐるんだし。アニメを観ること隠

さなくてもこいんだよ。私だって面白こと興ってるんだから

「……え! ? 結衣さんも観ていろんですか?」

微笑みながり言つた結衣の台詞に智花は驚いてしまう。しかし、結衣はそのアニメをちゅうとしか観ていなくまったく覚えていない。

なんとか誤魔化すと記憶の部分のシーンだけを浮かべながら智花に言ひ。

「うーん……、最初は敵だったやつが最後の方で味方になつてそれから……」

「三番目のシリーズですね! 私、その時はまだ観ていなくて、真帆からDVDを借りて本当に感動しました! やっぱり仲間つてほんとです! あああああ! ? なんでもあります! 」

「ふふ、じゃ私はシャワー浴びてるからあかりと一緒に観ていて

「はわっ! えっと……ありがとうございます! 」

「じゃあ、行こつか智花ちゃん

「は」

まじつきながらも結衣とあかりにお辞儀をし、智花はあかりと一緒にリビングの方へと行き、テレビを観ることに。そして結衣はシャワーを浴びることになった。

その後、朝食を済ませ、あかりの部屋にて智花の宿題のお手伝いをすることにした。

「みんなほとんどやつててるみたいだね」「ね

「は、はこつ！ 本当は昨日で全部終わらせる予定でしたが最後の問題がどうしてもできなくて……」「

「智花ひかわえらーい」

あかりは智花をほめると照れながらもお辞儀する智花。結衣はあかりと智花を見てみると京子のだらしなさを思い浮かべてしまつ。

(一)の2人はきちんと宿題をやつててるのに京子は……

それほどもかく、さつそく智花の宿題を見てあげることにした。算数の宿題を見て教えていこうとした瞬間

「え……えつと……」

「どうしたの？ 結衣ちや……」

「……結衣さんもあかりさんもどうしたんですか？」

「…………」「…………」「…………」「…………」

「――で2人の脳が止まってしまった。プリントの最下部のチャレンジといつ問題を見てみるとそれはとても小学生レベルとは思えな

い……むしろ、中学生レベルそのものだつた。

これは解けないわけだと結衣とあかりは思つてしまつ。2人は慧心学園のレベルを思い知ることになつてしまつた。

しかし、このままではわからないままで終わつてしまつのも申し訳ないので結衣はあかりから数学の教科書を貸してもらい、問題を調べようやく解いたのであつた。

思つてたよりも解くのに時間をかけてしまつた。ほつと一安心しあかりが下から飲み物を持ってくると言つて部屋を出でていつた。

(あやか……このまで難しいとは思わなかつたな……)

そのまま、宿題を教えていくが気が付けばもうお昼の時間となつていた。結衣と智花は立ち上がり、リビングの方へと向かおうとした。

「「、「ごめんなさい。長居してしまつて……」

「ううん、大丈夫だよ。もうお昼だし食べていいく？ 午後から予定とかつて……」

「いえ、何もないんですけど、でも」

「じゃあ、あかりに頼んでくるよ。そういうえば、飲み物持つてくるつて言つてたのにあかり戻つてきていいな……」

「あ、あの……」

結衣はそのまま階段から降り、台所の方へと向かおうとリビングの方へと行つた。

「あかり、お昼飯なんだけど……」

その時、いつもとは違つ光景に結衣は止まつてしまつた。そこには見知らぬ女性がリビングの方に座つていたのだった。
いつの間にか来客があつたらしい。智花との宿題で全然気づかなかつたのだった。

「えつと…………すみません、取り乱しちゃいまして……」

その後もなんていえば分らない結衣。静かにほほ笑む女性はとても若々しく、20代に見えて、肩の上で柔らかく一房に束ねられた長い髪と、小柄なまつすぐしゃんと伸びた背筋がたまに流れるお茶のCMを連想させた。

まるで女優のような姿であつた。

「あなたが結衣さんね、初めまして」

「は、初めまして……」

どうやら結衣のことを見つけていたらしい。思わず結衣は挨拶をしてしまつた。きっとあかりが教えたみたいだが、本当にこの人は誰なのか気になつて仕方がなかつた。

「あ、結衣ちゃん」

「…………」あかりが台所からやつてきた。

「あかり、この人は？」

「あのね、この人は

「

「あの、……やつぱつ」迷惑なのでは

あかりが話すとした瞬間、智花がやってきた。

「え……？」

智花の来客を見て結衣と同じように口を止めた。しかし、結衣とは少し違った反応だった。

その後、みるみる驚愕の色へと染め上げていった。

「お、お母さんッー！」

普段とはまったく裏腹のうわすつた声を響かせたのだった。しかし、結衣も智花の言葉に驚いてしまった。

「ええええー？」

「つふふ、自口紹介が遅くなつて」「めんなさいね」

驚きのあまり固まつてしまつ結衣。その後も智花の母親は深々と頭を下げる。

「智花の母、湊花織です。結衣さん、娘がお世話になつてこます」

夏のサンターラ（後書き）

「」で智花の母親の登場です。

原作にそつたのですがやはりNBAスーパープレイが書けません。
。。

智花の母親と買い物（前書き）

正直、この小説を書いたときまさか他の方もロウキゅーぶを読んでしかも昴×智花が多かつたため書きづらくなつた時もありました
が、それをはねのけ、今もこうして執筆を頑張っています！

最初、昴とゆるゆりメンバーを同時にだし、一緒にローチをやめようと思いましたが、昴にはゆるゆりメンバーたちに手を出させてほしくないという理由で昴を省き、百合小説となつたんです。

智花の母親と買い物

まさか、智花の母親があかりの家に来ているとは思わなかつたため、結衣も智花も驚きでいっぱいだつた。

その後、4人でお話することになつた。

「でも本当に」「めぐなさいね。智花つたら毎日お邪魔しちやつて。うちの庭、可愛そうだけどどうしても『ゴール』を置いてあげれないものだから……。結衣さん、あかりさん、まだ子供で練習相手にならない迷惑でなければ、娘のことをどうぞよろしくお願ひします」

「いえ、結衣ちゃんも智花ちゃんといっぱい練習したいって言つてますから。結衣ちゃんもあかりも大歓迎です」

先ほどから智花の母親・花織とあかりしかしゃべつておらず、結衣と智花は共に能面のよつたな笑みを貼り付かせてお茶をするばかり。

どうしてあかりはここまでしゃべれるのか不思議でいっぱいであつた。普段はあまり目立つていないあかりだが、いつも時だけ目立つていた。

「結衣ちゃん、花織さんから美味しいそうなお豆腐をもらつたんだよ。しかも花織さんの手作りなんだって」

「そんなお構いなく！ 私が下手の横好きでこしらえたもので、不恰好で逆に申し訳ないくらいですから……」

結衣は豆腐のお礼をしようとしたものの口をはさむ間を見いだせなかつた。それにしてもよく話をするものだと思つてしまつ。

すると、あかりが結衣に声をかけてきた。

「やつだ、結衣ちゃん下りてきになにか言いかけた」なかつた?」

あかりの一言で会話は中断し、結衣はまつと気が付きあかりに言った。

「あかり、お昼ご飯なんだけど智花ちゃんの分を作つてほしこうて言いに来たんだ」

すぐさま、自分の目的を果たす結衣だが、それを聞いた智花は辞退を表明した。

「こえつ、やつぱつもつ家に帰りますー、ね、お母さん」

「やつねえ、あまり長居しても」迷惑でしょ「つし、やつやうお暇しましょうか」

花織も智花と同じ意見であった。しかし、今この家には結衣とあかりだけである。あかりは2人の説得に打って出る。

「大丈夫ですよ。今は結衣ちゃんとあかりだけですし、じぎやかになつた方がもつと楽しいですよー。せつからくお豆腐もいただきましたし」

「いえいえ、お豆腐は結衣さんと2人で食べてください。大してそんなに量もありませんし……」

「お昼ご飯はお鍋にしようと思つてますのでちょうどお魚もたくさんありますから。あまり滅多にお鍋はしませんので、2人もゼひ

(お皿に鍋か……。でも、4人だしちょりどこいかな)

普段はあまりお皿に鍋なんてしないのだが、今回は智花と花織もいるんだからまあいいかと思う結衣。

摔倒すかのようなあかりの視線に花織は悩ませていたがふつと表情を和らげ娘の智花に尋ねる。

「…………お皿にせんべいやおつかしり」

花織の言葉に智花は申し訳なさそうに「クツトウなずいた。

「よかつたー。じゃあ、買い物は……」

「私が行つてくるよ。あかりは花織さんと智花ひやんと一緒に留守番してくれるかな?」

「はーー」

すぐさま準備をしてひよする結衣。すると、花織が結衣に……

「あ、それなら智花を連れて行つてください。この子すくなく持ちだから、荷物持たせても平氣です」

「お母さんー、変なこと言わないでー。」

いつして、結衣と智花で一緒にスーパーまで買い物に行へりととなつた。

「あつ……」

「どうしたの?」

スーパー・マーケットにたどり着く少し手前で智花がいきなり驚いたような声をだし、結衣は顔を覗く。

「携帯電話、おいておひやいました……。でも、大丈夫です。お母さんには行き先をちゃんと教えてありますので」

「そつか。でも、私携帯持っているからいつでも連絡できるから心配しないで」

そうですね、と智花は頷き、踏切を渡り、大通りを目指す。

「それにしても暑いね。智花ちゃんは平氣? 日傘くらいは用意してあげたかったんだけど」

もう梅雨も明けて、この日の太陽はざらりと輝き、熱光線がじりじりと注ぎ続けていた。

「はい、大丈夫です。……それに私に日傘なんて似合いませんよ」

くすっと笑いながら結衣に言い返した。そして結衣も言い返してきた。

「ううかな？ 日傘も似合っていると思つてるけどね」

「ふえ」

智花を見つめ続けた結果、そういう描写が思い浮かんだことを言った。やはり今日の服装と日傘の親和性が抜群だと思つていた。

その後も結衣は「こんなことを……

「それと帽子もいいかもしれないな。どっちも紫外線対策に十分なものだし つて智花ちゃん？」

「……い、いえ」

見てみると智花は深くうつむいていて頬を真っ赤に染めあがつていたのだった。それを見て心配した結衣は智花に言いかけた。

「智花ちゃん？」

「あ！ つ、つきましたね！ はうつ！」

「うわ！ 大丈夫……？」

声をかけた途端、智花は到着したばかりの大型スーパー入口のガラス扉に勢いよく飛び出しが、そこは自動ドアではなかつたため、衝突してしまつた。

「うう……。今日の私、ひどい……」

両手で顔を覆つて嘆く智花。けがはなかつたが、逆に大恥をかいてしまつたようで顔が赤く染まつていた。

結衣はあまりこういう智花の姿を見ていないため微笑ましく思つたりもする。

「花織さんって日本舞踊の先生なんだ」

「はい、私も少しだけ習つています」

2人で智花の母親、花織のことを話し合つていた。カートを押して野菜を物色していた。どうりで立居振舞がどことなく上品で落ち着いて見えるわけだと思つ結衣だつた。

「でも、バスケのことは応援してくれてるみたいでよかつたよ」

「はい！お母さんは、自分が一番好きなことを一番がんばれつて言つてもらえます。だから舞踊は無理して続けなくてもいいって……あ、でも嫌いじゃないので、あきらめたいなんて思つてないんですけど」

「そつか

”お母さんから”……。この言葉を聞いた結衣は何かに引っかかっていた。でも、今はお買い物しているので気にしないことにし

た。

「これで野菜はいいな。あとは魚だけか」

「ですね」

長ネギをかごに刺し、カートをヒターンさせて最深部へと向かっていく。

「もともと魚屋だったんだけどスーパーになつたんだって」

それはずっと昔、結衣がまだ幼い頃であった。その頃ははつきりとは覚えていないものの、その時はスーパーではなく魚屋であったところ。

その名残があつたためか鮮魚コーナーには特別に力を入れているらしく、新鮮な魚が多く横たわっていた。

「どれどれ……つてなんだこれ」

あかりからもらつたメモを見るとそこには『おいしそうな魚』と
いうことしか書かれていなかつた。

「ふふ、お魚は特売品が毎日違つからだと思いますよ」

それを聞いた結衣はなるほどないと想い、横たわっている魚を見て
いた。すると智花が……

「……あ、結衣さん。このエビお買い得みたいですよ。ブラックタ
イガー」

手乗りサイズなのにやたら強そうな名前のエビを聞いたとき、この前京子が葉っぱで作った『ブラックタイガーエビ』という船を思い出していた。

なんだか、ある人気アニメの主人公が作ってその名をつけたと言っていた。しかし、なんのアニメなのかは聞いていなかつた。

「ありがとう。エビはこれだけでいいかな？ 他に何かあつたらいつでも言つて」

「ええと、たぶんいいはずですが……。でも、すじーですね。エビだけでもこんなに種類がたくさん。……あ、見てください結衣さん、あんなものまで！」

智花が指差した方を見るとティスプレイの最上級に飾っていたのは『伊勢エビ・一尾3600円』の札。

「まさか、伊勢エビまで……。でも、あれは高いからちよつと……」

「へ、そうですね……。あれは結婚式にしか食べられないですしを入れてしまひ。

……

智花の発言で思わず驚いてしまつ結衣。その後も思わずツッコミを入れてしまひ。

「どうこう」と……？

「ええと……。つまり私と結衣さんが結婚するときにあの伊勢エビを食べるつて……あああああ！ 私ったら何言つてんの～～～～～？」

「お、落ち着いて！」

パニくる智花をひとまず落ち着かせ、その後も鮮魚コーナーを見て周り、魚をカートに入れていき、レジに行くことに。カートを運んでいた、レジに進んでいくと智花が……

「あ」

智花がいきなり足を止め、呆然と正面を向いたまま立ち尽くす。

「どうしたの……？」

結衣もすぐに同じ方向を向いた。そこにはほんの数メートル先でお徳用チョコビスケットの袋を抱きしめたまま、きょとんといちからを見つめる少女の存在に気付いた。

栗色の髪を二つ結びにした、子猫のようにあどけない顔つきの女の子、そしてその隣には佳長い髪を三つ編みに結った眼鏡の少女がいた。

その少女たちは結衣は知っていた。

「真帆ちゃんに紗季ちゃん。どうしてここに？」

見まがう余地もなく、慧心女バス部員の二人であった。

「……」

「……」

無言が続いた。その後、真帆と紗季は互いに見詰め合つてアイコンタクト。それからくると後ろを向き、結衣たちとは反対の方に

歩み去る。「

「……あの」

△惑いながら動向を田で追つていると、5歩ほど歩いたところまで
真帆がわざとらしく髪を書き上げるようなしぐれと共に、

「新婚や～ん、いいらつしゃあ～いー。」

「ええー?」

真帆の言葉に驚く結衣。続いて紗季が竊めるように、

「バカ! そつとしてあげないとー!」

そんな台詞だけを残し、2人は陣列棚の影に消えていく。

「ち、違ひー 真帆、紗季、誤解だよー。」

その後も智花は2人を全力で追いかけていったのであった。

智花の母親と買い物（後書き）

なんか、修学旅行の話を書きたくなってしまった……。
万里の話を省き、小5の女バスの話を書いたら書いひつと考えています。

番外編 千鶴初めての女バス（前書き）

今回は番外編です。

ここで千歳の双子の妹、池田千鶴が初めて登場します。

番外編 千鶴初めての女バス

ある日の放課後、ある七森中の生徒が慧心学園へと足を運んでいた。その人物は……。

「……ここか

千歳の双子の妹、池田千鶴であった。実は数日前、千歳に女バスのことを話してくれてその女バスに興味を持ったため来ていたのであつた。

「姉さんが前に話してくれた慧心学園……。それと歳納なんたらの話はむかついたが……！」

もちろん、京子と綾乃が付き合つことも話してくれている。その時はものすごく悲しんだのだが、姉さんが幸せならいいやという理由であきらめている。

この時間帯はまだ娯楽部のメンバーも来ていない頃であった。千鶴は門を通り、体育館に向かっていった。

そこからバスケットボールを弾む音が響いていて、ゴールに入った音も聞こえた。ここが女バス部の練習場所だと一目でわかつた。さっそく、扉を開け、中を見てみることにした。

ガラツ

「ん？」

千鶴が体育館に入った瞬間、女バスのメンバーのだれもが振り向いた。そして、そのまま千鶴に近づいてきた。

「あ、千歳さん」

「おお、せつちー！」

「お久しぶりです、千歳さん！」

「おー、ちびちゃんねーちゃん」

「お久しぶりです」

女バスの誰もが千鶴を千歳だと勘違いしていた。すると、アイガードをしていた長い髪の子、紗季の様子が変わった。

あれ？

「どうしたの？」

なんか、いつもの千歳さんと少し違ひなうな……」

え？ いつもの世
一
ちーじせんか

一
でも

あれ?
ほんとだ。
なんか目の色が少し違う.....」

う。 ピンク色の髪で、左の髪にリボンを結んでいる女の子、智花が言

「おー？」

「……紹介が遅れたね。私は池田千鶴。千歳は私の双子の姉さん」
「…………ええええーー？」

千鶴の紹介を聞いたとき、女バスの誰もが驚いてしまった。その後も、取り乱しながらも自分たちの紹介をすることに。

「慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆でーす」

「永塚紗季です」

「香椎愛莉…………です」

「ひなた、袴田ひなた」

「よろしく。姉さんのことはいろいろとお世話になりましたね」

「はい、今宿に愛莉のことばかりお世話になつたね」

「それにしても、千歳さんに双子の妹さんがいたなんてびっくりしました」

「ほんとに似てるなー。ちづりちゃんとせつちー」

みんな、千鶴に興味深々であった。まさか、千歳に双子の妹がいたなんて誰も思いもしていなかったからである。すると、ひなたが千鶴に質問してきた。

ପ୍ରକାଶକ ପରିଷଦ୍ୟ ମହାନ୍ତିରିତିରେ

「この前、姉さんに女バスのことを話してくれて、それで興味を持つてここに来たんだ」

「そうですか」

「ちょっと見学していいかな？」

「もちろん、いいですよ」

「ありがとう」

千鶴は体育館のステージの上に座り、みんなの練習するところを見学することにした。見てみると、それは真剣そのもの、やはり部活だけに真剣に取り組んでいた。

(やはり、真剣にやつてるな……)

そして休憩にはいり、真帆は千鶴の方へと向かつていつた。

「おづひち、今日はゆいにやんたちは来ないの？」

「えっと、私と船見さんたちは違うクラスだし、何やつてんかさつ

「そつか」

「心配しなくとも、結衣ちゃんたちが来ぬよ」

「じゃあ、休憩終わつたらまた練習しようつか紗季」

「…」

紗季といつた瞬間、千鶴は食いついてきた。すると、千鶴は紗季に話しかけてきた。

「ねえ、ちよつと話いいかな？」

「ええ、いいですよ」

実は、前に千歳と話した時の紗季といつた子が京子と綾乃の恋に協力してくれたと聞いた。

その紗季に京子と綾乃のことを見いた。

「君が協力したんだよね。歳納何たらと杉浦さんの……」

「ああ、京子さんと綾乃さんですか。もともと千歳さんが綾乃さんが京子さんのが好きだつてことを聞いて私たちも協力しようつと思つたんだす」

「……」

紗季の言葉に少し暗い顔になつてしまつた千鶴。心配した智花が声をかけてきた。

「どうしたんですか？」

「その……私は……」

今ここで千鶴が千歳と綾乃の恋を応援していたことを智花と紗季に話した。

「そうですか……」

悪こ」としてしまったなと落ち込んでしまひ智花と紗季。しかし、千鶴はいつもと頭を振つて言つた。

「いいよ。姉さんも幸せだつて言つてたし、それにもともと杉浦さんが歳納何たらに好意を寄せていたことはわかつていたよ」

「千鶴さん……」

「そろそろ行くかな……」

「もう少しだけ見てこつてよー」

「でも、長くこると迷惑じゃあいません」

「大丈夫ですよ。全然迷惑じゃあいません」

「もう少しだけ見てこつてよー」

「……わかった」

「やつたー！」

女バス部たちの説得で見てみる」となつてしまつた千鶴。また練習姿を見る」となつた。

見てみると、仲もよく楽しそうにバスケをやっているみたいだつた。ここで千鶴は眼鏡を取り外した。

「…………」

千鶴は今、女バス5人の百合妄想をしていた。そのため、よだれがでていた。説明しよう、眼鏡を外して視界を遮り、神経を集中させて本格的な妄想に入り千歳とは異なり、よだれを垂らすのだ。ここで紗季が千鶴がよだれを垂らしていることに気が付いた。

「ち、千鶴さん、よだれ出てますよ……」

「でていない」

「いや、でありますよ」

「なるほど、せつひーとは違つてひづひづよだれを垂らすのが一

「おー。うづるのもーそーもーど

「でも、鼻血よつはマシのようなぐんなこうな…………」

ガラッ

「あれ？ なんで千鶴がいるの？」

「ここで結衣たちがやつてきた。」

「あ、ゆこにやん遅いよー」

「おーい、千鶴ー！」

「」で京子が千鶴にスキンシップをとるのと千鶴に近づいてきたが、千鶴は京子を殴り飛ばした。

「しつこい……」

「もう千鶴つたらー」

（杉浦さんがくるの、ここには……）

「遅くなつてごめん。それじゃあ、今日の特訓に入ろうか

「」「」「」「はい」「」「」「

生き揃えて返事をし、さっそく結衣たちは体操服に着替えようと更衣室に行つた。その後、千鶴は鞄を持って帰ることにした。

「じゃ、これからもバスケ頑張つて」

「はい」

「私も悔しいけど、アイツと杉浦さんの恋を応援してる。姉さんの幸せのためにも」

「ふふ、お互いがんばりましょ」

「うそ」

紗季にさよならを告げ、千鶴は家に帰つて行つた。

その夜、千歳と一緒に夕食を食べっこり、女バスのことを千歳に話した。

「そうなんやー。 それあの子たちひめやつた？」

「みんな良い子たちばかりだったよ」

「うふふ、ひめは」

今日も仲良く話をしてこたのだった。

買い物での会話（前書き）

大変長らくお待たせしてしまって申し訳ありません……。

それではどうぞ

買い物での合流

「なーんだ、お使いかー」

2人を全力で追いかけて、捕まえて事情を説明すると真帆がつまらなそうに口先をすぼめる。

「ふふ、まあそんなことだのうと思こましたけど」

紗季の不敵な笑みを見て智花は焦りをぬぐいきれなまま、軽く頬を膨らませる。

「わへ、こじわる……」

「『めん』『めん』。けど、トモが誰にもメールを返さないのも悪いんだからね。あんまり変身遅いから少し心配してたのに、知らん顔で結衣さんといちやいちゃしてるとんでもん。お仕置きでひとつとからかいたくなつても仕方ないじゃなし」

「せうこえば、さつき智花ちやん携帯忘れたって言つてたね」

「え、そつだつたのー? 『めんね! 私携帯電話置き忘れてあちやつて……』

「じゃあ、しょうがないわね

「へ、うふ……」

その後も結衣は真帆と紗季がどうしてここにいるのか聞いてみる

とどうやら美星のために買い物に来ていたといったのだった。それを聞いた結衣は呆れかえる。

「あの人も京子みたいで……」

「いえいえ、ご飯作るのはただのついでですし、迷惑とかは全然」

「ねーゆこにゅん、もつかん、じゅかじゅかー アイリーンヒナ
モコルから会こにじー」

紗季との会話の途中に真帆が割って入り、二つ結びをなびかせてスキップ君に全員を手招きした。

「もう、勝手なんだからー 『ごめんなさい、落ち着きがなくて』

「ううん、それに愛莉ちゃんとひなたちゃんがいるなら挨拶にいかないとな」

「はーー！」

紗季は呆れた顔をしつつも真帆を追いかけ、四人で移動を開始する。商品棚をいくつかやり過ごすとドリンクコーナーで炭酸飲料を真剣に見比べている愛莉とひなたの姿があった。

「おー？ オネーちゃんともかだ」

眞づいたのはひなたの方で背伸びして小柄な身体を持ち上げ、驚きと喜びを表すように両手を高々と振っている。

「イヤイヤ」

「ヤーヤー」

遅れて結衣たちを見た愛莉の方はちゅうと伸びた長髪をすくませながら、なぜか少し哀しそうに眉根を寄せて小声で一言。

「……し、新婚、なん?」

「なんで…?」

「だ、だから違ひでばー。」

愛莉の言葉にツッコミを入れる結衣と智花。

「じゃあ、私たちはやるやる行きます。トモも一緒に遊べればよかつたんだけど、今日は仕方ないわね」

6人で立ち話をしていると、紗季が頃合いを見計らって結衣と智花に別れを告げた。

「えーー もつかんも行こりょーー。」

真帆は不服をあらわにしてこりりに駆け寄る。困惑する智花。紗季は大きくため息をつき真帆の顎をつねつていさめにかかる。

「トモ、今日は『勝負の日』なんだから邪魔しちゃダメでしょ」

「勝負があ、仕方ないか」

(勝負の口ひてなんだらう……?)

勝負の口ひて言葉に疑問を抱く結衣。当然、智花は取り乱した。

「だ、だからそんなのじゃなこつてばー!」

「ふふ。まあそれはともかく、今日は先に約束があったんだから無理には誘えないわ。みーたんちはまた今度ね」

奢めつつ、みんなに田配せして出立を促す紗季。

「おー? ともか、行かないの?」

「…………」めぐなさこ。また明日ね?」

「うふ。…………残念だけどしようがないよね」

4人がひとかたまりとなり歩き出す姿はとても寂しそうな雰囲気であった。これを見た結衣はさすがに放つておけずに声をかけた。

「ちよつと待つて」

「はい、なんでしょう?」

「提案だけど、みんなもあかりの家に来ない? そんで昼食を食べて、それから美星先生の家に遊びに行けばいいじゃないかな? 食事もあかりに作ってもらいうように頼んでおくから、それで晩御飯を

届けてやればいいから。どうかな?」

「ぬーあんだなゆいにゃん! あたし賛成!」

「おー。あかりおねーちゃんか、行きたい」

「」の思につきで真帆とひなたは賛成してくれ、愛莉も表情を華やがせる。しかし紗季と智花は少しだけ恐縮したようであった。

「でも、」迷惑では……?」

「大丈夫。あかりも喜んでくれると思つから美星先生にも私が電話しておぐよ」

説得を重ねる結衣。すると2人も提案を受け入れる気になつてくれてうれしそうな顔を見せた。

「よつしゃーー ジャーしゅつぱーつー ゆいにゃん! 荷物一個持つてあげるー」

「あ……、別にいいのに」

結衣の持つているレジ袋を強奪し、先攻して駆け出した真帆を追いかけ、賑々しく6人で移動を開始する。

そのせいがあかりの家まで距離が近く感じたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2220v/>

ゆるい口ウきゅーぶ

2011年11月24日20時55分発行